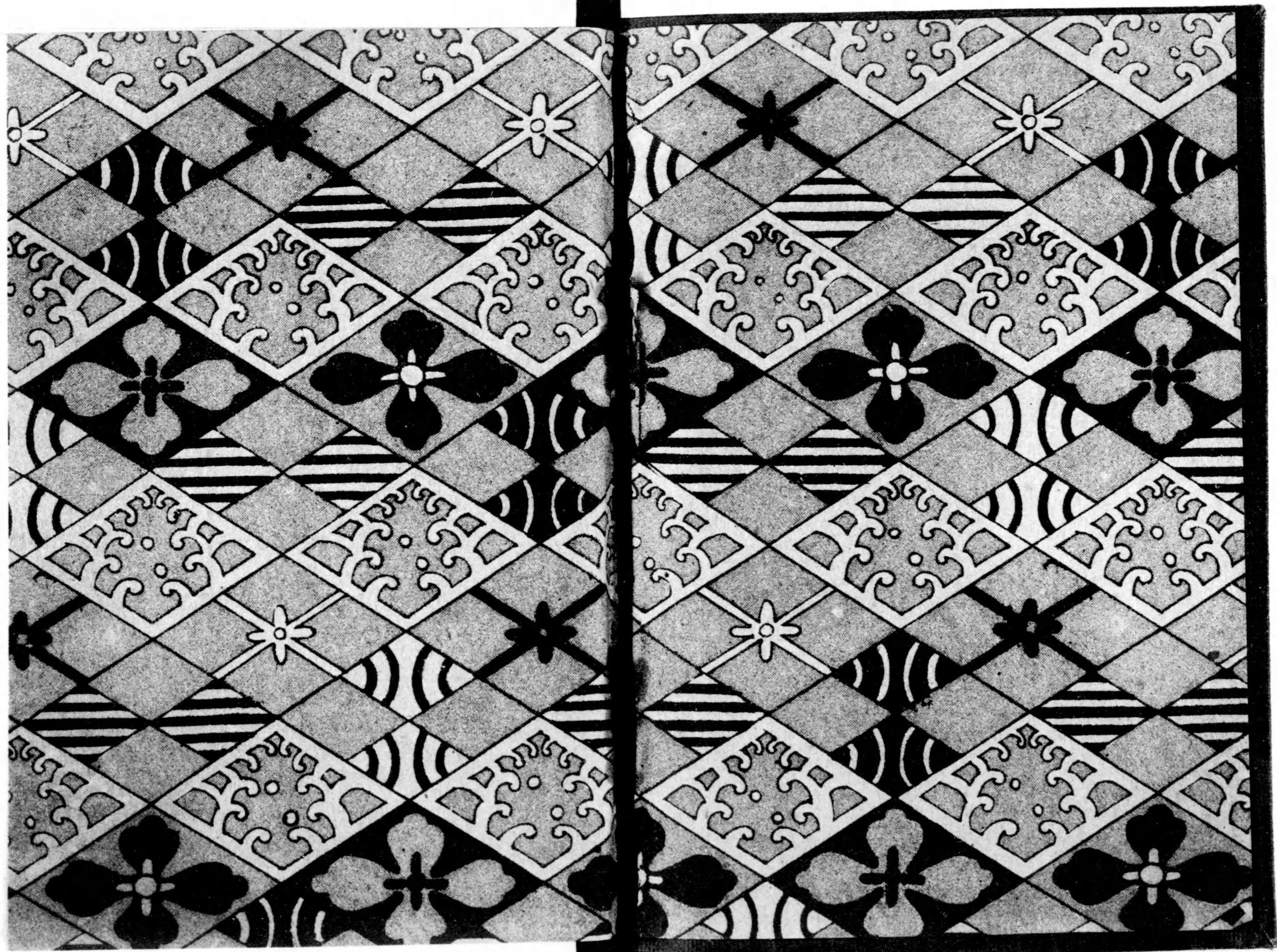


大正又厚  
の隱身術  
天風五郎



始





特100  
64



隱身  
の術  
天風五郎

大正  
7. 10. 21  
内交





天風五郎

天風五郎



目 次

□ 残念ながらもうこれまで……………一

□ 乃公が射殺して遣るぞ……………九

□ 此の書祿老奴ツ……………一八

□ 天風の術と名づけてある……………二三

□ 妙術を試めして遣らう……………三三

□ 日が悪い出直して来い……………四一

□ 乃公が貢つて行つてあげる……………四八

□ 飛び入り……………五五

- オ、天の風と呼んでくれ……………六三
- 今日の關は天の風……………七〇
- これが八方遠當ての術ぢや……………七六
- 一手比べて見ん……………八五
- 恐ろしい妙な男ぢや……………九三
- 大きな聲を出すな……………一〇一
- 乃公が打ち殺して遣る……………一〇八
- 酒を出せ……………一一五
- 此奴よくも殴り居つたな……………一二三
- 無益の攝生するな……………一三〇

- 然しあの風は特別だろ……………一三七
- 乃公が少し考がへがある……………一四三
- 貴公が大久保彦左衛門か……………一五一
- よくも飛び廻る奴だ……………一六五
- 少しは名ある奴であろう……………一七三
- オ、貴公は坊主山か……………一七九
- 奇麗に叩き潰してくんな……………一八七
- 忍術遣ひ揃ひだな……………一九五
- なんだあの位の風の……………二〇一
- 一つ腕前比べをして遣ろ……………二〇九

- 桂市兵衛が引つ捕へて遣るぞ……………二二六
- どうやら忍術遣ひらしい……………二三四
- ヤア珍らしや上山源左衛門……………二二二
- オイ〜何んだか怪しいぞ……………二二六
- 十分折檻して遣られい……………二二六

目 次 終

の隱身 天風五郎

辰々堂編輯部編

◆ 残念ながらもうこれまで

麻と亂れた戦國時代には、武術は尤も尊重され、其の道の名人達人の輩、ソク〜現はれ、忍術家、妖術家などは多く變名（之れにはいろ〜事情もある）を名乗り、思ふ存分天下を暴れ廻り、其の名を轟かしてゐた、就中鶏群中の一鶴とも云ふべきは本編の主人公である、其の系統と云ひ度量と云ひ天つ晴れ得難きの勇士、殊に仙人より授かりし奇々怪々なる妙術を以つて、其の時代の勇士豪傑、又は諸大名まで其の荒膽を寒からしめたと

いふ怪傑、其の素性、及び妙術とはどんなものであらうかイテヤこれより其のキビくとした面影を見参に入れるとしやう。

稀世の大英傑豊臣秀吉、一合の土民より身を起して殆んど六十餘州の全權を掌握したが、未だ東國奥州の地は其の威に服さない、殊に相州小田原の北條家は、早雲以來の名家、關八州の大領主として小田原に本城を構へ、支城九十八城もあつて、度々天下の權を握らんと望んだ位であるから、秀吉の勸告に従はない、尤も家中一族老臣の中には、主戰論者に非戰論者の二派があつたが、領主たる氏政氏直の父子、多寡が土民上りの猿面冠者、如何程の事やあらんと、遂に豊臣勢を引き受けて一戰なし、アワよくば此の機に乗じて都へ登らんとする野心、其の兵備オサク、怠りなかつた、此方秀吉は九州四國を征服した勢を以つて、自から二十有餘萬の大軍を率い、海道一の名將と呼ばれた徳川三河守家康を先陣として、天正十八年四月中旬、小

田原本城を攻めかゝつた、此の時關白殿下の副將軍、羽柴筑前守利家、嫡子肥前守前長、搦手の大將として、加賀、能登、越中の兵三萬餘騎を引率して、三月十六日加賀國を立つて、北陸道を碓氷峠へ發向、途中越後佐渡の主上杉彈正大弼景勝、信濃國の毛利河内守、眞田安房守父子、蘆田修理大夫以下馳せ加はり、その勢凡そ七萬有餘人、碓氷の彼方輕井澤沓掛追分の邊隙間なく陣を張つた、之れより北條家では、東海道は箱根、中仙道は碓氷の天險で敵を喰ひ止めんとし、計略、上州松井田の城には、北條家老臣大導寺政誓嫡子新四郎、三千餘騎を以て楯籠つてゐた、北條勢も死力を盡してよく戦ひ、北國勢も只だ遠巻きに圍んで居るばかりであつた、然るに北條家の老臣堀田尾張守入道何時しか豊臣勢に内通したので、箱根の天險も恃みとならず、上方勢はドシ／＼相州の地に攻め入つた、此の敗報ゾク／＼松井田城に来る、大導寺駿河守に云へば、



早雲入道以來引き續きたる名家、殊に駿河守父子は名代の豪將、飽くまで  
碓氷峠に於いて北國勢を喰ひ止めんと死守した、前手よりは度々勸告使  
者を出し、無事此處を通行させなば、領地安堵を取り斗らふべしといふ口狀、  
然し大導寺父子はその勸告に従はない、何れも義を鐵石に比し、寧ろ忠を盡し  
て野外の鬼となるとも、降を乞ふて安逸に世を送るを願はずと、斷然使者を  
退ぞけ、時々夜討ちを仕かけ、又は朝霧晴れ間に乘じて寢込みを襲撃、寄手も  
ホト／＼持て餘し、此の城に手間取る内、關白殿下小田原城を攻め落しなば  
何んの面目あらんと、羽柴上杉の兩將大いに心痛、いよく總攻撃と定  
まり、勢を集めて一舉松井田城を陥れんとした城主の嫡男大導寺新四郎  
直繁、生年未だ十八才の年若ではあるが、父の氣象を受け嗣いだか、世にも  
勝れたる勇士、手兵三百餘騎を従がへ、城門サツと押し開らき、先陣の藤田能  
登守の備へにドツと斬り込み、遮二無二暴れ廻つた、能登守の軍勢ドツと崩

れ立つたるところへ、加州の先陣長九郎左衛門、山崎長門守、奥村助右  
門、前田又四郎、村井出雲守等五百の同勢、横合より斬つてかゝり、入り亂  
れ／＼激戦に及び、新四郎直繁も今は早やこれまでと、いとも目覺ましき働  
らきをして居るところへ、父駿河守直繁手勢五百を引き連れ、我が子の危  
急を助けて城へ立ち歸り、早や既に日も夕陽に沈んで居たので、寄手も其の儘  
に一旦引きあげたが、其の夜前田河内守五六十人の決死の士を募り、城間近  
く忍び寄り、城の外曲輪、二三の丸へ火を放つた、火は夜風にあふられて、炎  
々と燃へあがり、寄手は其の火を相圖にドツと夜討ちをかけ、其の夜も又激し  
き戦に及んだ、大導寺父子士卒を勵まして、鬼神の如く暴れ廻り、幾度か／＼  
敵兵を追ひ退ぞけたが、敵は目に餘る大勢、入れ代り立ち代りドシ／＼攻め  
入り、四邊は累々屍は積んで山をなし、血は流れて海をなすといふ悲惨な光  
景、父子互ひに顔見合はせ、勞るゝ息をホツと吐き、駿如何に新四郎今は城

の運命もこれまで、とても開くべき運にあらず、此の上は多くの士卒を殺すに忍びず、我れ等父子自害して、人々を助けんと思ふが、ごうぢや 新ハツ、父上仰せの如く、残念ながらもうこれまで……」と、新四郎は無念の涙を絞つたが、結局父の言葉に同意して、使者を長九郎左衛門の陣へ遣はし、使「弓矢の義理も今日限りなり、我れ等父子二人切腹仕るべし、されば籠城の者は何れも筋目輕き武士、何卒助命の儀を頼み入る」と、云ふ口上其處で長九郎左衛門は御大將利家卿に此の事を申しあげる、利家卿も聞き入れられ、即日九郎左衛門より柳三荷、看相應に取り揃へて使者を遣はし使「御口狀の趣き具さに承知仕まつ、何さま宜しき御心中、大將にもホトく感心致され候」心靜かに御用意あるべく籠城の兵士に於いては一人も別條これあるまじく候」と、申し入れた、此處に於いて父子は殘る將士を集めて一同袂別の酒宴を催ふした、世に敗軍の將程哀れなものはない、其の酒

宴は殊に悲壯なものであつた、此の大導師家は北條家老臣中の老臣、知行二千五百貫を領し、家臣も多く、奥方藤の方との間には嫡男新四郎を始めとして四人の男子があつたが、三人は早世したので、奥方は領内の入幡武神に祈誓を籠め、ごうぞ壯健な男子をお授け下さる様に祈つた甲斐あつてか火の玉を呑むと夢見て一男を生んだ、夫婦の喜びは此の上なく、駿「此度は、そは壯健なる子であらう」と、名も五郎と命名して育てたが、奥方は産後の肥立ち悪く、遂に其の翌年此の世を去つた、其處で家臣の一人長谷川九郎左衛門の妻お初といふもの、子を生んで間もなく子が死んだので、撰ばれてお乳の人となつた、然るに間もなく上方豊臣勢が攻め下るといふ風評があつたので、五郎は九郎左衛門の屋敷へ預け、お初は五才になる娘お三といふものと同じく我が子の如くに育て、居た、其處で駿河守は九郎左衛門を呼び、駿「云々斯々、我れ等父子は自害して相果つれば、宜敷く彼の五郎、切めては汝

の子として育て、將來は幾分なりと家名を立てさせてくれよ」と、涙ながらに五郎の身の上を頼んだ九「ハッ……仰せではござりませんが、殿様若殿様も御生害、我れ等生き長らへて何んとせん、どうか冥途の御供をお許し下されませうやうに……」

駿「イヤ、イヤならぬ、汝一人を許せば他の者も許さればならぬ、支蕃は我がつながら縁、殊に一子を失ふての老年ではあるし、我が家の柱石、彼れ一人は殉死を許したれど其の外はならぬ、汝は我れへの忠義、五郎を無事に成長させてくれよ、之は五郎に片身として遣はしくれよ」と、相模入道安次の一刃及び多くの金子を玉ばつた九「ハッ……切めて御最後まで……」と涙にくれて居るを駿「未練者奴ッ立て……ッ」と、叱かられて、九郎左衛門は涙と共に立ち上つた、其の内に檢死の役人として、長九郎左衛門の侍大將長八郎兵衛、岡山新八郎の兩人城中へ参り、大導寺父子に面會して双方挨拶も済み使者の人々は何か遺言

でもと聞かれた時に駿「イヤ、最早や弓矢の道も十分に盡したれば、思ひ残すことは更らにござらぬ」と、筆取りあげて

後の世に限りそ遠き弓取の、

今はのきわに残す言の葉。

と書き残し、ニツコと笑つて腹十文字に掻き切るを、森半九郎介錯なしこれも同じく腹切つて死し、新四郎も支蕃も駿河守に續いて腹掻き切り、長谷川三右衛門介錯、駿河守は生年五十才、新四郎は十八才、支蕃は五十五才の老齡、斯くして大導寺家は滅び、松井田の城は落城した。

◆乃公が射殺して遣るぞ

大導寺父子及び支蕃の死骸は檢死の役人に乞ふて葬送の許しを受け、城の乾の隅で火葬になし、白骨を三つの壺に納めて、城下の萬福寺といふ寺に預け

三右衛門も自害して相果て、家臣一同も四散八落となつた、長谷川九郎左衛門夫婦は自分の娘お三と、主人のお胤の五郎といふ幼児を連れて、住み慣れし松井田城下を立ち退き、忠僕可助が勤める儘に、可助の故郷野州雀之宮在茂原新田といふ處まで来た、まづ可助の兄の茂助といふものゝ家に厄介になつてゐたが、いろ／＼眞事、偽事打ち交ぜ、身の上を語り、金子のあるに任せて幾許かの田地畑を買ひ求め、兩刀捨て、百姓になり自から耕やし、又は近所の山へ入つて獵をなし、名も九郎助と改名なし、幼児を大切に一家睦まじく暮らしてゐた、然るに一年二年夢の間に打ち過ぎ、早やくもお三は八才、五郎は四才の頃になると、お三は溫和しく奇麗な娘の子となつたが、五郎はムク／＼と肥へ太り、一寸見たところでは五六才に見へ、従がつて力も強く、悪戯は人の二倍も三倍も烈しく、近所の子供に喧嘩しては殴りつけ、蹴散し、一度も負けて泣いて歸つたといふことはない、六つ七つとな

ると其の腕白はますます烈しく、時々村の子供を泣かしては尻を持ち込まれる、然し九郎助夫婦は少しも叱らない、九「フム、流石はお胤ちや、殊にお奥様が火の玉を呑むと云ふ夢を見てお産みなすつたお方だ、今に豪いお方になるに違ひない」然し女房お初は餘りに諸所から尻を持ち込まれるので、初「如何に和子でも少しは怒らないと教育にはなりません、此のやうに日々十度も二十度も尻を持ち込まれるやうでは……九「イヤ、男の子は喧嘩をして負けるやうではなんにもならん、捨て置け」と、相手にならない、それをいゝことにしてやもあるまいが、五郎の悪戯は日々に烈しく、少し氣に入らないと仲供、大供までも殴りつけ、殆んど村の人々も持て餘してゐた時々九郎助は五郎を連れて山獵に出かける、後には近所の子供等と出かけ、兎や猿を引つ捕へて歸る、處がその邊を二里離れると一体の山續き、連山起伏して居るが、上州信州への間道筋であるから、旅人も往來する、然るに中

に大高山といふ山の頂上に近く、鏡ヶ池といふ大きな古池がある、水青  
 青として其の深さも知れず、何んでも近頃は大蛇が出て、鏡ヶ池の近邊で  
 往々人があなくなるといふ評判、茂原新田の人々も此の邊までは枯木枯柴  
 等山仕事に出かける、然し鏡ヶ池の邊りには近寄らない、五郎は此の頃では  
 自分で造つた弓矢を持つて、山々を狩りして歩いて居るので、九郎助は大い  
 に心配して、九「五郎や、我れ山へ行くのもいゝが、鏡ヶ池の邊へ行くな  
 よ、何んでも大蛇が出て人を呑むといふ話だから……なるだけ家の近所  
 で遊んで居ろよ、五「お父つさん、坊は其の大蛇といふ奴を、此の弓で退治し  
 て遣らうと思つて、毎日々々彼の鏡ヶ池の近邊へ行くが、少しも出て来や  
 アしない、九「滅相もない、そんな弓で退治るとは思ひもよらぬこと……決  
 して行くことはならないぞ」と、叱つてゐた、然るに五郎は其の後或る日の事  
 近所の腕白子供三四人と、其の邊の野山に駆け廻つてゐたが、何時しか鏡

ヶ池近くへ来た、丁度村の若者等大勢、謡歌唄ひながら薪木を伐つて居た、  
 ○「オイ、丑松、五郎、仙太、オ、八百市も居たのか餘まり池の近くの方  
 へ行くなよ、大蛇が来るだよ、八「エツ……大蛇ッ……此の邊に居るか  
 ○「居るとも、もう少し先きへ行つてみな、直ぐに出て来るぞ、丑「そ  
 リア大變だ、オイ皆、歸らう」と、騒ぎ出す、五「ハッハ、ハ、ハ、馬鹿な  
 こと云ふな、大蛇位いなんだ、もし出て来たら乃公が引ッ捕へて、見世物に  
 出して遣るぞ、X「馬鹿なことを云ふな、五郎手前は又大きなことを云ひ出し  
 ヤアがつたな、出て来たら直ぐに逃げ出す癖にしやあがつて……、五「ハッ  
 ハ、ハ、ハ、誰れが逃げるものか」と、云つて居る折りしも、俄かに四邊はスー  
 ツと薄暗くなつた、同時にザア、ツツと俄雨、○「ヤア雨だ、ハ、ハ、ハ、其處に  
 居た十二三人の人々は森蔭げに立ち寄りんとすると、突然ゴ、ツといふ異機  
 な響き、△「何んぢや、あの音は……、X「さア何んだらう、あの音は……

「恐ろしい氣味の悪い音ではないか」雨はますます降りしきり、ゴーツといふ響きはますます近くなつた。□「オイ恐ろしい音がするではないか、ウハーツ……」デ、出居つた……ヒエ……」一人の男ベツタリ尻餅ついてゴソゴソ這ひ出す。×「何んだ、何が出たのだ。□「ア、彼處々々」と云ふので、一同ヒヨツと見ると、出たは、側の松の大木、然かも二股になつた所から、頭四斗樽程もあらうといふ大蛇、爛々たる鏡の如き兩眼を光らし、眞紅の火炎の如き舌をペロペロと突き出し、鎌首擡げて、今にも一同を一口呑みにせんとする有様、一同アツと驚ろいて、皆「ワツ」出居つた。ベツタリ尻餅つき、こけつまるびつ逃げ出した、五郎はヒヨツと見るより、五「ヤア大蛇奴、乃公が射殺して遣るぞ」と、年七才の少年ながら、後世其の勇名を轟かす豪傑となるだけあつて、百姓の小忰とは違つてナカ、逃げない、手製の弓矢を番へ、大蛇目がけてハツシと切つて放した、矢

は飛んで命中したが、バツと刎れツ返した、續いて又一矢射かけたが、同じく刎れツ返し、五「ヤア此奴、手捕りにして遣るべツ」無法にもズルノ、進んで来る大蛇目がけて飛び付かうとすると、大蛇はフーツと異様の息を吹きかけると、流石豪膽な五郎もフヲノとした、時に早やくも大蛇は五郎の横腹の所を噛んでズルノ、彼方の古池に差して走り出した、大勢の百姓共、怖いもの見たさにヒヨツと振り返つてみると、這は如何に大蛇は五郎を啣へて居るので、○「ヤア五郎が……」△「それツ助ける」如何に何んでも其の儘逃げ出すことも出来ないで、鎌や棍棒を振りあげて五郎を取り返さんとしたが、雨風はだんく烈しくなつた、三四人の子供は宙を飛ぶが如くに逃げ出し、早やくも九郎助の家の近所まで来ると、今しも九郎助は鎌を擔いで我が家へ歸らうとするところ、丑「小父さん……」と、大聲に呼んだ九「オ、丑に八百市か……何んだ……どうかしたのか、丑「小父さん……」

「五郎ちゃん、云々で大變だ……」 九「エツ……五郎が大蛇に……」  
 ソ、そりやア大變……」と、我が家へ駈けつけ、鐵砲押取るより早く  
 件の鏡ヶ池を差して草駈天走りに駈けつけた、ところへ山の上の方より大  
 勢の百姓共、轉けるやうに逃げて来た、早くも九郎助の姿を見て「〇」  
 オ、九郎助さん、が大變だ…… 九「して大蛇は……五郎は何處に……」  
 △「彼處だ」と、指さす、九郎助は鐵砲引ッ擔いでドシッ駈け登る  
 と、何時しか雨風は止んで、彼方に二人の百姓が打つ倒れて居る 九「ヤア  
 この邊だ……五郎はさうしたのであらう」と、彼方此方を探し廻つたが、  
 大蛇も五郎の姿も見へない、九郎助は狂氣の如く走り廻つた、その内にそ  
 れからそれへと聞き傳へて近村の人々々が得物々々を携へて登つて来た、大  
 蛇の行衛を探したが、少しも知れず、一同九郎助を慰さめ、倒れし二人を引  
 つ擔いで村へと立ち歸つた、九郎助は妻お初にも委細を話し、夫婦は大事な五

郎を失なひ、ヨ、とばかりに嘆いたが、さうすることも出来ず、翌日より九郎  
 助は鐵砲擔いで鏡ヶ池邊をクルクル廻つてゐたが、少しも大蛇は出て来ず  
 二人の百姓は大蛇に毒氣を吹つかげられ、一度は氣がついた、一人は漸やう  
 助かつたが一人は二三日経つて相果て、九郎助は氣も狂はんにばかりに五郎の  
 行衛を探してゐるので、茂原新田の名主右衛門、村の人々や山下村の人  
 人と謀り、大勢で、大蛇退治に出かけたが、少しも其の影さへも見へず、詮  
 方なく九郎助夫婦は五郎の家出した日を命日として、村の菩提寺淨光寺の和  
 尙を呼んで讀經して貰ひ、夫婦は日々に念佛三昧に其の日を暮らし 九「ア  
 、濟まんこまをした、さうしたらよからう 初、さう仰しやつて、貴方が病氣  
 にでもなるといけません、マア、諦めらるより仕方がござりません 九「イ  
 ヤ、私しはさうしても諦められない」と九郎助はいつた濟まんくと云つて  
 其の日を暮らしてゐた。

此の毒藤父爺奴ツ

此方五郎は大蛇の爲めに毒氣を吹つけられたまでは知つてゐるが、それから先きは夢のやうな心地、ドー／＼と云ふ音がするの、ハツと氣がついて目を開いてみると、這は如何に、自分は高い／＼瀧の前、小さな草庵の中に寢て居て、自分の周囲には澤山の猿が居て、チー／＼と自分を見詰めて居る、猿は五郎が眼をさましたので、キ／＼／＼と妙な聲を出してヒヨイ／＼飛び廻つた、普通の子供なら驚ろいて泣き出してもするところであるが、根が大膽不敵の少年五郎、五「オヤツ……此處は何處だらう、猿奴、澤山居るな、そなた、引つ捕へてお父さんの酒の肴に持つて行つて遣らう」と、手を延して引つ捕へんとすると、キ／＼／＼と叫んで五郎の頭の上をヒヨイ／＼と、飛び越へる

五「此奴ツ、生意氣なツ」と、今一匹引つ捕まんとすると、横飛びに飛んで

キ／＼／＼、四邊を見廻すと、何百とも知れぬ猿の群、五「ヨシツ、此奴ツ……」と、ドツと大地に飛び下り、小石を拾つてバツと投げつけると、多くの小猿も大地へ飛び下りて、雨霞の如くバラ／＼投げつける、それが五郎の頭手足の嫌ひなく中る、五「汝れツ……」と、五郎は癩癩起して追ひ駈けるが、相手は素早い小猿、木の根岩角を飛び廻つて、一寸手捕りにすることは六ヶ敷い、其の内に流石の五郎もフ／＼云ひ出し、例の岩の上に腰かけてホツと息を吐くと、忽ち頭の上の木枝から小猿奴はヒヨイツと飛び來たり、五郎の頭の毛や耳を引つ張る、五「ヤア此奴ツ……」と、又も追ひ駈け廻る、何しろ相手の数は澤山だ、遂には勞れて又休む、すると小猿は近づいて悪戯をする、又追ひかける、勞れる、休む、悪戯をする、同じやうなことを繰り返して居る内に、早やくも日は暮れかゝる、五郎は急に腹が空つたのを覺へ出し、五「ヤアこれは困つた……何か喰べたいな……」と、



ツタリ木の根方へ腰を下す、すると一匹の猿が五郎の前へ大きな薄黒い團子のやうなものを投げ出した。五「ヤアこれは何んだ……團子ではないか、ハ、ア猿奴、落し居つたな、喰べて遣れ〜」と、ムシヤ〜喰べた、何しろ腹が空つてゐるから旨い、然し大きな團子だが腹が空つてゐるから足りない、とこゝろへ又も上から大きな柿が五つ六つコロツ〜と猿が落した。五「ヤア柿か、何んでもい〜……」と、五郎はムシヤ〜大きな柿を十二三も平らげると少しは腹も膨れた。五「腹さへ膨れたら此方のものだ、お父さんやお母さん、三ちやんも心配して居るだらうから、歸ろう〜」と、立ち上ると、後方から小猿が飛んで来て、頭の毛や耳を引つ張る。五「ヤア小奴、まだ悪戯し居るか承知せんぞ」と、掴みかゝる、小猿はヒヨイ〜飛び廻る、石を投げると小猿も石を投げ返し、五郎は小猿相手に喧嘩をして居ると、四邊は全たく眞ッ暗闇になつて、只だ聞へるものは瀧の音ばかり、散々飛び廻つて大いに勞れ。五「

ア、もう日が暮れてしまつたのか、仕方がない、今夜は此處へ寢て遣れ〜と、木の根によりかゝつてウト〜として居る内に、何時しかグッスリ寢込んでしまつた、何ものか鼻を摘んだり耳を引つ張つたりするものがあるので、ヒヨイと目を覺ましてみると、例の通り無数の小猿が岩の上や木の枝に止まつて、ゲ〜ツと見詰めて居る。五「オヤ、猿奴だな……」と、前を見ると、昨日のやうな團子が一つと、澤山の柿が置いてある、腹が空つて堪らないところであるから、まづ團子と柿をムシヤ〜喰べた、少し腹が膨れたので、今日こそ歸ろうと歩き出すと、小猿は飛びついて来て、頭の毛や耳や鼻を引つ張つて悪戯をする、五郎も癩癩起して相手になる、勞れて休むと又側へ寄つて来て悪戯をする、五郎も休む間はない、一日小猿を相手に喧嘩をして居ると、早やくも日は暮れる、すると又團子に柿を持つて来てくれる、腹が空るからそれを喰べる、其の内には睡く〜つて草庵に寢る、朝は小猿に起され、又も其の一日は

小猿と喧嘩をする、日に二度は喰物を持って来てくれる、家へ歸らうとしてもなかく歸さない、知らず／＼五六日は経つ、だん／＼猿の悪戯も烈しくなる五郎は痛癢起して、木の枝を折つて追ひ廻る、小猿も小枝を以つてパン／＼打ち込んで来る、五郎は追ひ捲る、然し相手は身軽な猿だ、ヒヨイ／＼飛び廻り、運よく一匹の小猿をば引つ捉まへると、多くの猿が降りて来て、引つ掻く喰ひ付く、仕方がない離してしもう、五郎もます／＼疔癢起したが始まらぬい、猿攻めになつて一月二月は同じやうなことを繰り返してゐたが、もう此の頃では身体中生疵だらけだ、或る朝起きてみると、一匹の猿も見へない、五「ハテナ……猿奴は何處へ行つたのだらう……そうだ此の間に家へ歸つて遣らう」と、スタ／＼駈け出すと、何ものにかドスンと突き當つた、其の拍子にコロ／＼と三ツ四ツ轉げ、ムク／＼と起き上ると、行手に當つて年頃何才とも知れぬ白髪銅顔の老人、木の皮で造つたやうな着物を着て、

自然木の杖をついて立つてゐる 五「ヤア小父さんだな、今突き當つたのは……老「そうぢや、向ふ見ずに駈け出す奴があるか、馬鹿者奴ツ」と、自然木の杖で頭を一つボカーン、それが痛い痛くないのぢやない 五「痛いツ、老「痛いなご、男の癖に弱音を吹く奴があるかツ」ボカーン 五「痛いツ……オヤ、此の毫祿老爺奴ツ、そんな杖で人の頭を殴る奴があるかツ、コソ畜生ツ」と、側にあつた二三十貫の捨石取るより早くブーンと投げつける、其の姿はバツと消へた 五「オヤ妙な老爺だ、何處へ行き居つたのであらう 老「オイ、少年、此處ぢや／＼」と、呼ばれてヒヨツと振り返ると、件くだんの老人はニコ／＼笑つてゐる 五「汝ツ……」と、剛氣かうきの五郎は拳骨固めて打つてかゝる、老人の自体はヌラリグラリとして恰かも蒟蒻こんやくの化物ばけもののやう、五郎はます／＼風せず 五「汝ツ、妙な奴だ……よくも乃公おれの頭あたまを殴り居つたな……」と、ガイ／＼と押へつけ、馬乗りに打ち跨がり 五「

サアどうだ、老爺、降参し居つたらう。老「ハッハ、少年、それは石の上に乗りに跨がつてゐる。五「ヤツ石だ……」と、云ふ間もなく、ピエーと起つた大風と共に、五郎の身体はコロコロ、漸やう風が止んだと思ふと、其處から二十間近くも離れてゐる草庵の上へあがつて居る。老「どうだ、少年、しつかりせい、ハッハ、前には件の老人がヒタリ座つてゐる。五「ヤツ……お前は……」老「驚ろいたかな。五「ム……魔法遣ひだな、老「ハッハ、マアそんなものだ、だが少年、お前はさうして此處へ来たか知つて居るか。五「イヤ、知らん、一体此處は何處だ。老「ハッハ、此處は日光山の裏山ぢや、其方は大高山にて大蛇の爲めに一度は吞まれて居つたが可愛想だから乃公が助けて遣つたのだ。五「エッ……では大蛇の爲めに吞まれたのを小父さんが助けて下さつたのか。老「そうぢや。五「有

難うございます。老「イヤ、其の禮には及ばぬ、然し少年、其方は家に歸りたいか。五「ヘイ、お父さんやお母さん、又妹の三ちやんが心配して居るだらうと思ひますから、どうか小父さん、家へ歸る途を教へて下さい。老「ヨシ、歸る道を教へて遣らう、然して之から家へ歸る道には、大蛇も澤山居る、途中で吞まれてしまつては何んにもならぬ、此處で大蛇に勝つやうな腕前になつて歸つたらどうだ。五「して小父さん、それはさうしたらなるのです。老「それは譯はない、あの猿と勝負して、負けぬやうになつたら無事に歸れる、サア猿と勝負をしてみろ、お前が猿に勝てるやうになつたら小父さんが道を教へて遣るから……」と、云ひながら手を振ると、何處からともなく、無数の猿がピヨイ、木の根岩角を飛び越へて、草庵の所へ集まつて来た。老「サア少年、これから此の猿を相手にして、もう少しの間喧嘩するがよい」と云ふかと思ふと老人の妻はバツと消へ、後に残るは濛々と上る水氣ばかり

り、流石の五郎もアツと呆れてゐると、猿奴は四方八方からキイ〜、五郎に悪戯を仕かけた。

天風の術と名づけてある

始めの内は何んと云つても多くの猿、引つ掻かれ、喰ひつかれ、石を投げられ打たれて、瘤や生疵の絶へ間なく、それかと云つて家へ歸ることも出来ず、猿が持つて来てくれる團子と果實とを喰つて、月日の経つのも知らず、夜が明けから寝るまで、休む間もなく苛められ、何時とはなしに、自分もだん〜と身軽になり、三尺四尺五尺、一間二間三間位の高所は自由自在に飛び廻るやうになり、従がつて猿に引ツ掻かれ、喰ひつかれることも少なく、此の頃では木の梢をピヨイ〜飛び廻るやうになり、猿を友達の如くに遊んで居た、或る朝ムク〜起きると過日の老人が居て 老「少年少しは身体

も大きくなつた、猿に勝つても私しに勝つやうにならねばならぬ、サア向つて来なさい」と、云はれて少年五郎 五「多寡が老翁位、猿よりも何んでもない」と、豫れてこしらへた木太刀を持つて打つてかゝる、老人は只だヒラリ〜と体を轉してゐるばかりだが、少しも當らない、其の相問〜に、老「それシツカリ〜」と、杖で頭をホカ〜、ます〜勇氣を鼓して立ち向ふが敵はない、コリヤとても駄目だと、勞れてベツタリ座ると、猿奴が来て悪戯をする、怒つて立ち上ると老人に苛められる、又瘤の出来直し、流石剛情な五郎も、後には身体もヘナ〜になつて 五「もうどうでも勝手にしろ」と、寝たまゝ居ると、老人は引ツ摺んで、彼方の瀧壺の中へ投げ込む、アプ〜アル〜、漸やう岸へ這い上ると、猿と老人に苛められ、後には 五「糞ツ……老翁、どうかして一度でも打つて遣りたい」と氣を取り直してパン〜と打ち合ふ、日々に其の技もメキ〜と上達して、滅多に瀧壺へ

投り込まれなくなつた、すると老人は手許へ招いて、按摩をさせる、仕方がない揉む、日中の勞れてコクリ／＼知らず／＼居睡りする。老「コラツ……按摩しながら寝る奴があるか」ホカ／＼、漸やく按摩が濟んで寝るのを許されるヤレ／＼と氣を弛して前後正態なく寝て居ると、突然頭を木太刀でボカリ殴られ。五「痛いッ」と、目を覺ます。老「馬鹿奴ツ、正態もなく寝て首でも取られたらどうする、氣を付ける」ホカ／＼、五郎もツク／＼辛いと思ふこともあつた。五「厭だ／＼、斯う寝る暇もユツクリ寝られぬやうでは、今にあの老爺に攻め殺されてしもう、どうかして逃げて歸りたいものだ、然し逃げやうとすればあの猿奴が邪魔をしヤアがるし、コリアなんでもあの糞老爺や猿共に負けないやうにならねばならぬ」と、心機一轉、それからといふものは、自から進んで、木太刀を以つて一心に獨稽古、メキ／＼其の腕前も上達して老人に尋常の勝負では打たれることも少なくなつた、其の間に早くも三ヶ年

の月日は経過した。其の後老人は槍弓等の武術を教へ、夜になつと軍學を仕込み、此の頃では五郎も大いに面白味が出て、老人は大槪外出して居ない、後には多くの猿ばかり、猿を相手に木々の梢を駆け廻つて其の日を暮らしてゐた、或る日老人は五郎に打ち向ひ。老「ヤヨ五郎、もう大蛇に出會つても負けることはなくなつた、此の上は我が妙術を教へて遣る」と其處で八方遠當て、霧隠れの忍術等を教へた、これより二三年経つて或る日の事、老「ヤヨ五郎、其方は永らくの間よく辛抱いたした定めし酷い老人と思つたであらう、今は大蛇は愚か、世の勇士豪傑と云はれる輩でも汝の右に出でべきものなからん、サア一ト勝負いたさん、用意せい。五「ハツ……」と、五郎は木太刀を二本草庵の前の廣場へ並べた、エイヤツといふ氣合と諸共左右にバツと片れた、もう此の頃では五郎も師と互格の勝負、五郎は烈しくバツ／＼と打ち込むと、バツと師の妻は消へ失せた。五「オ、お師匠様はと……」

……」と見廻して居たが、草庵の屋根を目がけて持つたる木太刀をハツシと投げつけると、何時しか師の老人の姿はアリ／＼と現はれ、宙に木太刀をバツと受け止め、ヤツと叫ぶと、此度は五郎の姿はバツと消へ失せた。老「ホ、オ……遣り居つたな……」と、口中に何やら唱へて九字を切ると、突然ビューンといふ大風、ハツと思ふと木の上へ飛び上つてゐた五郎はスツナンコロリと墜落、コロ／＼と轉がつて、何時しか草庵の椽に立つて居られる師の老人の側へ来た。老「ハツハ、ハ、ハ、ごうちや、五郎。五「ハツ……恐れ入りました、あの風は一体何んでございます。老「ハツハ、ハ、ハ、あれこそ、私しが世を捨て、多年の間、心身を凝して編み出した秘術、風と雨とを自由に使用ひ分ける術ぢや、見て居れ、雨をば降らして見せるから……」と師の老人、九字を切ると、四邊はスーッと暗薄くなつたと思ふと、忽ちザー／＼と盆を覆へすばかりの大風、忽ちバツタリ止んだと思ふと、此度はビュ／＼と

いふ大風、今にも草木、岩石は吹き飛びそうなる有様、しかも忽ち止んだ。老「ごうちや五郎。五「ハ、ハ、ハ……奇妙な術で……ごうちや、私にお譲りを願ひます。老「ヨシ／＼、授けて遣る、斯うぢや」と、呪文の唱へ方から九字の切り方を教へた。五「ハ、ハ、ハ……然らば斯うで……」と、五郎は立ち上つて、口中に呪文を唱へ、九字を切ると、突然ビューンと吹き起りし大風、大木も大岩も吹き飛びそう、多くの猿は、ゴロ／＼と轉げ落ち、キヤアキヤアキイ／＼と叫び廻る。老「ヤア五郎、それでは不可ん、其方のやうに物の名を示さず、九字を切つては四方のものは何も彼も仆れる、可愛想に猿共を苛めるな／＼」大風は忽ち止んで、猿共はキヨロリツとして呆れた顔をして居る。五「左様でございますか、では斯う……」と、再び九字を切ると、其の邊に居た猿共はコロ／＼と、恰かも手鞠でも轉がす様に轉がり、キイキイキヤア／＼。老「もうい／＼、其方のやうに猿を苛めてはならぬ／＼」猿

共はますく驚ろいて少なくなつて震へて居る 五「ハッ！これは何んといふ妙術で……」 老「サア別に名もないが、天風の術と名づけてある、よつて汝はこれより天風五郎と名乗りたがよからう 五「ハッ……」 永年の御教導有難う存じまする、ついでにはどうかお師匠様の御名前をお聞かせ下されまするやう……」 老「オー少年の間の辛抱、今度送り歸して遣る、私しは當時猿丸山人と云つて、浮世を離れ、猿と共に暮らして居るが、世にある節は足利尊氏公に仕へ、軍學を以つて指南役を勤めし山室軍平太春康といふもの、三十餘才の時主君を諫めて用ひられず、断然主家を浪人して諸國の靈地、靈山を行脚、此の山に來たつて早や幾年を経つか知らず、ごうかして我が覺へし妙術を誰れにか譲らんと思ひ居りしところに、其方が大蛇に呑まれしを助け、猿を以つて度胸を試めさせしに、少年に似氣なき豪勇、これにて我が術を譲るには風強の少年と、十年の間山奥に止めて教へたのち

や」と始めて聞いた師の優しき言葉、五郎は感泣して 五「ハッ……」 一方ならぬ御教育、有難う存じまする、此の上は尙ほ二三年御匠様のお側にあつて……」 老「イヤ！最早や此の上汝に教へることはない、早やく家へ歸れ私しは早やもう定命盡きて此の浮世を去るべし、然し固く云ひ置くが、武術には上の上があるもの、必らず油断すべからず、之の鐵扇は我れ多年使用せし品これを汝に片身として遣はす、ますく武術を練磨して家の再興を計り、其の身を立てよ」と、パツと鐵扇を投げ與へられた、ハツと五郎は宙に受け止め見れば南蠻鐵の質素な鐵扇、唯だ山室軍平太春康と記してある 五「ハッ有難うございます」と押し戴いて一禮すると、何時しか黒雲舞ひ下つて五郎の身体を包み、スー！と上にあがるやうに覺へると、なんとなく夢の如く人心地は失せてしまつた。

◎ 妙術を試めして遣る

話し變つて、此方九郎助夫婦は、大切な主人の忘れ形見を失ない、殆んど氣拔のやうになつて、暮らして居る内に、娘お三は十六七才の年頃になつた鄙には珍らしい美しい小娘、村の若者共はいふ／＼噂をして、中には嫁に呉れ、それでなければ婿に行かうと申し込んで来た、九郎助夫婦もあれかこれかと心配したが、遂には名主民右衛門の媒介によつて、雀の宮の郷士で山本新兵衛の次男新次郎といふものを養子に迎へた、夫婦中は至つて睦まじく、早やくも一子を設け、名もお清と名づけ、一家頗る圓滿に暮らしてゐた、其の内に山本新兵衛は此の世を去り、長男の新太郎と云ふのが家名を嗣いだ、親の新兵衛といふのは、人々より佛新兵衛と云はれる程慈悲深い人であつたが、悴の新太郎は親とは全く反對、至つて吝嗇な性質で、鬼新

兵衛／＼と呼ばれてゐた、従がつて九郎助の家へも出入りをしない、ところが其の翌年孫のお清は不圖した病氣で此の世を去つた、親子夫婦は大いに力を落した、然るに其の頃から溫和しい新次郎は悪友に誘はれて博奕を覺へ、夜泊り日泊り家へ寄りつくことも少くない、お三の氣苦勞は如何ばかり、至つて氣の短かい九郎助は、九「あんな婿は仕様がな、もう勘當してしまへ」と、云ふのをお初お三の親子は頼りに取りなして居た、だが新次郎の放埒は日に烈しくなるばかり、其の内に早や一年の月日は経ち、不圖遊び先きで新次郎は病氣になつて、家へ歸つて来たが、五六日の病氣でとう／＼此の世を去つた、すると其の翌日から四方八方から九郎助の家へ借金取りに詰めかける九郎助夫婦お三は寢耳に水、別に借金する覺へもないと云ひ張つたが、何時しか婿の新次郎は九郎助の判を盗み出し、田地畑家までも書き入れて五百兩の借財をしてゐた、一同アツと驚ろいたか後の祭り首と釣り換への九郎



助の實印が押してあるので、どうすることも出来ず、五百兩と云へば大金、百性の身分で出来そうなることはない、そも九郎助夫婦が松井田城下を立ち去る時に、主君よりは、五郎の養育費に三百兩の金子を貰ひ、又家財を賣つた金子が百五十兩ばかり、其の金子を以つて此の地へ来たが、三百兩ばかりで田地田畑を買ひ求め、後の金子は何や彼やと費用に使ひ果し、今では五六百兩の身代はあると云ひながらも、サテ賣るとすれば思ふ値段にもならない、一應山本家へ掛け合つたが、其方へ養子に遣つた弟の不始末、此方ではどうすることも出来ない、とキツバリ断はつて来た、妻のお初も娘のお三も、今更ら山本家の薄情を怨んだが、其處は根が武士の九郎助、九イヤ、泣くなく、斯うなるのも皆因縁……乃公が眼識が違つたからだ、誰れも怨むことはない」と、新次郎の死骸は厚く葬むり、家は残して田地田畑を賣つて四百兩の金子を拵らへ、自分の判を押してある證文の金額は殆んど返し、後百兩ばかりは追

つて返すことにした、名主もこれを聞いていと氣の毒に思ひ、いろく心配、自分の田畑の中から幾分かを貸し與へた、親子のものは今までは細々暮らしてゐても、左程に貧乏といふ程でもなかつたが、昨日に變り、他人の田畑に働らく小作人となつた九郎助は何事も締めてコツ／＼働らいてゐるが、お初お三の親子は日々涙に暮らしてゐた、然るにお三は早や二十一の女盛り、ますます日増しに美しくなり、養子が死んだので、又も村々の若者の評判となつた、ところが隣村雀の宮の者で、人に毛虫の如く厭はれて居る、無頼漢、角力上りの龍田川の大藏と云ふ奴、何時しか、ラリお三の婀娜な姿を見染め、茂原新田へ日参してお三の出入りを窺がひ、つけつ廻しつ口説き立てる、貞操固きお三、なんで其の意に従がひそうなることがあるう、ピシヤン／＼と手殿しく刎れ付け、兩親も注意して、九、あんな馬鹿な奴は、どんな無法なことをするかも知れんから、なるだけ出ないやうにして居るよ」と、九

郎助も娘の外出を止め、娘もなるだけは出ないやうにして居たが、或る日の事、太郎新田まで用事があつて、用を達して歸ろうと、一軒茶屋のところまで來ると、バツタリ大藏に出會つた、お三は悪い奴に出會つたものだ、其の儘顔を隠して通り過ぎやうとすると、大藏は早やくも見て、大「コレお三さん、顔を隠して通るとは餘りな……マア、少し待ちなせよ」と、袂をグツと引握つた、三「アレ何をなさる、今日は少し急ぎの用があつたので、どうもお離し下さい、大「イヤ、斯う捕つたからには滅多に離しつこはないのだ、お前の顔を見やうと思つて此の茂原へ日参、意地悪く少しも顔を見せず、此處で會つたのがなにより、コウお三さん、これ程までに思ふ大藏、萬更憎くもありません、サア色よい返事を聞かしておくんぞ、三「妾しアそんな事知りませぬぞへ、其手放して下さい、大「イヤ、色よい返事を聞くまで、雷が鳴つても滅多に此の手は離すことぢやねエ、そう情れないことを云

ふものぢやねエ、なアお三さん、三「アレーツ……」と、叫んだが丁度人通りの途絶へて居たところ、面倒と思つたが、アレーツと悲鳴をあげるお三を手拭で猿轡をはませ、矢庭に引つ擔いでドス／＼、此の時丁度雲の上よりドスンと落ちて氣を失なつてゐた五郎、人の騒ぐ聲にハツと氣がついて見ると、自分は何時しか、微かに／＼見覺へのある一軒茶屋の側、松の木根方に轉がつてゐる、前では荒くれ男が一人の年若の女を引つ捕へ、亂暴にも猿轡をはませて擔いで行かうとする、五「お、オー、亂暴な奴だ……ヨシ、お師匠様、護りの妙術を試して遣らう」と、口中に何やら唱へて、九字を切ると、お三を引つ擔いだ大藏は、大「ヨイシヨ、泣いたつて喚いたつて……斯うなれば此方のものだぞ……」と、ドシ／＼戻つて來て、クルクル廻つてゐる、大「ヤア重くなつたぞ、あの通りヤツサリとしたお三坊がこんな重いとはどうだ……何んでも構はん、早やく歸れ、うん／＼云ひ

ながら駈け出して居る ○「アーモシク親方」 大「なんでえお前さんは一軒茶屋の空助さんぢやねえか 亭「へエ、そうですが、親方それを擔いでクルク廻つて何をしていらつしやるので、其の地藏は辻の印し、ごうもそれを持つて行かれては……」 大「エツ……地藏ッ……フム……では先刻から同じところを……」 亭「ナ、何を仰しやていらつしやいます 大「フムコレア妙だ……お前エ等の知つたことかい……」 ドスーンと石地藏を投げ出して駈け出した、ドスーンと地響き 亭「ヒエ……」 空助は吃驚仰天大藏は後を追つたが、又も五郎のお得意の妙術、天風の術にかゝつて、コロコロと吹き轉がされ、コロコロ茶店の柱に頭を打つつけてゴツン

大「痛へエ……」 亭「ヒエツ……親方ド、ごうなさいました」と、空助は早やアルク震へて居た 大「妙だな……乃公ア摘まれて居るのかしら……」 頬をつれつたり手の皮をつまんだりしてゐた。

◇ 日が悪い出直して来い

此方五郎はお三を助けて一二丁も来ると、或る森の傍ら、あわれやお三は氣を失なつてゐる、五郎は手拭を取り除けて、活を入れて遣る 三「ウ……」

△…… 五「コレ女、氣がついたか 三「ハイ……」と、見あげたが

三「アレツ……」と、叫んで袖屏風 五「ごうした女 三「ド、ごうがお助けを……」 五「ハツハ、今其女を助けて遣つたのだ、一体其女は何處の娘ぢや 三「ハイ、妾は此の先の九郎助の娘で三と申します、ド、ごぞうお許しを……」 五「エツ……三……」 三「アレ……」

五「其、九郎助の娘三……、では乃公の姉さんか 三「エ、ツ……」 姉さんとはへ…… 五「オ、姉さんぢや、オ、姉さん……」 お三は目を見張つて 三「エツ……妾した姉さんといふお前さんは……」 五「私しは貴

女の弟の五郎で……三「エツ……五郎……」アツと見詰めた、十年の永の月日の間、着物と云つては只だ一枚、破れても針も糸もないので所藤藁で結び合はせ、着物といふのはホンの名ばかり、頭髪は延び放題ポー／＼延び、色眞ッ黒く、目ばかりギョロ／＼光つてゐる、お三の驚ろくのも無理はない、然しよく／＼見ると、何處やらに幼な顔が残つて居る 三「オ、ッ……お前は五郎ちゃん 五「三ちゃんか…… 三「五郎ちゃん……どうしてマア此處に……お父さんもお母さんもお前が居なくなつてからは泣いてばかり居る、サア早やく歸つて喜ばして、サア一緒に……」と、お三は嬉しさの餘り五郎の手を取つて我が家の方に駆け出した、家の前では丁度母親のお初何やら仕事としてゐるところ 三「お母アさん／＼」ヒヨイツと見ると、娘のお三が妙な乞食見たいな男の手を引いて來るので 初「なんだね三、そんな乞食の手なんか引ッ張つて來て…… 三「イエ、乞食ごころでは

ありません、五郎ちゃんが歸つて來ました 初「エツ……五郎…… 五「母上、暫らくでございました 初「オ、五郎だ／＼、お老父さん、五郎が歸つて來ました／＼」家の中で菓を、コツ／＼叩いて居た九郎助、其の聲を聞きつけて 九「エツ……なんだ、五郎が……そんな馬鹿なこと…… 初「これ此の通り…… 九「オ、五郎かッ……よく無事で居て呉れた……一と先立つものは涙、三人とも早や涙に眼を濡ませた 初「マア此處では話しても……」親子三人は手を取つて五郎を上にあげる、九郎助はホク／＼顔、娘お三より大藏の難義を助けてくれた委細を聞き 九「して何處に今までどうして居つたのぢや、私しや其方が大蛇の爲めに吞まれたと聞いた時は、吃驚仰天、自分の息も絶へるやうに覺へたが、お前は大蛇に吞まれたのではなかつたか 五「イエ、たしかに吞まれたので……一度は吞まれたが、山の仙人に助けられ、今まで仙人と一緒に遊んで居ました 九「フム、仙人と一緒に……

…… 初「然し思ひ出せばもう十年、口でこそ十年といふが、其の間何をし  
て居やつた。五「ハイ、白い髻の生へたお老爺さんと、猿と一緒に遊んで居ま  
したが、十年も経つたとは思はず、二三日で歸つたやうな心地、仙人さんか  
う五郎、家へ歸して遣るぞ」と雲の上へ乗せて彼の軒茶屋の前まで來ると、  
急にヌツテコロリと落ち、目を開いて見ると、三ちやんが悪者の爲め酷に目  
に會つて居るので、三ちやんとは知らず助けたので……」と五郎はい、加減  
なことを云つてキヨロリツとした顔をしてゐる、何しろ久し振りで五郎が歸つ  
て來たといふので、それからそれへと大評判、名主民右衛門始め大勢の人々  
ドシ／＼出かけて祝ひを述べ、五郎にいろ／＼尋ねるが、五郎はキヨロリツと  
した顔をしてゐるばかり、村の人々は「ア、可愛想に、五郎は惻い子であ  
つたが、大蛇に一度吞まれたと云ふことだからホカンとして阿呆になつたわい  
と、口々に評してゐる、九郎助夫婦は五郎を湯に入れ、頭髮を梳ると、流

石嵐は争はれぬもの、多年山奥で日を送り、色こそ黒いが、目鼻立ちの擠つ  
た天ツ晴れ凜々しき面容、九郎助は涙を流して喜こんだ、其の翌日からは  
五郎はプラー／＼と遊びに出かける、力は人一倍強いが、何んとなく氣抜け  
たやうな、時に青鼻垂らしてゐる。○「ヤア五郎は阿呆になつた、阿呆の五郎  
よく」と、悪口を吐いてゐた、これを聞く度毎に九郎助夫婦の心中は如  
何ばかり。九「ア、折角無事に歸つて呉れたと思へばあの通り氣抜け同様……  
……これではとても大導師家を相續なさることは六ヶ敷いだらう、こんな事な  
ら寧ろ無事な顔を見せて下さらない方がよかつたに……」 初「イエ、そ  
心配したものでございませぬ、まだ年は若いし、今に正氣づくでせう、それ  
に奥様は八幡様にお願ひ申してお生みになつたといふことですからこれから  
村の鎮守の八幡様へお願ひ申して見ませう。三「どうして五郎ちやんはあんな  
なホンヤリしたんでしよう」親娘もともに心配して、程遠からぬ八幡神社

へ日参をした、其の日間もなく九郎助は持病の疝癪が起つてドツと床に  
 いた、そうなると思ひに貧乏となつて来る、然し五郎は一向平氣の平左、日  
 夜ぶら／＼歩き廻つてゐる、或る日の事、五郎は夕暮頃アラリ家へ歸つて來  
 ると、誰れか來て居る、門口に立つて立ち聞きすると、家の中では病氣の九郎  
 助と客の話し ○「イヤ、お前さんの病氣は察して居るが、どうも私の方も  
 商賣、そう長くなると主人の方へ何んとも云ひ譯がないので、是非とも今日  
 は何んとかして頂かないと……」 九「それもそうでございませうが、此の  
 疝氣、どうかも少々お待ちを願ひます ○「イヤ／＼そうペン／＼と何日ま  
 で待つて居ることは出來ない、今日は是非とも何か貰つて歸られば、利息にも  
 なりアしない、こゝろ見廻したところ何んにもないが、切めて蒲團の一枚でも……」  
 ……」着て居る蒲團を剥がうとする 九「イヤ／＼これを取られましては……」  
 ……」着て居る蒲團を剥がうとする 九「イヤ／＼これを取られましては……」  
 ……」着て居る蒲團を剥がうとする 九「イヤ／＼これを取られましては……」  
 ……」着て居る蒲團を剥がうとする 九「イヤ／＼これを取られましては……」

斯うしてゐる内には日は暮れる「無慘にも蒲團を剥がうとする、見るに見兼ね  
 てドツと飛び込んだ五郎、突然件の男の襟ツ首をグツと引つ擱んだ ○「ヒ  
 エツ……」ダ、誰れだ……」 五「誰れでもない、乃公だ ○「ヤア阿呆か……」  
 ……」プル／＼ツ、五郎か 五「なんだ、阿呆の五郎だ……」よくも乃公のお父  
 さんの蒲團を剥がうとしたな、コン畜生ツ」と、左手でボカリツ底なし力の  
 五郎に殴られては堪らない、顔も何も曲つてしもうやうに覺へ ○「痛いツ……」  
 ……」食した金子の利子にでも貰つて行かうとしたのだ 五「何と吐かすぞ、金  
 子の利子に蒲團を持つて行く……」拂はんとは云はんが、今日は日が悪い出直  
 して來い」と、首ツ玉と腰帶引ツ擱んでヤツと叫ぶと、入口を通して四五間表  
 の方へドスン、コロ／＼と轉がり ○「桑原々々、世直り／＼、馬鹿と氣狂  
 とは相手になれん……」糞力の奴だ」と、アツ／＼云ひ、足腰さすりながら  
 顔をしかめて立ち去つた。

◎乃公が脊負つて行つてあげる

後打ち眺めて五郎は 五「ハツハ、ハ、ハ、恐ろしい軽い奴だ……お父つさん何故あんな奴に頼まつて居るのだ、早く家の外へ放り出してしまへばいゝのに……ハツハ、ハ、ハ」と、メーッと突立つてゐる、九郎助は床の上に起き直り、思はず涙をハラ／＼と流してゐる 九「ヤアお父つさん、お前泣いて居たんだな…… 九「コレ五郎……マア座れ 五「何んだ、何か用か…… 九「外でもない、此の九郎助の云ふことをよく聞いてくれ……何を隠さんお前は此の九郎助の實の子ではない、眞實のお父様と云ふのは、以前關東八州の大領主であつた相州小田原北條家でさるものありと知られた大導寺駿河守政馨と仰しやつて、上州松井田の御城主でございませぬぞ」九郎助の言葉も違つて来た、五郎は始めて聞いた我が身の上 五「エツ……大導寺駿河

守の…… 九「左様でございませぬ、貴郎はお家没落の當時は二才、何事もお辨へはございませぬまいが、實は云々斯々……云ふも悲しきお家の有様當時では大導寺家のお家は全く滅び、貴郎より外にお立てなされるお方はございませぬ、貴郎も御幼少の折りは、お父上様及お兄上様のお氣象を受け嗣ぎ、至極御聰明であらせられたが、此度お歸りなされては全く氣抜きのやうにおなりなされ、定めし泉下に御在あるお殿様や、若殿様は、此の九郎助をお怨みなさるだらうと思へば、私は一日も早く此の世を去つて、皆様にお詫びいたしたうございませぬ」ホロリ／＼と落す涙は次第に烈しくなつた、處へ妻のお初娘のお三も歸つて来て 初「只今歸りました、貴郎和子に何事もお打ち明けてございませぬか、どうか和子様、シツカリなされまして大導寺のお家を立派にお立てなされて下さいませ」夫婦は涙ながらに五郎の身の上を殘らず語つた、五郎は黙つて聞いて居たが 五「イヤ、もう皆泣いてくれる

なく、生みの親より育ての親、そうした身の上とは知らず今まで散々苦勞をさせたが、これからは安心させるから、今までの通り親子、三ちやんとは姉弟として可愛がつて下さるやう」と、頭を下げた。九「イヤ、勿体ない、浮世を忍んでとは云ひながら、現在御主人の御息を、我が子のやうに五郎五郎と呼びつけにしたのは勿体ない。初「どうぞお許し下さいまし。五「イヤ、そのやうに云はれては困る、矢ッ張りお前さん方は、私しの爲めにはお父さんお母さん……然しお父さん、先刻の奴はどうしてあんなことを云つて来たのだ。九「サアそれが、貴方に何んとも申し譯もないことで……實は我家没落の當時、貴郎が御成長なされて世に出られた時の用意金にと、三百兩のお金子を頂戴して参りましたが、其の後は云々斯々、婿の爲めに此の家も滅茶、大概片はつけましたが、一軒忘れて居たのは、婿が金貸から借りた五十兩の金子、利が積つて八十兩ばかり、其の金子を八釜しく取り立

てに來ますが、今では五十兩はさて置き、斯う寝て居ると一兩の金子の算段もつきかれますから、あゝ八釜しく申して來ますので……五「フウ、金子がないから……ハツハ、ハ、ハ、決して心配することはない、金子さへあれば何も心配するまでもあるまい、私しがこれから金子は算段して遣るから……九「して和子様、何處かに目的でも……五「イヤ、目的がなくつても來月の十五日まで待てば……五十兩や百兩の金子をこしらへて遣る……九「來月の十五日と云へば、あの雀の宮のお祭禮……五「そうだ、それまで待つて居てくれれば、決して心配することはない」と、造作もないやうに云ふ、夫婦親子は話してみると、世間の人が云ふ通り馬鹿でも阿呆でもない、其の上今まで通り、親と呼び子と呼んでくれと云ふので、三人は五郎五郎と以前にも倍して可愛がり、九郎助は駿河守の忘形身、相模入道安次の一刀を渡した、五郎は押し戴いて。五「フウ、これが父の片身か……



と、暫らくサツと見詰めて居たが、ホロリツと涙一滴、思はず九郎助夫婦も涙を落した五郎は相も變らずお父つさんお母さんと、九郎助夫婦を親の如く仕へて居た、然るに毎年三月十五日は雀の宮の大祭禮、其の祭禮の呼物は素人角力、毎年近村近郷から一俵或ひは二俵づ、持ち出し、十人抜き勝負、米俵十俵に金子が五十兩づ、褒美に出る、これを聞き傳へて力自慢の村々の若い衆は勿論、近國遠國からドシ／＼乗り込んで来る、三人抜き五人抜きともそれ／＼、褒美が出る、最後に十人抜きには白米十俵に金子が五十兩と云ふが、幾千幾萬の見物人から祝儀が出る、其の金額が大したもの、少なくとも百五六十兩から二百兩近くもある、一日二日前位から村々の若者共は角力の稽古で一生懸命、殊に今年は領主奥平家に何か御慶事があつたといふので、其の祝ひとして、十人抜きの者には金子三十兩米俵十俵玉ばつた、そうなると一層人氣が湧いて大騒ぎ、其の邊の宿屋宿

屋へは見物人と角力に出るものとでギツシリ、噂さは角力の話ばかりであつた、いよく其の日は近づいて来る、人氣はますます高く、角力は晴天三日早やくも三月十五日になると、朝も暗い内に其所を目掛けてワイ／＼と押しかけ、夜が明けた頃には人でギツシリと埋まり、殆んど立錐の地もないといふ盛況、雀の宮神社の横の大原、三方に棧敷を構らへ、正面には奥平家中の人々、兩棧敷には、近郷近在の名主始め主だつたる人々、其他棧敷下或ひは空地、其の邊の木の上へ人を以つて黒山を築いて居る、角力の係りは雀の宮の小野山権左衛門、伊勢濱藤太郎、宇都宮の鳴島新太郎、山之井三右衛門等といふ俠客連中が取締り、それ／＼角力上りの監查役が四本柱に扣へ、奥平家よりは太守の代理として家老奥平將監殿御見物あたり、奥平家郡奉行配下、及び土地の代官尾崎久兵衛が配下を連れて取り締つてゐる、角力は暗い内から始まり、一勝負毎にヤンヤ／＼と鯨波をあ

げ、天地も爲めに崩るゝばかり、一日二日はさほでもないが、いよく三日目  
 となる、何れも闘争をひといふので一層の人出、押すなくと夜の明けない  
 内から大騒ぎであつた、此の日は五郎は 五「サアお父つさん、今日は出か  
 けるんだ 九「何處へだ 五「お父つさんも病氣が大分よくなつたから、今日は  
 雀の宮の角力を見物に…… 九「イヤ、名主さんから誘はれたが、マア今  
 年は見合はせだ 五「イヤ、今年見なければ不可ない、今日こそ豫めて約束の  
 金子をこしらへる日、金子が八十兩に白米が二十俵、マアこれだけあれば一寸  
 塔が明く、サア行かう、九「コレ、五郎、お前、ナ、何を云つてゐるんだ  
 五「何を、角力に勝つて金子八十兩と白米二十俵貰ふのだ 九「何を  
 馬鹿な……お前は氣でも狂つて居るのではないか、あの關と取るうといふの  
 は、普通大抵のことでは取れない、少し小力のある男は直ぐそんなこと  
 を思ふが…… 五「イヤ、お父つさんは只だ見て居ればいゝのだ、乃公が

背負つて行つてあげる…… 初「コレ、五郎、何を、何を、お父さんを無  
 理に背負つたり何かして…… 五「イヤ、お母さん、姉さん、今日は乃公が  
 雀の宮の角力で十人抜きを遣つて、白米二十俵と金子を八十兩貰んだ、そ  
 れをお父つさんに見せに連れ行く、お母さん姉さんも見たければ後から來な  
 い」と、早やくも無理に父九郎助を背負ひ、其の儘雀の宮を差してドス／＼  
 駆け出した。

飛び入り

雀の宮まで來ると、軒並に祭禮提灯吊して、老若男女、今日を晴れと  
 着飾り、ソロ／＼練り歩き、戯々として楽しんで居る、五郎は父九郎助を背負  
 つてドス／＼ 五「ヤア退いた、危ぶないぞ、突き當つて轉んでも知ら  
 んぞ」と、押し退け、進む、中には五郎の顔を見知つて居るものがある

と見へ (「ヤア五郎だ……親父さんを背負つて何處へ行くんだらう」  
 サア馬鹿だが、名代の孝行ものだ、親父に角力でも見せやうつてんだらう」其  
 の内に早やくも境内に入り、角力場へ來ると、ギツシリ満員、一勝負毎にヤ  
 ンヤくと褒め聲をあげる 五「ハイ御免よく」と、押し退けく通る △  
 押しちやア不可れエ X「誰れだ、押すのは……」 五「角力取るのだ退いて  
 くれく、オイく茂原新田の名主さんは何處に居るく」 X「ヤア五郎ち  
 やれエか、何んだ、親父さんを連れて來たのか、名主さんは西の棧敷の真中  
 に居る 五「そうか」と、又も押し退けく進み、漸やう西の棧敷の下まで來  
 たり、ビヨイと身輕に飛び上り 五「イヨ一名主さん、親父を連れて來た、見  
 せて遣つておくんなさい 民「誰れかと思へば五郎か、オ、九郎助ごんも……  
 病氣だと云ふがどうしなすつた……」 九「ハイお陰で此の四五日はズツと樂  
 になりました……今日は忤が無理にといふのでお邪魔に來ました 民「そ

れはよく來なすつた、此處は茂原新田の人達の棧敷だからエツクリと見物  
 しなさい 九「オ、茂十さんも多助さんも……オ、新助さんも……」 皆「  
 オ、九郎助さん來なすつたか……」何れを見ても知り合ひ、九郎助も何時  
 になく心地よく見物して居た 五「名主さん、一寸聞くがね、彼處に積んで  
 ある米俵が、十人抜きにくれるといふのは 民「そうだ、十人抜きには毎年  
 白米が十俵に金子五十兩に決つて居るが、此年は御領主様に御慶事があると  
 云つて、金三十兩に白米十俵を、十人抜きの關に下され、尙ほ五十兩角力係  
 りの者へ下さるといふので今年の關争そひは一層力が入る 五「フム、そ  
 うか、では誰れが出て十人さへ抜けばあれを呉れるんだね 民「そうだ 五」  
 では名主さん、乃公が一つ飛び出すから、あの二十俵家まで擔いで行く人をこ  
 しらへて置いておくんな 民「誰れか出るんだ 五「乃公が出るのよ 民「お  
 前が……」 五「お前がとほぼうだ 民「オイく五郎、人はお前の事を馬鹿

だくといふが、私しは慾目か、お前を馬鹿とは思はなかつたが、そんなことを云ふところを見ると……五「なんだ馬鹿とはどうだ、乃公が角力に出るといふから馬鹿と云ふのか 民「そうだ、小供の角力や村の角力とは違ふぞ、これは此の近郷近村は申すに及ばず、遠國からお武士や商買人がドシドシ出て来る、ナカ／＼素人で小力がある位では鬨争そひにも出られない此の近村で鬨争そひに出るものは、乃公が村では新田の小島山新右衛門に田島川の仙左衛門、雀の宮には強い人が居る、第一に龍田川の大藏さん、それに今出山の權兵衛、山泉の權太郎、宇都宮では山吹の仙右衛門、小錦の與右衛門さん、その他村々で十人位、三四年前までは此の中の人が誰れか、鬨を取つたものだが、此の頃では遠國から強い／＼人が出て来るから、ナカナカ油断は出来ない、三年前に龍田川の大藏さんが鬨を取つたのが、此の邊では終りだ、然し今年は何んでも此の近邊で鬨を取られはならぬといふので、

烈しい／＼稽古をして、村でも小島山も田島川もメキ／＼肉がついたから、シツカリ取るだろう 五「ハツハ、あんな奴なら乃公の片腕にも足りない、乃公が飛び出したらコロ／＼だ、何んなら此處に集まつて居る人が、乃公一人に惣がかりになつてもコロ／＼にして見せる」と、ます／＼大言吐いた、親父の九郎助聞き兼ねて 九「コレ／＼五郎、お前何を云ふのだ、お前方の出る角力とは違ふ、溫和しく見て居れ／＼ 五「お父さんこそ黙つて見て居なさい、ねエ名主さん、誰れでも出ていゝだろう 民「そりやア誰れが出ていゝが、マア／＼見て居る／＼、それ宇都宮の山吹仙左衛門があがつた、見て居れ／＼いよく鬨争そひになつたといふので、見物人は熱狂せんばかり、蟲負／＼の名を呼ぶ、流石は名を取つた山吹仙右衛門、忽ち二人ばかりをコロリツと負かし、三人目には浪人者の山森郷太郎といふのが飛び出した、浪人者もナカ／＼の大力、遂に山吹は美事土俵を割り、續いてドシ

ドシ名ある人々か飛び出し、角力はだん／＼と佳境に入つた、五郎は目を離さ  
 ず見て居たが 五「名主さん 民」なんだ、入釜しい 五「お前さんは乃公を  
 馬鹿にするが、もし乃公が居て十人抜きをしたらどうする 民」ハツハ、ハ、  
 馬鹿なこと休み／＼に云ひなさい、お前に關が取れてどうなるものか、あの  
 中の一人でも仆すことは六ヶ敷かろう 五「オイ／＼名主さん、馬鹿にしちや  
 ア不可ない、そんなに乃公を見縊つて、もし美事勝つたらどうする 民もし  
 美事勝つたら、どんな算段しても、村の名譽だ、百兩遣らう 五「ヨシ／＼、  
 これで百八十兩出來た、オイ／＼此處邊に居る人、乃公がこれから角方に飛び  
 出して十人抜きをする。名主さんも勝つたら百兩遣るといふが、もうこれ  
 る人はないか」これを聞いて一同の人々も呆れ返つた、五郎は阿呆の上に氣が  
 狂つたのに違ひないと誰れも相手にはしない、中に村でも金満家の新田の多  
 助といふ人 多「なんだ、五郎お前が飛び出す 五「そうだ、もし勝つたら名

主さんが百兩遣ると云ふのだ 多「ハツハ、ハ、ハ、面白い、お前のやうなもの  
 で勝てたら乃公も百兩出すぞよ 五「ヤア有難い……これで二百八十兩……  
 お父つさん、これでもう二百八十兩に白米二十俵出來たよ 九「ナ、何を馬  
 鹿な……どうか皆さん、五郎の云ふことは取りあげないやうに…… 五「  
 何を父つさん云ふんだ……、然し名主さん多助さん、お前さん方云つたこと  
 は忘れはしまい 多「サム、忘れはしない、屹度遣るが、もし負けた時はどう  
 する 五「イヤ、負けるやうなことはない 多「馬鹿を云へ、もし負けた時に  
 は…… 五「負けた時には坊主になつて、逆さに村中を歩いて見せる 皆「  
 イヤ、これは面白、五郎が坊主になつて村中を逆さになつて歩く、遣つて  
 みる／＼」人々はワイ／＼云ひ出す、父の九郎助はますます心配する 五「  
 イヤ／＼、お父つさん、心配することはない、どうやら此の分では一度に金持  
 ちになりそうだ待つて居なされ／＼」と土俵の勝負如何に、見物して居る、其

の内に勝負はだんくと取り進み、正午少し過ぎると、龍田川の大蔵が上つた。此奴至つて人間は悪いが角力は殊の外巧者だ、茂原新田の小島山も田島川も脆くも投げ出され、早やくも五人まで美事に勝ち抜き、これから家中から齋藤伍助と名乗る大兵肥満の武士が飛び出したが、これも美事に土俵を割り「龍田川」と呼び聲高く、今や龍田川は殆んど無敵に見へた、七人目に、今出山の權兵衛飛び出したが、暫らく揉み合つてゐる内に龍田川の鐵砲で美事今出山の負け、残り三人になつた、今年に龍田川の勢が頗ぶるいゝので人々はいよく今年の關は龍田川だろつと云ひ出すものさへあつた、然し後には山泉の權太郎に小錦與左衛門が扣へて居る、然し山泉は的にならない何んと云つても同村、もしや勝ちを譲るやうなことがあつてはならぬと、此の場合には見合はせとして、小錦與左衛門が出たら押へに出るものがない、行司は頼りに見物人の中へ飛び入りを勧めた、斯うなつては誰れも飛び出すもの

がない、それと見て、西棧敷に見て居た五郎はバツと棧敷を飛び下つて 五「飛び入り〜」と、大聲をあげた。

◆オ、天の風と呼んでくれ

人々は驚ろいて 皆「アツ五郎が……」と、云ふ内に 五「飛び入りあるぞ飛び入りあるぞ」と、人々の頭の上をヒョイ〜と飛び歩き、土俵の上へバツと飛んで出た、行司は驚ろいて 行「何んだ、お前さんは……」 五「飛び入りだ、一番取らしてくれ」四本柱に座つて居た人々も、見れば年若の百性風の男、然かも終まで見たこともない、見物人は △「ヤア何處の奴だそんな若造に關角力取らせられるか、引き摺り下せ〜」 ○「叩き飛ばせ〜」 ワイ〜騒ぎ出した、監査役の一人、小野山の權右衛門、ツカ〜と進み出て 權「オイ〜若造、お前エは一体何處の人だ 五「乃公か、乃公は茂原新田

九郎助の、悴の五郎といふものだ。權「フム、大蛇に吞まれたとか云ふ小悴だ、な、もうお前なんかの取る角力は昨日一昨日で済んだのだ、彼方へ行つて居れエ〜」五「オイ〜、一寸待つた、では此の角力は誰れも取つちやア不可ないと云ふのか、今行司が見物衆の中で、飛び入りに出やうといふお方はございませんかと云つたぢやれエか、だから乃公は出て来たのだ、第一彼方へ積んである白米十俵と金子八十兩、貫ひに來たのだ。權「ハツハ、ハ、ハ、手前エは氣でも狂つて居ると見へるな、もう八番の大切な角力だ、折角取りたいと云ふのなら後で取らして遣るから……」五「イヤ〜八番目の角力なら、乃公は滅多に負けることはないが、も〜負けたとしても後二番ある、其の二番は強い押へがなければいゝではないか」とクルリと早やくも素ッ裸体になつた、見物人の中には取らして遣れといふものもあれば、大切な角力だ引き下せ、と云ふのがあゝ、と〜ゴタ〜が起つて年寄連世話方達はいろ〜評議なし、

ナカ〜に決しない、關取衆にも聞く、中には取らして遣れといふものもあれば、不可んといふものもある、時に押へとして的小錦與左衛門、此の男は至つて力もあるし、角力巧者であるが、物分りのする人物、與「ヤア、皆、これが他國のものと云ふではなし、近村のもの、殊に話して見れば満更ら氣狂でもなさそうだ、身体を見れば年若だがシツカリして居る、それに滅法力のあるといふことは聞いて居るから、出して見るもよからう、五郎の云ふ通り、八番目に負けても後二番ある、後の二番で負ければ今年は龍田川のものだよ、出して遣れ〜」△「イヤ、不可れエ〜もう八番目の大切な角力だ、あんな阿呆の五郎ぢや頼りない」と今出山其他五六人の人々ガヂヤガヂヤ言つたが、遂には取らして遣れと云ふ方が多数となつた。五「ヤア……小父さん、豪い、小なにな吐かすのだ、だが五郎とやら手前エ負けちやア不可れエぞ。五「ナアニ、大太夫……あんな龍田川なんか一掴みだ。五「ハツハ

……大きなことを云ふだけでも價值があらア……なんだ、手前エの禪は……そんな薄汚れエ禪で角力が取れるものか、誰れか貸して遣れ、オイオイ乃公の代りの奴を貸して遣つてくれ」親切な男だ、小錦與左衛門は五郎に締め込みをさせて遣る、用意が出来た、人々勝負如何にと見物する 行「時に若い衆、名は何んと云ふのだ 五」五郎だ 行「五郎は分つて居るが、名乗りは…… 五」名乗りと云つて別に……オ、天の風と呼んでくれ 行「へエ、天の風……妙な名だな…… 五」時に行司 行「何んだ、豪そうに云ふな 五」物事は始めから云つて置かねば後で争そひとなると不可んが、十人抜いたらあの白米十俵と金子八十兩くれるんだらうな 行「そうだ、勿論遣る…… 五」ヨシツそれを聞いて用はない、サア来い、龍田川」と、大手を擴げた、此方龍田川は沈着き返つて居る、なんの多寡が小僧ツ子位ひと侮ざり悠々と仕切つてゐる、行司は軍配を取つて 行「片や龍田川々々、片や天の

風く」と、名乗りをあげ 行「見合はしてく」と 兩人の間、軍配を差し入れた、見物人は一段の大騒ぎ ○「龍田川々々 △「天の風く、シツカリ遣れく、龍田川を投げ飛ばせく △「龍田川、大事取れく、輕卒に取るなく」蟲負々々を呼はる、此方西棧敷では父親の九郎助 九「ヤア困つたことになつた……ナ、何んと皆さんに申し譯がございませぬ……ア、あの通りの馬鹿者ですから……モ、もしや負けたらどうするぞ……切めては一度でも勝つて……南無新田の八幡大菩薩、私の壽命、五年十年縮めても厭ひませぬ、どうか五郎に切めて此の角力一番だけなりとも勝たせ玉へく」と、心の内に念じて居る憐れさ、それとも知らぬ他の人々は ○「ハッハ、とうく五郎奴出居つた、今に見る、龍田川に鐵砲で五六間も素ッ飛ばされるから…… △「阿呆といふものは仕方がないものだ」と、親が側に居るのも忘れて悪口を吐いて居る、此方土俵の上では双方仕切つて 行「



見會はして……まだく」行司は双方の呼吸を圖つて、バツと軍配を引いて、ハツケヨイヤ」五郎はメツと突立つて 五「サア来いッ」と、大手を擴げた、角力巧者鐵砲の名人の龍田川大藏 大「汝れッ小癩な小童めッ」口には云はれぬ心の内、ヤツと一聲ドーンと突いてかゝつた、心得たりと五郎は上から大藏の利腕グット引ッ擱んだ、何んと云つても十年間山奥、で辛く血の涙が出るやうな修業した五郎、性來怪力である上に、ますく練つた底なし力、グツと引ッ擱まれた大藏はグイッと引かうとしたが、今にも骨は砕けそうだが、忽ち五郎は兩手を離して 五「サア来いッ」とバツと體を換して、大藏の横ッ面ビシャーリ 大「ウワーワー」と、叫んだが、又も夢中になつてドーンと突きかゝると、再びグツと引ッ擱み、もう宜がるうと、兩腕引ッ擱んだなり、一二度ビューく搖つたが、やつと一聲叫ぶと龍田川の大きな身體、ブーンと、五六間先き、見物人の頭の上へドスンと

落ちた、此の美事なる勝負に、見物人一同アツと呆れて、少時言葉も出なかつたが、やがて一齊にヤンヤくと叫ぶ聲は少時の間鳴りも止まなかつた、續いて二人三人と飛び出したが、瞬く間に投げ出す、名主始め茂原新田の百姓連中は、皆「豪いぞぐゴ、五郎シツカリ遣つてくれ、お前一人だ」父親九郎は 九「有難い、南無八幡様……オ、又勝つたか、ゴ、五郎、マ、負けて呉れるな、怪我するなよ」と、オロく聲であつた、其の内角力番數もだんぐに進み、五郎は六人まで苦もなく投げつけた、斯うなつては又出るものがない、此度は山泉權太郎が七番目に飛び出したが、これも苦もなく遣られた、もう出ない、見物人は △「なんとあの天の風と云ふ奴は強いではないか X「おつそろしく強い奴だな、名ある角力があの通り苦もなく遣られるやうではもう出るものがあるまい」と、ツア／＼云つて居るところへ 武「オー飛び入りだ」と、タツと現はれ出でし一人の浪人、身の

丈拔 群大兵 肥満の武士 武「どうぢや、一番取らしてくれい」と、ズイツと飛び上つた。

今日の關は天の風

見れば虎髯ホーく喰ひ反らし、三十代の血氣盛んな武士 武「一番取らしてくれい 行「へい、貴郎は……」 武「ウム、逢阪山と云つて置け」見るからに強そいな武士、グルリ素つ裸體になると、力瘤はニユくと盛り上り、ウムと氣張つた形相の恐ろしさ、然し薄汚ないモッコ禪には驚ろいて、恐るく係りの者は締込みをさせる 武「アイヤ若者、其の方は年若に似合なき天ッ晴れなもの、乃公は少し勝負を荒いから其の積りで取れ、然し褒美は別に入らぬ、乃公が勝つたら貴様の大力に愛で、半分遣るぞ 五「ハッハ、ハ、大言吐くな、文句は寝てから云へ 武「何をッ……」と、早やくも掴み

かゝらんとした、行司は 行「待つて下さい、見合はして、ハツケヨイヤ」と、軍配を引く、双方はノツツリ突立ちあがつて、双方ザと睨み合つてナカく進まない、見物人は ○「どうだい、妙な角力ぢやねえか、△「まるで柔術の稽古見てえぢやねえか X「なんだ、おつそろしい妙だな、虎髯しツかり頼みますぜ △「天の風……一週に吹き替へ」此方土俵の上ではヤッエイツと睨み合つてゐたが、忽ちヤツと大喝一聲、虎髯はドツと飛びかゝると、五郎は心得たりとガツキと四つに引ッ組んだ、虎髯もナカくの怪力 武「ヤアーウン……」と、力をこめると何時しか五郎はすんすんくと、押されて土俵際近くなつた 行「後がない」見物人は大騒ぎ ○「虎髯、もう一息きだ」△「オイ、天の風、どうしたんだ、シツカリ」此方五郎は危ぶく土俵を踏み割らんとしたが 五「エイッヤツ……」と、力むと、此度は反對にズンくと、虎髯は追ひ出され、土俵真際に來た

つた 行「後がないく」此處だつと虎髯、満身の金剛力を絞つて 虎「ウー△」と踏み堪へた、此の時五郎は 五「ヤツと大喝一聲叫ぶと、不思議や虎髯の身体はモンドリ打つて土俵の外へ打つ仆れた 行「天の風く」と、軍配をあげると △「ヤア豪いぞく、天の風く」と見物はますます熱狂した、虎髯は極まり悪いと思つたか、前の勢ひに引き換へ、何時しかコソコソと其の場を立ち去つてしまつた、もう後二番、一人押へは小錦與左衛門、今一人は飛び入りと觸れたが、もう誰れ一人として出やうとするものもない、ないとすれば小錦與左衛門が土俵へ登らうとした時 乙「アイヤ行司、飛び入り一番取せてくれ」と、ズイとあがつた、一人、四十の上を一つ二つは越へて居るらしい坊主武士、身には十徳のやうなものを懸た得體の知れぬ男、行司は妙に思つた 行「へエ、お前さけですかい 乙「如何にも私しぢや、もう見受けるところ出る人もない様子、それに押へは極まつて居るとか、どうか乃

公に取らしてくれ」すると見物人の中で △「ヤア坊主では駄目だく引ッ込めく」×「ヤア坊主では駄目でも何んでも構はん、もう天の風に負けて遣れ □坊主、負けるく」斯うなると五郎に加勢するものがだんく多くなつた、もう年寄連中等も、今年の關は五郎にしる、それにもう出るものがないので、別に何んとも云はない、其の内に坊主武士はグルくツと素ツ裸體になる、ナカく前の武士に劣らぬ骨柄、天つ暗れ大力無双らしい ○「ヤア坊主も割りに強そうではないか △然し此の勝負は天の風に勝たして遣りたいものだ」其の内に行司は 行「片や天の風く、片や坊主山々々」と、高らかに呼びあげた 見「ア坊主山に天の風とは妙な名ではないか、天の風シツカリ遣れ △坊主山も負けるな」と、ワイく叫ぶ、その内に兩人は仕切る、行司の引いた軍配と共に双方立ち上る、坊主山は先きの浪人者とは違つて、ナカく角力巧者らしい、第一その構へから違ふ、少時双方烈しく

突き行つたが、やがてガツキと四つに引ツ組み、エイヤツと喚き叫び、地響  
 打たして争ふ様は實に勇ましく龍虎博闘、何れが勝か負か、見物人は一同  
 手に汗を握り、思ひ／＼に其の名を呼んで居た、其の内に天の風は坊主山を  
 して土俵間際まで来た。行「後がない／＼、ハツケヨイヤ／＼」行司も一心、  
 見物も「見」坊主山、フン張れ／＼、後がないぞ／＼」と、懸命坊主山も此  
 處ぞと「坊」ウム……」と、顔を赤めて支へて居たが、五郎がヤツと叫ぶ  
 と、坊主山の身體は一二間素ツ飛び、行司は「行」天の風／＼」と、勝名をあ  
 げると、ワア／＼歡呼の聲は耳も聳するばかり、間もなく、押へにして小錦  
 與左衛門、白象のやうな白い身體でソソ／＼上つた、宇都宮の町の人々は  
 「×」小錦／＼」と、ワア／＼呼び立てた、流石は場慣れた小錦與左衛門  
 悠々と仕切り、二度俟つたと云つたが、三度目に「小」ヨイシヨツ」と、立ち  
 上つた、五郎の目から見ると、先の浪人や坊主武士の十分の一にも見へない、

然し多少は恩義のある小錦をウムザ／＼と責かしては氣の毒と、ワザと相手  
 の爲すが儘にして居る、小錦はそれとも知らず「小」ヨイシヨツ」と、御得  
 意の左差し、ガツキと引組んだが、這は如何に、相手の身體は左程大きくも  
 なく、自分よりは小さいやうだが、地から生へた大磐石の如くピクとも動か  
 ない「小」オヤツ……」と、思つたが、何んと云つても最後の勝負、ヤツウ  
 ーン……ヨイシヨツ」と一生懸命然し相手には少しも應へない、少時する  
 と「五」小父さん、もういゝかな、氣の毒だが此の勝負は私しが貰つて置くぞ  
 ん」と、云ふかと思ふと、相手の三つを上から引つ摺んで、ヤツと叫ぶとズツ  
 と引つさげ、いと輕々土俵際までノツシ／＼持つてソーツと置いた、此の呆  
 ツ氣なき勝負には満場の見物人、アツと驚ろいて、目ばかりパチ／＼させて  
 居たが、行司が「行」天の風／＼、今日の關は天の風」と、呼び上げると、一  
 齊にヤンヤ／＼と讃めそやし「△」天の風、彗いぞ／＼」と、羽織着物手拭

煙草入財布をバラとくく、兩霞の如く土俵目がけて投げつけ。×「天の風天の風」と、褒めそやす聲は暫らくの間、鳴りも止まなかつた。五郎は忽ち西の棧敷へ來たり。五「お父つさん、ごうだ、もうく二百八十兩に白米二十俵は貰つたよ。九「オ、……悴……五郎……」と、九郎助は言葉も出てす五郎を抱くやうにしてホロく涙を流して喜んで居た。五「サア名主さん、多助さん、約束通り百兩づゝ貰つたぞよ。民「オ、遣るともく、よく勝つてくれた、私しの村では此の七八年といふものは關を取つたものはないによく勝つてくれた、村の名譽だ。多「豪エく、百兩は愚か、いくらでも出すぞよ」一同五郎の手を取つて喜び勇んで居る。五「オイ、名主さん、お前ア若い人にそういつて、彼の米俵を家へ届けてくん。民「ヨシく。五「頼むぞよ、お父つさん、冷ると不可れエ、サア歸らう」と、五郎は九郎助を背に負ひ。五「皆さん御免……」と、スタく、名主始め人々は。△「なんと五

郎といふ奴は強い奴ではないか、あんな力のある奴とは思はなかつたに……民「然し孝行な奴だ、九郎助さんは嘘を嘘しからう」と、何れも五郎の後姿を見て羨ましがつてゐた。此方場内は未だ破れんばかりの大騒動。五郎は母姉を喜ばせんと、父を背負つてスタく我が村を差して急ぎ足、早やくも村の入口、一軒茶屋の手前の竹藪まで來ると、一人の若い男がドーンと突き當つた。○「馬鹿野郎氣をつけるい」ヒヨツと見ると、遊び人のやうな風體の奴。五「なんだ、コン畜生、乃公は斯うやつて親父を背負つてゐるのが分られエか、ケズく吐かすと蹴あげるぞ」脊中では父の九郎助大いに心配して。九「オイ五郎、相手が悪い、イ、加減にしるく」と、云ふも低聲。五「イヤ、構はんく。○「なんだ、此の土百姓奴ツ、生意氣なことを吐かしアがる、それツ」と、云ふ聲につれて、彼方の藪中より繩の禱に向ふ鉢巻き、腰に喧嘩刀を打ち込んだる勇みの男、十五六人ゾロと立ち出でた。

◆これが八方遠當ての術ぢや

中にも一際勝れた大男。大「ヤイ五郎、手前エの歸るのを待ち受けて居たのだ、よくも乃公を小ッ酷い目に投げ居つたな、手前エに勝たして置いちやア乃公達の顔が立たねエ、命は貰つた観念さらせ」と、ズラリ大刀を引き抜いた。五「オ、そういふ手前エは龍田川の大藏といふ奴だな、ハツハ、一寸貴様等の手には合ひ兼ねる男だ、出直せ〜」大「汝ッ小童の分際で生意氣なッ、それッ老父請共遣つ付けてしまへ」△「合點だッ」と、仲間の奴等何れもズラ〜と抜き放ち、エイヤツと斬り込んで来る。五「ハツハ、命知らずの木つ葉者奴、お父つさん、一寸五郎の腕前を見せてあげる、脊中でユツクリ見物さつしやれ」大「何をッ……此の野郎」と、大藏眞ッ先き立ちになつて斬り込んで来る五郎はヒラリ〜と體を躲して居たが、ヤツと叫

ぶと、何れもマツタリ打つ付れた。五「お父つさん、これが八方遠當ての術ぢや」大「何をッ……」△「それッ」と、何れもムク〜と起きあがつて再び斬り付ける、五郎はスツタと立つて、口中に何やら唱へ片手で九字を切ると、突然ビュ〜と天風起り、一同の奴等はコロ〜、五郎の周圍を駆け廻つた。九「イヨ〜コリアどうしたのだ。五「ハツハ、お父つさん、これが仙人から習つた天風の術といふ妙術ぢや。九「フム……天風の術……察いものだな……然しこれからどうなるのぢやな。五「ハツハ、一、黙つて居れば何時までも轉がつて居る、術を解けば氣がつくが、面倒だ斯うして遣れ」と、一々ボン〜と蹴あげると、ゴロ〜ドブ〜と側の小川の中へ落ち込み、アプ〜ヤアプ〜と藻掻いて居る。五「ハツハ、一、態を見る」と、其の儘スタ〜と駆け出して我が家へと立ち歸つた。五「ヤアお母アさん、姉さん、今歸つた……」母親も姉のお三も迎ひに出で。二「オ

五郎……お父つさんも……ごうでござんした今日の角力は……面白うございましてか 九「オ、面白いどころか、五郎は十人抜きで勝ち居つたぞ 姉「エ、ツ……五郎が…… 三「マア五郎ちゃんか…… 九「勝つも勝つもそれア豪いものだ、實は云々、斯々と乃公アア腰が抜ける程嬉しかつたぞ、褒めて遣れ〜 姉「エツ……ではそんなに勝つたのでマア〜」意外にも五郎の勝つたので親子二人マア〜の連發、五郎を圍んで大騒ぎ……今まで何んもなく陰氣臭かつた家の中も、急に明るくなつたやうな心地、其の内は早やくも日は暮れかゝる、と、ころへ早やくも駈け込んで来た一人、これぞ近所の多十といふ男 多「オイ〜九郎助さんや、五郎よく〜 五「オ、多十さんが、何が用かな 多「用ではない、今村の若い衆が二十俵の米を擔いで来るぞ、提灯を點けれエ〜、高張りを…… 五「高張り……そんなものはない 多「高張りがねエ……ちやア仕方がねエ、名主さんの家から持つて

来て遣る、用意しれエ〜と、駈け出した、後に親子は何んもなくウロ／＼して居る、其の内に多十が高張り提灯を持つて来て、表口に點けドシ〜、火を焚いて待ち受ける、と、ころへ早やくもワツシヨ〜と、村の若者、一杯氣嫌の勇み聲、白米一俵づ、引つ擔いで、茂原新田の村人ツロ〜押しかけて来て九郎助の狭い家は破れんばかり、其處で名主の指圖で五六挺の酒樽を抜く、何れも五郎の勝を讃してカブ〜飲む △「イヤ、五郎は豪いぞ〜、村の響れた〜、飲め〜」此の盛大なる景氣を見て、九郎助夫婦、娘のお三は嬉し涙をホロ〜溢して、只だ有難うございます〜とお辭儀をしてゐるばかりであつた、やがて村人の重立つたる人の差圖で、二十俵の白米を家の前へ杉形に積み重ね、一同一先づ我が家を差して立ち歸つた、後に名主民右衛門、角力取締小野山權左衛門、伊勢源藤太郎、鳴島新太郎の三人、何れも紋付きの羽織袴 小「誠に今日はお芽出度うございます、では白米

二十俵……金子八十兩はたしかにお届けします」と、一封を差し出した。民「それに九郎助さん、五郎喜べ、御家老様始め御家中よりとあつて三十兩下し置かれたぞ、それ一と、三十兩の一封を差し出した。鳴「して祝儀のところはまだ調べ最中、明日正午頃になつたらお届け申します、何しろ例年は百五十六十兩から二百兩近く、然し今年は二百兩は上越すだろうと思ひます」と、云はれて、九郎助夫婦は「九「有難うございませう」と、禮を述べて居た、間もなく一同は歸る、夫婦は涙を流して五郎に禮を云ふ。五「なんのく、親が子に禮を云ふことはない、然しお父さんお母さん、私しもどうかして將來は大導師の家を立てたい、ついでにはまづ師の仙人から頂いた天風といふの姓にして、天風五郎直信と名乗り、これから武士の仲間入りする、それについて此の後如何なることがあつても心配しない様に、又乃公の心任せにしてくれる様願ひますぞ。九「それは申すまでもないもございませぬ、どうか一

日も早やくお家をお立て下されませうやう。五「イヤくその通り云はれると困る、どうか今まで通り、五郎くくと呼んで下され」其の夜はいろくの話して夜更けて寝た、翌日になると、鳴島新太郎が祝儀引き換へ、三百四十兩といふ大金を持つて来た、五郎は受け取つて。五「イヤ、いろくお世話でした、ついでには甚はだ少ないが、五十兩……どうか皆さんで酒の一杯も飲んで下さるやう。鳴「イヤ、有難うございませぬ、では遠慮なう」と、納め、いろく話して立ち歸つた、後へ名主に多助の兩人、約束の如く二百兩持つて来た。民「して村の者も一同大喜び、皆で五十兩集めて祝つてくれた、ぞへ喜びなされ」と、二百五十兩の金子を差し出した。五「マアこれで坊主になつて村中を逆さに歩かんで済んだ。民「その皮肉なことを云ふな、然しお前は何時の間にあんなに強くなつたのだ。五「何時の間にと云つて、山で仙人さんと遊んで居る内に角力を教へて貰つたのだ。九「フム……豪ひものだな



「……………」何しろ九郎助の家には急に大金が遣入つた、五百四五十兩といふ大金  
 その中から百兩の金子を出して 五「名主さん、多助さん、もう少しどうにか  
 したいのですが、知つての通り家は貧乏人、借金だらけ、どうかこれで村  
 の人に一杯でも飲んで貰つて下さい 民「フム、そりや感心だ、では早速村  
 の人と呼んで、乃公の家で勝祝をするこしやう」と、いろ／＼相談して立  
 ち歸り、名主と多助が發起人となつて、盛大なる勝祝を催ふし、九郎助夫婦  
 お三、五郎も呼んだ、其處で九郎助は僅かの借金も支拂ひ、尙ほ四百兩はか  
 りの金子が残つたのを神棚へあげて毎日々々切火をあげた、此の角力以來五  
 郎の名はドンとあがり、天風の五郎／＼といふ名は近郷近村誰れ一人知ら  
 ぬものはないやうになつた。

◆一手比べて見ん

その後五六日経つて、此の邊に見慣れぬ立派な武士、供人二人引き連れ、九  
 郎助の家の前へ立ち止まつた、家來は何やら主人に云ひつけられて、ズカ／＼  
 おもてぐちた 表口に立ち ○「頼もう……………」と、訪ふた 三「ハイ」と、答へて 娘  
 のお三が出た 三「何誰様でございますか ○「五郎の家は當家であるか 三「  
 ハイ、左様でございますが……………」貴方様は何誰様で……………」と、云ふ處へ、  
 早やくも立ち寄つたる件の武士 武「イヤ予は宇都宮から参つたもの、五郎が  
 居れば一寸會はしてくれぬか」相手が餘り立派な武士なので、お三は驚ろいて  
 家へ這入り九郎助や五郎に此の事を云ふ 五「ウム、武士か……………」そうが「ズ  
 カ／＼立ち出で 五「五郎は私しちやが、何か用かな」すると側に居た家來は  
 △「これ／＼控へ……………」 武「コリア咎めるなく、其方に少し折り入つて

話があるが、通つてもよいか 五「こんな汚ない家だが、用があるなら遠慮なく遣入らつしやい 武「然らば許せ……」とズイツと通つた、家と云つても二間か三間、九郎助夫婦は立派な武士が遣入り込んで来たので 九「これはく……」と、騒ぎ 武「イヤ、決して構ふてくれるな、其方が五郎の親御か 九「ハイ、私しは九郎助と申すものでございます 武「ウム、そうであるが、よい悴を持つて幸福ぢや 九「して旦那様は……」 武「予は宇都宮城下の奥平將監と申すものぢや」奥平將監と云へば奥平なれば、家老、領主の名は知らないでも將監の名を知らないものはない位の名高い人物 九「エッ、御家老様……」と九郎助は三尺ばかり飛び退る 將「イヤイヤそのやうにされては甚はだ困る、予は忍ぢや、少し五郎に話したいことがあつて参つたのぢやが、五郎、聞けば此家も以前は武士の血統とやら、ごうぢや其方は奥平家に仕官してはくれまいか」突然の言葉に九郎助夫婦は目を丸くして五郎の返事を待つて居た 五「イヤ、其の仕官はお断り申します」キツパリ断げる 將「オ、オ……仕官は望まぬと申すか 五「左様……昔しは武士でも今は百姓の小悴、疎々禮儀を知らぬもの、勤め奉公は大嫌でございます 將「ウム、強い嫌い方ぢやな、ではごうぢや一度宇都宮本城へ来てくれぬか 五「イヤ、それもお断り、私しは元來至つて我儘もの、殿様ぢやなんぞと云つて遠慮會釋は大の嫌ひ、それはマア御免蒙ります 將「イヤ其の我儘は構はぬ、其の方の大力を主君が聞き召され、是非共に連れ参るやうにとのお言葉、是非予に同道してくりやれ 五「イヤ、其の我儘さへ許せば行かぬことはない 將「よい、それは承知いたし居る、コリヤ九郎助とやら其方の悴五郎を兩三日借りて参るがごうぢや 九「ハイ、それはもう五郎さへ参ると申せば、お連れ下されましても構ひませぬが、何しろ我儘な生れもしや御無禮でもございましては……」 將「イヤ、決して心配することには

話があるが、通つてもよいか 五「こんな汚ない家だが、用があるなら遠慮なく遣入らつしやい 武「然らば許せ……」とズイツと通つた、家と云つても二間か三間、九郎助夫婦は立派な武士が遣入り込んで来たので 九「これはく……」と、騒ぎ 武「イヤ、決して構ふてくれるな、其方が五郎の親御か 九「ハイ、私しは九郎助と申すものでございます 武「ウム、そうであるが、よい悴を持つて幸福ぢや 九「して旦那様は……」 武「予は宇都宮城下の奥平將監と申すものぢや」奥平將監と云へば奥平なれば、家老、領主の名は知らないでも將監の名を知らないものはない位の名高い人物 九「エッ、御家老様……」と九郎助は三尺ばかり飛び退る 將「イヤイヤそのやうにされては甚はだ困る、予は忍ぢや、少し五郎に話したいことがあつて参つたのぢやが、五郎、聞けば此家も以前は武士の血統とやら、ごうぢや其方は奥平家に仕官してはくれまいか」突然の言葉に九郎助夫婦は目を丸くして五郎の返事を待つて居た 五「イヤ、其の仕官はお断り申します」キツパリ断げる 將「オ、オ……仕官は望まぬと申すか 五「左様……昔しは武士でも今は百姓の小悴、疎々禮儀を知らぬもの、勤め奉公は大嫌でございます 將「ウム、強い嫌い方ぢやな、ではごうぢや一度宇都宮本城へ来てくれぬか 五「イヤ、それもお断り、私しは元來至つて我儘もの、殿様ぢやなんぞと云つて遠慮會釋は大の嫌ひ、それはマア御免蒙ります 將「イヤ其の我儘は構はぬ、其の方の大力を主君が聞き召され、是非共に連れ参るやうにとのお言葉、是非予に同道してくりやれ 五「イヤ、其の我儘さへ許せば行かぬことはない 將「よい、それは承知いたし居る、コリヤ九郎助とやら其方の悴五郎を兩三日借りて参るがごうぢや 九「ハイ、それはもう五郎さへ参ると申せば、お連れ下されましても構ひませぬが、何しろ我儘な生れもしや御無禮でもございましては……」 將「イヤ、決して心配することには

ない、予が預かつて参れば……コレ、駕の用意はよいか。〇「ハッ……既  
 に戸外に待たせてござります。將「サ、然らば五郎まづ予が屋敷まで参ろう  
 五」では参りませう。九「では五郎よ、必らず御無禮にならんやうに。三  
 五郎、決して我が儘を出しやるなよ」姉のお三も心配氣に云ふ。五「イヤ、お  
 父つさんお母さん、姉さんも心配しなさんな、殊によつたら又お金子を儲けて  
 来るから」と、云ひ捨て、將監と共に外へ出る。戸外に駕が二挺待つて居る、  
 二人は乗る、駕夫は威勢よく梶棒をあげた、早やくも宇都宮の將監の屋敷へ來  
 る、何んと云つても奥平家隨一の老臣の屋敷、宏壯なる構へ、五郎の風體は  
 妙な案山子のやうな恰好、然し親讓りの相撲入道安次の一刀は腰を離さない  
 將監は家臣に命じて丁寧な扱ひ、生年十八才、五郎は山中で十年の永の  
 年月を暮らし、斯様な立派な屋敷へ來るのは始めた。五「フム……どう  
 やらいよく乃公を家來にしやうといふのだ、奥平と云へば徳川家の旗下の

大名、徳川家は北條家とは親戚の間柄であるのに、豊臣家に合體して  
 四條家を攻めた家、コリア家來に……聞けば北條家の主君は高野山へ逃れ  
 後秀吉公の取り立て、河内邊に御在あるとの噂さ、我れはごうしても他家へ  
 仕官することは出来ぬわい」と、心に定め、ワザと我儘に飲んだり喰つたりし  
 て居た、翌日になると家來の一人が立派な着物を持つて來た。其處で早速着換  
 へる、すると將監が現はれ。將「ヤヨ、五郎、我が主君はお待ち兼ねぢや、早  
 速登城いたそう」と、あつて、又も駕を揃へ、宇都宮城下へと登城して、駕  
 を下ると、室の内に待たせられた、やがて小坊主が來て。△「どうぞ此方へ……  
 ……」と、云はれて、五郎直信は大刀一本驚擱みにしてノシンノク從いて  
 行くと。△「御前でございますお刀を………」と、一人の武士が刀を取りあげ  
 る、尙ほ進むと、大廣間へ出た、正面一段高きところには、七萬七千八百石  
 の城主奥平大膳太夫高昌公嚴然と御着座、直ぐ右側には奥平將

監、奥平平人、池田七兵衛等の老臣始め、奥平家の勇士豪傑連ズラリ居並んで居る、五郎も仕方がない、下座にヒタリ座して頭を下げた、奥平將監は「將、彼れに控へましたるが、五郎も申します」と、披露に及んだ、大「オ、其方は五郎と申すか、予が家昌であるぞよ」と、仰せられた、其の時五郎はヒヨイと頭をあげ、五「ハッ……私しが天風五郎直信と申しまする」

大「フム、天風五郎、よい名ぢやのう、聞けば此の度雀の宮の角力に十人抜きをいたせし由、予が領内に汝如き大力者あるとは、予は喜ばしく思ふぞよ、五「ハッ……大「どうぢや予が家来の内にも力のあるものが居るが其の者と力比べをして見せてくれぬか、五「如何にも承知いたしました」

大「オ、早速承知いたしてくれるか、ヤヨ、虎丸、五郎の相手いたして見よ、虎「ハッ……」と、答へて、遙か末座よりノコノコ進み出でし十八九才の若者、身の丈抜群ムクムクと肥へ太り、これが老臣奥平平人の次男、今

年十八才ではあるが、家中第一の大力者、主君には豫れてより虎丸に力比べをさせやうといふ思召し、用意はスツカリ整つて居た、虎「アイヤ、五郎とやら、一手比べて見ん、五「如何にも承知仕つた」五郎も少しも遠慮はなく、虎丸はあれかこれかと見廻して居たが、虎「オ、其處に御影石聚形の手洗鉢がある、目方はたしか百七十八貫と聞く、どうぢやあれを持ち比べせん、五「きづ貴公から……」

虎「如何にも承知した」と奥平虎丸はハツと庭前へ飛び下り、肩衣刎れて件の手洗鉢の側へ進み寄り、諸手をかけ、虎「ヤツ、ウーム」と、力を入ると、地面に三四尺も埋つて居る大石がガラ／＼動き出し、やがてヤツと叫ぶと、ズんと提さげ、小膝に當て、再びやつと叫ぶと目よくも高くズイツと差し切つた、其の美事な力に、主君始め一同はヤンヤ／＼と讚めそやす、大「オ、美事／＼、序でに泉水を廻つてみよ、虎「ハッ……」と答へて虎丸は、石を差したまんまノツシ／＼と歩み出し、周圍

一丁餘りもあるうといふ泉水、七八分どころまで来ると、もう流石に持ち切れなくなつたか、ドスンと取り落とし、石は二尺ばかりも大地に入り込んだ。此度は五郎の番だ、庭前へ降つて同じく肩衣を剥れ、大石の側へ立ち寄つて諸手をかけてグイ〜と二三度揺り、ヤツと一聲小膝のところへ當てたと思ふと、早やくも目よりも高く差し切つた。家中諸士ヤ〜ヤ〜と讃めそやす、主君は同じく泉水を廻つてみよと仰せになる、元來五郎は山中にあつて、此の位の石は自由自在に持ち歩いて居たので、さほど重くとも別に思はず、一廻り二廻り三廻りと平氣でノツ〜ノツ〜廻つて居る、これには主君始め一同驚るき呆樟。皆「何んと云ふ怪力者であらう」と、互ひに顔を見合はして居る。

大「もうよい〜、五「ハツ……」と答へて、五郎は以前の處へ持ち来たり、ソーツと物靜かに置いた、これにはますます〜一同呆れ返つた。

恐ろしい妙な男ぢや

大膳大夫殿は五郎を側近く召され、大「其方は開きしに優る大か、定めし武術の心得もあらう、どうぢや、五「ハイ、武術と云つて作法型等は存じませぬが、百人や二百人位い相手にすることは心得て居ります」と、いふ大言、一座の人々は、此奴力もあるが云ふことも大きいと思つて居ると、主君は、大「然らば一手見せてくれるやうに……、五「如何にも心得ました、然し一人々々の勝負は殊の外面倒、どうか御家中の腕自慢のお方十人乃至十五六人、それから上は何人でも構いませぬが、どうか相手が願ひたい

大「ウム、よい〜、コレ〜、小林取り計ふて遣はせ」小林と云ふのは名を入左衛門と云つて、一刀流の剣道を以つて四百石頂戴し家中諸士に剣道指南して居る武士、直ちに門弟の中から十二人、腕前の勝れた若武士

を撰び出した、何れも血氣盛んな武士 甲「如何に力量があつても武術は又  
 格別ぢや、多寡が士百性、何程の事やららん 乙「そうぢや、第一百人二  
 百人なご、いふ事が癪にさわるでないか 丙「思ふ存分、腰が立たんやうに  
 打ん毆つてしまへ」何れも後鉢巻き玉襷で木太刀を以つて庭前へ立ち出で  
 た、五郎も身支度して鐵扇一本携さへて立ち出で 五「アイヤ各々方どう  
 か元氣よく向つて貰ひたい、殊に拙者は此の鐵扇一本だが、これは武骨極ま  
 る南蠻鐵の鐵扇、頭にも當ると割れるかも知れん、然しどうも木太刀で  
 は氣乗りが薄い、眞劍を以つてお相手が願ひたい」此奴がくますく大言  
 を吐き居る、構はん、打ち斬れくと十二人何れも大刀を取り出し、ズラリ  
 ズラリ鞘拂ひに及び、四方八方からエイヤツと斬りかゝつた 五「サア來い、  
 來たれツ」と、劍の林の中を四方八方に斬り抜ける、一座の人々も其の鮮  
 やかな手の内に感心して居ると、忽ちバツと五郎の姿は見へなくなつた

甲「ヤ、ツ……居らんぞく 乙「フム……殊によつたら忍術遣ひか  
 も知れんぞ」此の時頭の上で 五「ハツハ、ハ、ハ、ハ、此處に居るく」と、云  
 はれて上を向くと、五郎は松の木の枝にチャンと腰をかけて居る 乙「ヤア何  
 時の間にあんなところへ……」忽ちバツと五郎は飛び下る 丙「それツ」  
 と、争そつて斯つてかゝる、五郎がヤツと叫ぶと、八方遠當ての術にかゝつ  
 て、バツタリ打つ仆れる 乙「ヤ、ツ……妙なことを遣り出したぞ」と、云  
 ふ間もなく五郎は九字を切ると、ピユーツと天風起り、十二人の武士はゴロ  
 ゴロと泉水の中へドブアンドと落ち込み、アブくゲヤアブく、又もピユーツ  
 と起つて大風ゴロくくくツと、轉がつたかと思ふと、何時しか椽の上にズラ  
 リ並んで座つて居る 大「コリヤく者共、何をして居るく」と云はれてハ  
 ツと氣がつくと、身體も何も濡れて居ない、一同椽の上にズラリ並んで居るの  
 で 皆「ハテナ……皆妙なこともあるわい 乙「フム……恐ろしい妙な男

だ」と、呆れ返つてゐた、主君はますます感心いたされ 大「フム……天  
 ツ晴れなる手の内、今其の方が九字を切ると、一同コロコロ轉がつたるはあり  
 ア如何なる妙術なるぞ 五「ハイ、あれは私しのお得意の妙術、天風の術  
 と申します、マッ此の通り……」座つたまんま口中に何やら唱へて九字を切  
 る、此方兩側に並んで居た平武士、ビエーツといふ天風と共に、双方コロ  
 ゴロと轉げ出し、座敷の真中でゴツンと衝突して ○「痛い △「痛い」  
 と、騒いで居る間に又もコロコロ、以前の場所へヒヨツコリ、一同ますます  
 目を丸くして驚ろいて居るばかり、主君始め其の近邊に居た人は何事もな  
 い 大「フム……如何にも妙術を心得て居るものかな……オ、五郎の  
 姿が見へなくなつた、何れへ參つたぞ 甲「ハツ……今まで其處に居りま  
 したが……」一同キョロ／＼見廻して居ると 五「ハツハ、ハ、ハ、此處に居  
 ります」と、云ふ聲、ヒヨイツと見ると、五郎は家守のやうに天井裏へ

ヒタリと引つついて居る 乙「ヤ、ツ……彼方に……」五郎はヒラリ身震  
 く飛び下りて平伏した 大「フム、世にも得難き妙術を心得て居るものか  
 な、如何にして會得せしぞ 五「ハイ、七才の當時、大高山で大蛇の爲めに  
 呑まれ、一旦死せしところを或る仙人の爲めに助けられ、十年の間日光の  
 裏山に於いて學んだのでございます 大「如何にも不思議な術ぢや、どうぢ  
 や、高祿を遣はすが、予が家に仕へてくれぬか 五「ハイ、それは、御免蒙  
 ります、それは既に御家老に申しあげてある筈、當時は浪人となつた居れど  
 仔細あつて申しあげ兼ねますが、仕官の儀は出来ませぬ、何卒悪しからず……  
 大「然らば長く予が領内に住し、我が家中の者に武術を指南いたしてくれ  
 ぬか 五「ハイ、御領内に居る間は未熟ながら……」 大「サ、過分に  
 思ふぞ、して其の方は何品を望むか、望みの品あらば褒美として遣はすが、ご  
 うぢや 五「ハイ、私しの家は至つて貧乏、借金に苦しめられて居ります、

下さるならどうか金子を頂きたい」と、遠慮なく云ふ。大膳大夫殿も殊の外御機嫌よく、二百兩の金子を與へられ、家臣一同と共に酒肴を玉つた、大いに面白を施して其の日は一度家老將監の屋敷へ立ち歸り、又もいろく馳走になり、多くの品々を頂戴、駕を以つて我が家へ送られた、五郎は兩親や姉に此の事を話して喜ばせた、其處で五郎の名は一層高まり、九郎助の家は思はぬ金子持ちになつた、大膳大夫はどうかして怪傑五郎を召し抱へたいと思し召され、將監に計つて、時々城内へ呼び寄せいろく口説たが、どうしても仕官するとは云はない、是非なくも家中諸士の指南を頼んだ、其處で城下の小林の道場へ来て、諸士相手に劍道槍術の指南をして居た、然るに姉のお三の美貌はますます評判になり、殊に龍田川の大藏はどうかして手に入れんとして居たが、何しろ五郎が居るので、容易に手を下さなかつた其の頃は慶長も半ば過ぎの十二年頃、關東と關西の軋轢はますます烈

しく、今にも大戦争の起らんとする天下の形勢、従かつて諸國浪人共、或ひは關東徳川方を志し又は關西大阪方へ仕へ、アワよくば槍先きの功名、一足飛びの出世でもしやうと、ウロウロなし、従つて山賊野盜の類頼りに横行なし、人々安き心もなかつた、此の宇都宮邊にも武田方の浪人上山源左衛門と名乗る野武士横行し、軍用金と稱して、富豪の金子、又は眉目よき婦人などを引ッ攫へて行く、然し源左衛門と云ふのは蜘蛛の妖術遣ひとかで、ナカ／＼其の姿も見せず、奥平家に於いても其の捕縛方に苦心して居た、五郎も見當り次第引ッ捕へんとブラ／＼して居たが、或る日城下より招きに應じて小林の道場へ参り、諸士を教へ、後は小林入左衛門の饗應で酒宴を始め居るところへ、門弟の一人門ハツ……天風先生へ申しあげます 五何事でござる 門只今多士なるものが息急参つて、先生にお目にかゝりたいと申して居ります 五フム、左様であるか」と、ズ



カ、支關へ立ち出でると、多「ヤツ五郎さん……タ、大變だ、五郎、何が大變だ……多「今山賊が村へ押し寄せて来て、村の金子のある家、美しい女……お前エの家のお三坊を連れて行かうとして居た、だから乃公が夢中になつて此處まで知らせに來たのだ、ハ、早やく」と、聞いて五郎は大いに驚ろき、五「エツ……山賊が參つた……ソリア一大事……」と、早速奥の間へ取つて返し、五「アイヤ小林先生、云々斯々であるからこれで失禮いたす、小では、我れ等も御加勢……五「イヤ、多寡が山賊の百や二百……決して御心配は入らぬ……サア多十、歸ろう、多「イヤ、もう乃公は歩けれエ、五「ヨシ、では乃公が連れて行つて遣る」と、カツと提げる、多「ヒエツ……苦しい……五「イヤ、少し我慢しろ」と、其の儘下ス、我が村を差して章駄天走りに駆け出した。

◆ 大きな聲を出すな

三里半……四里餘の道走りつめ、我が家近く來て見ると、どうやら大勢の人々が出遣入りして居る様、五「ヤツ……多十、どうやらもう引きあげた後らしいぞ、多「ヒエツ……ナ、なんだか目が廻つて……」早やくも家の表まで來ると、民「オ、五郎が、遅かつた、五「エツ……遅いと……」と、ドツと飛び込むと、ブーンと何んとやら血なまぐさき香、合點行かすと飛び上ると、遣は如何に、父も母も血塗れになつてゐる、○「ヤア五郎か、遅かつたぞ、五「ヤ、ッ……お父さん……お母さん……」狂氣の如くなつて取りつくと、早や既に母親お初は息切れ、父親は大刀握つたまんま、ウム、苦しそう、五「オ、お父さん、遣られたか、九「オ、ッ……ゴ、五郎か、ザ、残念ぢや……」五「コリア一體、ド、どうした様

ぢや 民「オ、五郎よ、お前が御城下へ行くとも問もなく、山賊共が五六十人押し寄せ、まづ多助ごんの家へ押し入り、在金二百兩引ッ擡へ、其の足でお前の家へ来て、金子を奪ひ、お三坊を引ッ擡つて行かうとすると、九郎助ごんが向つたのだそなただ 五「フム、して山賊と云ふ奴は…… 九「ソ、その山賊の中にはあの龍田川の大藏といふ奴が居た…… 五「エッ……龍田川の大藏が…… 九「ウム、私も老ひても昔は武士、娘を奪はれオメくんと引ッ込んで居られず、龍田川を相手に斬りつけ、邪魔する小泥棒を二三人斬つて捨てたところへ、頭の上山といふ奴が乗り込んで来て、互ひに必死となつて斬り結んだが、相手の奴は怪しいことをする爲めに、遂に斯く斬られたのぢや……ウム…… 五「ウム、さては噂に高き上山源左衛門と云ふ奴であつたか、ウム……今一足早かりせば逃がす奴ではなかつたに……イヤお父つさん、傷は浅い、心確かに…… 九「イヤく、此の深傷ではとて

も全快覺束ない…… 五「それは氣が弱いと云ふものぢや、氣を確かに……」應急の手當てを與へ、其の邊に仆れて居る山賊の手下二三人を引き起してみたが、流石九郎助も以前は長谷川九郎左衛門と云つて百石取りの武士殊に腕前はナカクシツカリして居たので、只だ一刀に斬り捨て、早や息は絶へて居るので、どうすることも出来ない、其の内に雀の宮から代官所の役人出張して、検死の役を勤め、山賊の死骸は持ち歸り、先づ其の翌日、母お初の葬送をなし、ほつと一息吐く間もなく、父九郎助はナカクの重傷であるから、いとも苦しうに唸つてゐる 五「お父つさん、シツカリしてくれ 九「イヤく、五郎様、ト、とても本腹覺束なし、此の上は何卒一日も早やくお家を立て、又一つには親なきあのお三、もしや助かるものなら助け、後々の面倒見て遣つて下さるやう……これがお願ひでございます」子を思ふ親の心は又格別、現在我が身が知れぬ場合になつてゐるのに、娘の身の上

を案する憐れさ 五「イヤお父つさん、決して心配することはない、お父つさんお母さんを殺した奴の仇は討ち、又お三姉さんの身は助け、何處々々まで姉弟として、一生仲よく暮らす程に安心して下され……」 九「オ、御主の貴君にいろく苦勞をかけ……マ、まことに……濟まぬ」と、両手を合はせるも苦しそう 五「お父つさん、シツカリして」と、云つたが、九郎助は死際の斷末魔、苦しうに凜搔いたが、忽ち息は絶へてしまつた、流石豪氣の五郎直信も、親と頼みし兩親に別れ、九郎助の死骸に取り纏つてワツとばかりに嘆いた、處へ名主始め村人等大勢來て、いろく五郎を慰さめ、其の翌日同じく村の菩提寺仙光寺へと葬むつた、後には五郎只一人だ、然し永年山奥で生活したから何事にも困らない、近所の多十、これは多左衛門といふ百姓の性、五郎よりは三つ四つの年上であるが、友達の間柄、殊に五郎を尊敬して居るので、サヨイ、來ては用を達してくれる、

五郎は一間に籠つて九郎助夫婦の爲めに讀經して來世の冥福を祈つて居た、然し五郎はそれとなく上山源左衛門、龍田川大藏の行衛を探つて居た、するとどうやら大高山の近所に岩窟を構へて居るらしいと聞いて大喜び 五「オイ多十々々 多「なんだ、五郎さん 五「外でもないが、どうか二三日留守番して居てくれ 多「フム……してお前エは何處へ行くんだ 五「實はどうやら山賊共があの大高山の邊に岩窟を構へて居るそうだから、一つ退治に出かけるのだ 多「エッ、山賊退治……是非乃公も連れて行くてくんねエ 五「イヤ、もしや怪我でもしては兩親も心配する、それに却つて足手纏ひだ、どうか留守番して居てくれ 多「足手纏ひ……オイ五郎さん、乃公だつて山賊の二人や三人は打ち斬つて見せる、そんなこと云はれエで連れて行くてくんねエ、兩親も乃公や亂暴だ、兄貴の方が溫和しくつていい、手前エ等何處へでも行つてしまへと云つてゐるんだ、乃公も百姓は嫌ひ

ハツハ、貴様には分るまいが、乃公にはチャント分つて居る。多「フム、何んにも見へやせん……」 五「其の向ふの森の中に居る。多「フム、あの中に……」 五「待て、此奴等は屹度手下の奴等に相違ない、だから云々斯々せい」と、耳に口を寄せて囁やくと。多「フム、では此の風呂敷包みを金子だつて……」 五「そなた、旨く遣れよ。多「たがもしや遣り損なつたら……」 オヤ、五郎さん。五「オイ、大きな聲を出すな。多「出なと云つて、お前エ何處に居るのだ。五「此處に居る、貴様の側に居る。多「エツ……」 聲はすれども姿は見へずホンにお前は屁のやうな……」 五「オイ、妙な節をつけて云ふな。多「アツ、吃驚した……」 そんなとこに居たのか。五「オイ、しつかり遣れよ。多「ヨシ、」 兩人は彼方の森を差して急いだ。

寧ろ武家奉公でもしやうと思つてゐる位だ。どうか連れて行つてくれぬ」と、頼に頼む。五「ヨシ、」 そうまで云へば連れて行つて遣る、然しぬかるなよ。多「ナアーニ大丈夫だ……」 コン畜生。五「オイ、」 今から鉢巻きをして力んでも何んにもならぬ慌てるな。其處で兩人は留守番を隣りの五平の家へ頼み、まづ名主の家へ参り、名主に面會して、今から山賊退治に出かける、ついてはもしやあの大高山の近邊で火の手が見へたら、どうか村人一同来てくれるやうにと頼んで置いて、兩人は二三度の食料を握飯にして脊負ひ、だんぐ大高山を差して乗り込んだ、素より兩人とも其の邊の地理は委しく知つて居る。彼處か此處かに探し廻つたがどうもそれらしい處もない、其の日は暮れて山で一泊、其の翌日もだんぐに歩いてゐたが、突然五郎は、五「居るぞ、」 多「エツ居る……」 ド、何處に……」 五「ハツハ、い、驚ろくなく、五六人は居るわい。多「五六人……」 何處に……」 五「

◆乃公が打ち懲して遣る

此方森の中には古い神社がある、社前にドシ／＼焚火して、山賊の手下共七八人張番をしてゐる。○「オヤ／＼誰れが来たぞ／＼」△「フム、來居つたか、締める／＼」×「待て／＼、ごんな奴が見る／＼」○「オヤ／＼土ん百らしい奴だ」×「ナニ、ごん百……」△「コラ／＼百姓、待て」多「へい／＼、何か御用で……」△「貴様は何處へ行く」多「へエ、雀の宮の者でござえますが、上州路へ使ひに行かうと此處まで來ますと、道を迷つて困つて居ります」△「フム、上州へ何しに行くのだ」多「へエ、もしや貴方は山賊ぢやアございせんか」△「ナニ、山賊、馬鹿なことを云へ、乃公達は此の下の街道の道普譜の人足ぢや」多「へエ、そうですか、それを聞いて安心しました、實はな、雀の宮の代官様から二百兩の金子を上州の山下村と云ふ

ところまで持つて行けと云はれましたが、此の頃は何んでも山賊が居るといふ話し、怖／＼と思つてゐるとツイ道を間違へましたので……」△「なんだ雀の宮の代官から二百兩持つて行くのか」多「へエ……左様で……」△「フム、では往來まで送つて遣らう」山賊共は目と目を見合はせ、一人の奴先きに立つて歩き出した。多「ヤア旨めエ／＼」△「何が旨めエのだ」多「イエ此方の事……濟みませんな……」五「オイ／＼、貴様では駄目だ、貴様は此の邊に隠れて居る」先きに立つた奴は振りかへつて△「オイ／＼何を云つて居やアがるんだ」多「へエ、一寸其のあの……」△「早やく來い／＼」と、先きに立つてドス／＼行く内に、多十と五郎は何時しか早變り、多十は其の近邊の岩陰げに隠れて居る、もう此の邊でよからうと、山賊の手下は△「オイ／＼手前エ、先きへ行け／＼、オヤ、手前エ刀なんか差して居たのか」五「へエ……そんなんで……」△「何でもい、から先きへ行け／＼」と

遣り過して抜き打ちに斬り付けんとするが、這は如何に急に身體が動かなくな  
 る △「オヤツ……コリア……」 五「どうかしましたか」 △「ナニ、どう  
 もしやアせん 五「へエ、そうでございますか」 又も斬りつけやうとする  
 バツタリ仆れ △「オツト、い、い、五「どうなさいました △「イヤ、道が悪  
 いので……ツイ轉んだのだ 五「そリア危なうございませぬ」 又も斬りつけ  
 やうとする、又もバツタリ、八方遠當ての術にかゝつたとは知らず △「  
 妙な奴だな……ヨシ、此奴を岩窟の中へ引ツ張り込んで遣らう」と、思  
 つたので、二三四離れた岩窟のところへ來たり △「オイ、若い、此の門  
 を通り抜けると近道だ、早やく來れエ」 五「へエ、そうでございますか」  
 山賊はドン／＼何やら相圖すると、鐵門はギイッと開いた △「オイ、若い  
 の、サア行かう」 五郎は 五「フム……此處だな……ヨシツ……」  
 と、素知らぬ顔して中へ這入ると、鐵門は以前の如くギイッと閉つた △「サ

ア土百姓、此方へ來い 五「へエ……」 △「此方へ來い」と、矢庭に  
 肩口引ツ摺む 五「フ、エ……ナ、何をなさいますので……」 △「何も彼  
 もあるか、此方へ來ればいゝのだ 五「へエ……ド、どうぞお許しなすつて  
 ……」 △「許すも許さぬもれエ、此方へ來ればいゝんだ」と、グイ／＼引ツ  
 張つて、奥の方へ行くと、其の間は暗かつたが、やがて明るい大きな部屋へ出  
 た、ドツトと突き飛ばされて、ワザとヒヨロ／＼ツとして、ベタリ座つた、サ  
 ーツと頬冠りの下から見ると、彼方一段高きところには、年頃三十五六の立  
 派な風體した男が、熊の皮の上へアーンと胡座を掻き、頭は百日鬘、大  
 盃を突き出し、側には多くの美女、其の他人相の悪い奴が二十五六人ズラリ  
 居並んでゐる 頭「なんだ、吉、其奴は……」 吉「へエ、お頭、此奴ア雀  
 の宮の代官の使ひで、金子を二百兩持つて居やアがるんで……」 頭「フム、  
 其奴はいゝものを引ツ張つて來た、其奴の頬冠りを剥いてみる 吉「ヤイ、土

百姓、頼冠りを取れツ」と、吉と云はれる手下は、五郎の側へ立ち寄り頼冠りに手をかけんとした時、五「何をすつ」と、利腕引ッ掴んで、二三間彼方に頭轉倒と投げつけた。×「ヤア此の土百姓奴ッ、よくも投げ居つたな、  
 □「それッ」と、山刀引き寄せてキツとなつた。五「騒ぐな木ッ葉共ッ」と、五郎は頼冠りの手拭をグイッと取り退けた。吉「ヤア手前エは……」  
 五郎は、大刀の柄に手をかけ、五「ヤア其處に居るは上山源左衛門と覺へたり、汝茂原新田村の九郎助の家へ押し入り、金子を奪ひ、九郎助夫婦を手にかけ、娘お三を引ッ攫つた覺へがあるう、我れこそは何を隠さん、天下の豪傑天風五郎直信なり、汝を尋ねて此處まで來たつたり、イザ尋常にお三を渡し、養父の仇勝負せいッ」と、ハツタと睨みつけた。頭「ヤア汝れは土百姓に化けてよくも參つたな、如何にも我れが上山源左衛門なり、汝等如きの弱輩の手に合ふ乃公でない、それッ野郎共、打ち斬つてしまへ△

ハツ……ヤア土百姓奴ッ、小癩な真似をさらすなッ」と、四方八方からドツト斬つてかゝつた、心得たりと五郎直信、正面から來る奴ズバリー眞ッ甲から抜き討ちに眞ッ二ツ、横に拂つて腰車、大袈裟小袈裟と手當り次第に曲斬りに斬つて落す、其の内に岩窟荒らしが來たといふので、手下の奴等ドシム集まつて來た。頭「ヤア退け、乃公が打ち殺して遣る、ヤア小童、乃公が引導渡して遣るぞッ」と大きな大鏡を振り被つてドツと五郎に打つてかゝつた。五「オ、來いッ」と、涉り合つた、流石相手は山賊ながら、多くの手下共に頭と立てられるだけあつて、ナカノ腕前、然し何んと云つても五郎に及ぶべき、ヤツと一聲ズバリー斬り込むと、カチーンと受け止めたが、忽ち其の姿は消へ、突然現はれ出でし見るも大きな蜘蛛、口中からフツリく糸を吐いて五郎に浴せかけた。五「オ、小癩なッ」と、五郎も負けず九字を切ると、突然ビュッとして天風起り、人間と云はず皿小鉢武

器等カラ／＼ガツチヤンと轉げ出し 皆「ウツツ……コリアどうだ」と、  
 コロ／＼、何時しか蜘蛛の姿は消へ、源左衛門はコロ／＼轉げ出た五  
 汝……」と、眞ッ甲より斬りつけると、寢ながらバツと體を躲し、バラバ  
 ラツと逃げ出す 五「エ、此奴ツ……逃がしてなるものかツ」と、ドツと後  
 を追ひかける、正面の岩へドーンと打つつかると其の姿はバツと消へた五  
 ウムツ……残念ツ……取り逃がしたかツ」と岩を押しても開かばこそ、手  
 下の奴等はそれツと總が、り 五「此の上は木ツ葉共一人も逃がしは遣らぬぞ  
 ツ」と、手當り次第にガツク／＼と斬り落す、其の恐ろしき勢ひに恐れをな  
 し △「それ敵はんぞ、逃げる／＼」と、バラ／＼、五郎は追ひ縋り／＼  
 斬り捲る、何時しか岩窟の外へ出た、手下共は岩の上からゴロ／＼、大岩を投  
 げ落す、五郎は九字を切ると、又も天風ビエツと起つて、其の邊に居合はす  
 小賊置ゴロ／＼轉げて、谷底へドン／＼落ち込んだ、五郎は再び中へ取

つて返し、其處よ此處よと探して歩いたが、もう人影も見へない、忽ち物影  
 より、ヤツと一聲ズバーリ斬りつけたる一人、ヒラリ體を躲し、其の利腕グツ  
 と引ッ擲むと ×「痛いッ……ド、どうぞお助け／＼」

◇酒を出せ◇

五「ヨシツ、生命は助けて遣るが、頭は何處へ參つた ×「へ、へイ……  
 頭は間道から逃げてしまひました 五「ウム、ではあの岩は龍燈返しにな  
 つて居るか、逃げ道か ×「へイ、そうで……此方からは開きません 五「  
 フム、あれから何處へ逃げられるのだ ×「へイ、上州路へ抜られます 五「  
 此の岩窟に龍田川の大藏といふ奴が居るだるう、又茂原新田九郎助の娘お  
 三といふものを擲つて来たであるう ×「へイ、龍田川の兄貴は上州の方へ稼  
 ぎに行つて留守なんで……女は此の裏の穴倉に十五六人投り込んでござ



「五」ナニ、此の裏の穴倉とは  
 ありますが、私にはよくは知りませんので……  
 何處だ、案内しろ X「へい、此の細道を行くので……」  
 と、利腕を引つ纏んだまんまズル／＼引いて行く X「ド、どうぞお助けな  
 ……」  
 「五」グズ／＼云ふな「ズル／＼、細い暗い道を十間ばかりも行くと、戸  
 の隙間から燈火が見へる、戸をドーンと蹴散らして中へ這入ると、恰かも女護  
 島へでも這入つたやう、十五六人の女が重なり合つて震へ 女「ド、どう  
 ぞ生命だけはお助けな……」  
 「五」イヤ、決して心配するものでない、乃公は  
 此の岩窟を退治に來たものである 女「エツ……岩窟を退治に……ア、有  
 難うございます 五「然し此の中に茂原新田のお三は居らぬか 女「へえ  
 お三さんといふて……」  
 「五」年の頃二十一二才で色の白い、美しい顔立ち  
 の…… 女「では今しがた此の抜け穴から一人何處かへ連れて行かれました  
 五「ナニ、抜け穴から……」  
 「五」フム、何處だ 女「此處でございます」  
 「五」郎は

足をあげてドン／＼蹴あげると、戸板はバリ／＼メリ／＼と破れた、中は眞  
 つ暗闇、引つ纏んだる山賊に案内させ、十五六間も行くと、山々の谷のや  
 うなところへ出た 五「フム、此處からは何處へ行かれるのだ X「へえ、此  
 處から何處へても行かれます 五「フム、残念ツ……さては又逃がしたか」  
 X「痛い／＼……」  
 「五」ク、首が締ります／＼、どうぞお助けな 五「ヨシツ  
 貴様は以後全たく改心いたすか X「へえ、全たくか改心いたしますから、  
 ド、どうぞ命だけはお助けな……」  
 「五」ヨシ／＼、生命だけは助けて遣る  
 サア此方へ來いと、以前の處へ歸り 五「サア女共、助けて遣るから、  
 此方へ出て來い」  
 女共は大に喜んで此方大廣間へ従いて來る 五「コラ  
 山賊、盗み貯めた金銀や寶物があらう、此處へ出せ」  
 X「ハイ、此の次  
 の室にございます」  
 女共は大廣間に何人ともなく斬り殺されて居るのを見  
 て、青くなつてブル／＼震へて居る、やがて先づ一同を連れて岩窟の前へ出た

もう山賊等の影は少しも見へない 五「オーイ、多十く」 多「へい 五「何處に居るのだ 多「コ、此處に居ります 五「早やく出て来い 多「五郎さんもう大丈夫ですか 五「大丈夫だ、コラく山賊、貴様の名は何んと云ふのだ X「へい、私の名は猿の三次と云ふので…… 五「猿の三次か……貴様何處か此の邊で一番高い所へ上り、枯木を集めて火をつけろ」 三「へえ、火をつけますので 五「そうだ 三「宜しうございます」 五「多十も手傳つて其の邊の枯木を側の小高い山の上へ投げあげる、流石猿と云はれるだけあつて身軽だ、スルくツとあがつて火をつけた、其の邊は松の木が多いので、生木の儘でドンく燃へ出した 五「オイ、三次、酒があるだろ、酒を出せ」 再び一同中へ這入つて、三次に毒味させ、グイく飲り出した 多「五郎さん、あの火で見へるでせうか 五「大概見へるだろ、多一寸私しが歸つて知らせて来ませうか 五「イヤく、三次、貴様改心した

とあれば、これから直ぐ茂原新田の名主民右衛門といふ人の家まで行つて来い、岩窟は退治しましたから、直ぐにお出で下さいと…… 三「へえ、宜しうございます」と、三次は身輕に駆け出した、後に五郎は女共を差圖して其の邊の金子や着物を取り出させる、流石妖術遣ひの泥棒だけあつて、其の盗品にもナカく立派なものが多い、まづ女共にそれく着物を着換へさせて居るところへ、ワアくといふ人聲 多「ヤア五郎さん、山賊く 五「ナニ、山賊……大丈夫く 大刀押取り直した、ところへ名主眞ッ先きに茂原新田と、山下村の奴等七八十人、何れも得物くを提さげて、ドンドシ乗り込んで来た 民「オ、五郎遣り居つたな 五「オ、名主さんが、残念ながら頭の上山源左衛門と云ふ奴を逃がしたが、岩窟は漸やう退治した、此處に居る十五六人の女、此奴等は可愛想に、山賊の爲めに攫はれて来た女どうかそれく家へ歸して遣つて下さるやう…… 民「オ、居るく、ヤツ

お仙坊ではないか 女「小父さん……」名主の親類の娘も居る。其の他知つたものも澤山居る、其處で五郎は名主と相談、金子八百兩其の他金銀財寶は悉く村人の手で持ち運び、再び賊の住まはぬやうに、火をかけて炎々と燃へ上る火を後に眺めて、日も暮れんとする夕暮頃、一同無事に村々へ立ち歸つた、早速名主から代官所へ届け出る、代官所よりは、神妙とあつて、一應女共や金品を役所へ持ち歸り、それ／＼持主に返すことゝなし五郎の功を稱して、奥平家より百兩の金子を玉はつた、其處で猿の三次に二十兩の金子を與へ、再び悪事をせぬ様と懇々と意見を與へ、故郷の上州前橋に歸した、名主民右衛門は大勢の村人と共に、餘り山の上に火が見へないので、もしや五郎は遣られたのではあるまいかと途中まで出かけて行くところで三次に出會つたのである、又一層村人は五郎を大切にして五郎さんくと尊敬して居た、五郎は上山源左衛門、龍田川の大藏の兩人を逃がし、

ほそれとなく様子を探つたが、もう近傍には居ない様子、其處でいよいよ茂原新田を出發し、一つは武術修業の名家を立てんが爲め、又一つには忠僕夫婦の仇を討ち、姉のお三を取り返へさんと決心なし、奥平將監の屋敷へ出かけ、委細を語つて暇乞ひを述べると、將監もいと惜しきことに思つたが、仇討ちの爲めとあれば是非なしと、早速主君に申しあげると目通りさせよとあり、翌日打ち連れて登城、將監より委細を申しあげると、大膳大夫殿も手放すを残念と思召されたが是非なく、路銀として二百兩玉はり、仇討ち本懐を遂げたならば再び歸つて来るやうとあり、五郎も厚く御禮申しあげて退城、我が村へ立ち歸り、名主始め重なる人々に其の旨を告げ、別れの盃を汲み交した、多十は是非連れて行つてくれるやうに頼んだがそれならぬが、左程武家奉公したくばと、奥平將監宛て一書を認ためて渡し、其の翌日一同に別れて、住み慣れし茂原新田村を發足した。

◎此奴よくも殴り居つたな

まづ行く先きは上州松井田の宿、間道を通り抜け日を費して松井田の宿へ来た、其の城はこわされ、番所のやうなものが置かれてある、五郎は九郎助に聞いた通り、城下の萬福寺へ参り、和尚に面會して、父や兄の墓を尋ねると世を憚かつてあるう、寺内の裏の片隅の方に小さな墓、それには俗名大導寺駿河守直磐、同新四郎直澄、大導寺支蕃、長谷川三右衛門、森半九郎等の墓が並んで居る、五郎少時伏し拜んで涙を流し、五「お父上、お兄上、さぞ御無念でございませう、私しが五郎直信でございませう、此の後は諸國漫遊して、ますぐ武を磨き、忠僕九郎助夫婦の仇を報じた上は、主君に御目通りの上、大導寺の家は屹度相立てますれば、何卒安らかに御成拂下されませうやう……」恰かも生ける人に物云ふ如く、云ひ終つて、此方本堂

へ引ッ返し、五十兩の金子を出して、讀經を頼み、其の夜は宿の三浦屋といふ宿へ泊り、其の翌日はまづ江戸の地を差して發足した、泊りを重ねて歩いて来たのが、下總古河城下手前の松並木、ロヨツと見ると、松の根方に腰打ちかけた一人の大入道がデロ／＼往來を眺めて居た、坊主と云つても法衣を着て居るでなく、そうかと云つて武士の風でもなく、待體の分らぬ風體だが、未だ年若らしいが見るから恐ろしげな面構へ、何處で飲んだがエテ蝟のやうに眞ッ赤な顔をして居る、五「ハ、ア……妙な奴が居るわい……」其の儘通り過ぎやうとすると、坊「コラ／＼武家、待たれい」呼び止められて五郎は足を止め、五「何か用かな、坊「如何にも……悪僧は道中路銀つき、酒代に困却してゐる、氣の毒だがどうか應分の寄附をして呉れ、五「ナニ、路銀につき酒代に困るから寄附してくれ……」坊「如何にもそうだと、五「フム、折角だがそんな金子はない、然し土下座をして相當の禮を盡せば一文位いは

遣らんこともない 坊「黙れッ、乃公は乞食ではないぞ、グズ／＼寝言を吐かす叩き殺すぞよ、第一他人に物云ふ時には笠を取れ／＼」と立ち寄つて編笠に手をかけんとした時 五「無禮者奴ッ、何をするッ」と、鐵扇で坊主頭をヒシヤリ 坊「アッ……アル／＼……アル／＼……此奴よくも殴り居つたな、許しは置かぬぞッ」と、後方に立てかけてあつた二三十貫の鐵棒押ッ取るより早やく、バラリ振りかぶつて、後方から五郎をたんだ一打ちとハッシと振り下す、アッヤ粉微塵となつたと思ひの外、其の姿はバツと消へた 坊「オヤ何處へ……」と、見廻そうとする間に坊主頭をホカ／＼、それが手で打たれても痛いのに、南蠻鐵の鐵扇で思ひ切り打たれては堪らない 坊「ウアッ……アル／＼……此奴……」と、ビエ／＼打ち捲る、五郎はヒラリヒラリ體を躲して居た、坊主は大いにもどかしがり 坊「此奴よくも、飛び廻る奴だッ、エイッ……」と、睨み打ち、手應へあつてグワンと恐ろしい音、

手にビリ／＼と響き、思はずガラリ鐵棒投げ出した、それもその筈、側にあつた七八十貫の捨石が眞つ二つになつて居る、五郎は忽ち坊主の襟つ首引ッ擱んで、頭轉倒と投げつけた、アツと驚ろいて早やくも起き上らんとする處を、グツト押へつけ 五「ヤア糞坊主奴、往來のものに強請がましき事を吐ぬすとは不埒千萬ッ、此後の見せしめ、斯うして遣るぞッ」と、鐵扇でホカホカ續け打ち 坊「ウム……痛い／＼…… 五「痛いも糞もあるかッ」ホカ／＼ 坊「ウアッ……頭が割れる／＼ 五「どうだ、降参したか 坊「ウム……コ、降参々々 五「ヨシッ、降参するとあれば許して遣るい目に會つたことはないが、一體貴様は何んといふものだ 五「黙れッ、他人の姓を聞かん、欲せば、何故自分の姓から名乗らぬ 坊「乃公は誰れでもない加賀白山を追ひ出された坊主雲 獄坊大仙といふものだ 五「フム、此の頃

坊主で生意氣にも道場荒しをするといふのは貴様か、乃公は何を隠さん、天下の豪傑天風五郎直信といふものだ。大「ヤア天風五郎……あの宇都宮近傍で名代の若造といふのは貴様か。五「若造とはどうだ、生意氣なことを云ふと殴りつけるぞ。坊「イヤ、もう澤山々々、此の上で割られたら割れる、イヤ、乃公も北國奥州路を遍歴して試合をしたが、まだ一回も負けを取つたことがないが、貴様にはどうも敵はん、降参した、よつてこれから貴様の家來になる。五「馬鹿奴、誰れが貴様を家來にするか云つた、第一乃公は浪人、家來などは入らん。大「入らんと云つてもなる、貴様は將來出世するに違ひない。乃公も以前は武士の侍だ、どうか家來にしてくれ。五「ハツハ、ハ、ハ、此奴横着な奴だ、誰れが貴様見たいな奴を家來にするか。五郎は其の儘其處を立ち去つた、大仙坊は鐵棒を拾つて、ドシ／＼後を追ひかけ。大「オイ／＼天風先生、どうが家來にして下さいまし。五「ハツハ、ハ、ハ、貴様は家來になりた

いのであるまい、酒が飲みたいのだから。大仙坊は頭を抱へて。大「イヤ、もうそう云はれては……イヤ……ハヤ……マア／＼何んにも云はずに家來にして下さい」ピヨ／＼頭を低げる。五「ハツハ、ハ、ハ、マア／＼乃公と一緒に来い。大「有難い／＼」大仙坊従いて来る、城下へ這入つて、小橋屋五助といふ宿へ泊り込み、奥の室へ陣取つて酒肴を命じ。五「サア遠慮なく飲め／＼。坊「イヤ、有難い、二三日腹一杯飲むことが出来なかつたがこれで生き返るやうな心地がする……ア、甘露／＼」大仙坊は頭を叩きながらチヨネ／＼始めた。大「時に天風先生、貴公の噂さは宇都宮城下でチヨネと聞いたが、聞きしに優る妙術、イヤ、もうあんなことを遣られては、誰れも敵ふものがあるまい。五「ハツハ、ハ、ハ、大體貴様が弱いからだ。大「イヤ、私が弱いのではない。五「然し貴様は坊主の分際で鐵棒を振り廻して道場荒などをするのは不埒千萬ではないか。坊「イヤ、マア聞いてくれ、

元來私しの親父は、加州金澤前田家に仕へ、雀の飯米、百五十石程頂戴してゐた武士だ、名は佐原清十郎と云ひ、私はその次男で清次郎、兄の清太郎とは違つて、小さい時から荒いことが好きで、とうとう友達と喧嘩して、二人殺してしまひ、仕方がない、加賀白山に追ひ遣られ、坊主とはなつたもの、お経や抹香臭いことが大の嫌ひ、朋輩を捕へて角力殴り合ひ、喧嘩と荒いことばかり、十二年から十九まで居たが、どう思つても坊主は詰らぬ所かと云つて家へは歸れず、其の間に喧嘩をして朋輩の坊主を片輪にしたので、とうとう師坊に山を追ひ出され、仕方がないので、諸所をウロつき、越後の新發田で、町道場を開いて居た天岡天眞齋といふ鹿島流棒の達人の家へ食客となつて、棒の術を習ひ、五年間修業して、諸國漫遊を思ひ立ち棒を持つて歩かうと思つたが、どうも只だの棒では輕過る、よつて三十貫の鐵棒を誂らへて、北國から奥州路を遍歴したが、第一何れも此の棒に勝

るいて平古垂れ、何處へ行つても一回の賃を取つたこともない、泊り込んで酒を飲んで氣樂に暮して居たが、此の頃では何處の道場へ行つても、留守だとか病氣だとか云つて相手にしてくれず、此頃何んでも大阪と關東方と戦争でも起るといふのを聞いて、此奴が一番何方かへ加勢して功名手柄をして遣らうと思ひ立つた、ところが乃公は何んとなく徳川の老爺が嫌ひだ第一陰順姑息で、約束を反古にして天下を取らうと企むやうな奴は大の嫌ひ、殊によつたら大阪方へ加勢しやうと思ひ、出かけるにも旅費がないので、一寸貴公に無心を云つたのだが、イヤハヤとんだ目に會つて、坊主頭もコブく、割れさうに痛む……して貴公はこれから何處へ行くのだ、五乃公は大阪にも關東にも關係はない、養父母の仇を打たんが爲めに廻國して居るのだ、大イヤ、乃公とても強つて大阪方へも仕官しやうとは云はぬ、何時までも漫遊が出来れば、それに越したことはない、是非連れて行つてくれるやうに……」

五郎は聞いて其の圖々しさと亂暴な話には驚ろいたが、天真爛漫、何處やらが面白ところがあるので、快よく主従の約束をした。

無益の攝生するな

早やくも江戸の町へ這入つた、二代將軍秀忠公の居城の地、八百八町四千七街といふ繁華な町、大將、江戸には武藝者が澤山居るといふ話、一つ片ツ端から叩き潰して遣らうではございませぬか、五「イヤ、滅多なことをするな、それに第一仇の奴等を探さればならぬ……」まづ馬喰町三丁目刈豆屋藤兵衛方に宿を取つて、毎日々々江戸の町見物に出かけた、其の時江戸は二代將軍の時代とは云ひながら、政治萬端は大御所家康公の方寸より出で、大御所は駿府の雲隠れ城に御隠居といふ體になつてゐるが、多くは江戸城に居られ、殊に一刻、大阪方と軋轢烈しく、今にも双方兵を

起さんとする有様、江戸の町には豊臣方の殘黨、或ひは大阪方の勇士聚傑、様子を窺がひに来たり、時々暴れ廻る、町方支配は安藤對馬守殿重に取り締り、旗本では徳川家の大忠臣大久保彦左衛門忠教、萬事を支配してゐる、彦左衛門其の當時は未だ四十代の時代で、尤も豪勇な盛り、然し頑固で旋毛曲りは天下一品、忠義の心も圖抜けて居た、何んと云つても其の時代から有名な人物であつた、天風五郎、雲嶽坊大仙の兩人は、ボツ／＼江戸の道場を荒らしに廻り始め、天風五郎は得意の忍術を以つて、手の届くだけ仇の様子を尋ねてゐたが、少しも分らない、何んと云つても雲嶽坊只だ一人でも及ぶものがない、ところへ少し手に餘ると天風五郎が飛び出すので、何處へ飛び込んでも負けそうな事はない、江戸の市中に評判になつて、數ある道場の中には、病氣、或ひは留守と云つて断はる、そうなる、毎日／＼宿屋へ籠つて酒を飲んで居るばかり、五「オイ大仙、どうやら仇の様



子も分らぬから、一と先づ江戸を出立するとしやうか 大「そうでございませう、もう此の頃では怖氣がついて、何處の道場へ行つても立會ふてくれず、退風でく堪らん……」と云ひながら、今しも兩國橋の近くまで来ると、彼方の方で大勢の人集り 五「ヤツ大仙、何事だらう 大「フム、喧嘩でもして居るに違ひない、此奴ア面白い」と、主従は立ち寄つてみると、旗本四人が一人の非人體の若者を踏んだり蹴つたり散々の體、見るに見兼ねて、天風五郎、ズイツと中へ這入り 五「少時待つた……」と非人を後方に此ふて、大手を擴げて突立つた 甲「ヤイ貴様は何ものだ、退げ」 五「イヤ退かん、如何なる仔細あるか知られども、多寡の知れた非人一人を大勢で亂暴するとは怪しからん」時に非人はムツクリ起き上つて 非「汝れツ安田左門ツ……」と、掴みかゝらんとする 五「待て」 非人 乙「アイヤ武家、それなる非人は當方に少し用のあるもの、此方へ渡してくれ 五「イヤ、ならぬ、

斯く中へ這入つた以上は仔細を聞かれば渡すことは相ならん 丙「黙れ」田舎武士の分際として、我れく天下の旗本に向つて無禮なことを申す奴、許しは置かねぞツ」此の時大仙坊ニユツと飛び出し 大田舎武士とは小癩なことを吐かすなツ、旗本がどうしたツ」と、一人の奴の横ツ面ビシヤリ 乙「ヤア此奴、突然横ツ面を張るとはどうだ、汝ツ」と抜き打ちにズバリ、大仙坊鐵棒でガチリ受け止め 大「コラツ……此の鐵棒が目に入らんか、三十貫あるぞ三十貫……身體へ當つたら最後、粉微塵にスツ飛ぶぞよ、サア来い 丙「何に糞坊主奴ツ」と、四方から斬つてかゝつた 大「それツ危ぶないぞく」と、ビユーク横に打つ拂ふ 丙「それ亂暴者……旗本に手向ふ田舎武士奴ツ」と、旗本等は相見互ひ、其の勢もだんく殖へて来た、大仙は面白がつてビユーク振り廻して追つ拂つて居る、物見高いは都の人の常 ○「イヨーどうだい、あの坊主は滅法強いぢやねエか △「

ウ、辨慶、糞喰へつと云ふ様な坊さんだ、相手は旗本が面白い、坊さん、シツカリ頼みますぜ」角力か芝居でも見物して居る氣だ、何しろ旗本等の亂暴に愛相をつかしてゐる町人等は、氣味と見て居るところへ、早くも役人は乗り込んで來たり、役「ヤア狼籍者、静まれ、静まれ、恐れ多くも將軍家の御膝下に於いて、白刃を振るとは何事ぞ、静まれ」と、制する、旗本等は役人の手にかゝつては五月蠅ひので、バラ／＼逃げ出す、大「ヤア旗本でも何本でも遠慮ないぞ」とビュー／＼、役人等もそんな太い鐵棒で打たれては堪らないので、只だ遠巻きにワア／＼騒いで居る、ところへ天風五郎、五「ヤア大仙、待て、無益の殺生するな、乃公に任じて退け」と、口中に何やら唱へて九字を切ると、ビューツと天風吹き起り、大勢の役人も側に居た見物人もゴロン／＼ドパン／＼と河の中へ落ち込んだ、一同アプ／＼ヤア／＼／＼藪掻き廻つて上がつてみると、もう坊主も武士の姿も見へない、

此方兩豪傑は早やくも遠く其の場を離れ、五郎は横抱きに抱へたる非人を下し、五「アイヤ、非人、どうして其方は旗本の爲めに酷い目に會つて居たのだ、非「ハイ、危ぶないところをお助け下さいまして有難う存じます、五「何んだ、貴様は青い顔をして居るではないか、非「ハイ、病氣でさへなくば……切めて一ト太刀なりと……、五「フム、どうやら仔細のありそうな様子、オ、イ、大仙、仕方がない、宿まで背負つて行つて遣れ、大「エツ……此の非人を……、五「そうだ、見るところ満更ら根からの非人でもなさそうだが、いやなら乃公が……、大「イヤ、背負ひます、イヤ、非人、貴様は幸福な奴ぢや、天下の豪傑たる……、五「コラ／＼餘計なことは云はんでもい、其の鐵棒は乃公が持つて歸つて遣る」其處で兩人は宿へ歸る、宿の亭主も非人を背負つて來たので驚ろいたが、仕方がない通す五郎は金子を出して着物を買つて着換へさせ、病氣だといふので、湯には入れられないが、身體を拭いて遣る

と、見違へるやうに立派になつた、非人は涙を流して打喜び、非「重ねく有難うございます、五「イヤ、其の禮には及ばぬ、然し見受けるところ、根がらの非人でもなさそうな、定めし仔細のあることであるう、差支へなくば話してみよ、ことゝ次第によつたら、力にもなるう、乃公は天下の浪人、天風五郎、此處に居るのが雲嶽坊大仙といふものだ、非「エツ……では當時有名なる天風先生に雲嶽坊先生で……知らぬことゝて失禮いたしました、何を隠しませう私しは、奥州南部盛岡、南部家の臣、岩井要左衛門の一子要三郎と申すものでござります、大「フム……では武士の胤か、どうして其様な姿をして居るのぢや、要「ハイ、これにはだんく、仔細のあること、どうか一通りお聞きなされて下さいませ」と、早や要三郎はホロリと涙を落した、大「ハツハ、ハ、ハ、男の癖に泣くなく」。

◆然しあの風は特別だらう

岩井要三郎の話によると、要三郎の父要左衛門は、二百石頂戴してお馬廻り役を勤め、お定といふ妻との間にお雪と要三郎といふ二人の子があつたお雪は天のなせる美人、年頃になつてはますく美しく、十八才の頃になると彼方此方から矢の降るやうな縁談、然し親の慾目、帯には短かし禪には長しといふ有様で、定まる縁もなかつたが、不圖劔道指南番の安田左門といふものが是非嫁にくれるやうと申し込んで来た、然し安田左門は早や四十の上を三つ四つも越へて居り、且つ餘り評判のよくない人物、それに新参であるから、要左衛門はキツパリ断はつた、然し先方から再三再四申し込んで来る、要左衛門はさうしても聞き入れず、同藩の石本左衛門の長男吾一といふものに娶はせやうとした、これを聞いて左門は大いに怒り、遂に要左衛門の退城を

待ち受け、門弟二三人と示し合はせ、大手松原に於いて暗み撃ちにして退轉した、これを聞くと妻子の驚ろきは如何ばかり、泣く泣く引き取つて葬送を濟ました、母はそれが基で病氣となり、間もなく後を追ふて病死、姉弟は急に兩親を失ひ、親戚の家に厄介になつてゐたが、どうかして仇を討ちたいと、太守へ願ひ出してお許しを受け、國許出立、安田左門、門弟春本武兵衛、山田仙造の三人を討たんが爲め諸國遍歴、途中路銀も盡きて殆んど非人同様な姿で、此の江戸の土地へ來たり、向島牛の御前近傍に居ると弟は姉と三つ違ひ、當時十八才であるが、不圖病氣にかゝり、姉お雪は通行の人の袖にすがつて、弟を介抱してゐた、ところ或る日通りかゝつた四五人連れの武士、中に仇の安田左門が居たので、思はず姉弟は父の仇に斬り付けらる、病氣の要三郎何んなく河中へ投げ込まれ、上つてみると姉の行衛知れず我が身の病氣も打ち忘れ、其の翌日より只だウロウロと江戸市中を探して歩き

丁度三日目に兩國橋の所で仇の安田左門に出會ひ、父の仇、姉を戻せと打つてかゝつたが、相手は大勢、殊に病氣の身、散々な目に會はされて居る所へ兩人が來合はせたのであると涙ながらに物語つた、一々聞いて兩人は涙を流し、五「ウム、そうであつたか、あの中に仇が居るとは知らなかつた、大「知つて居れば逃がせざりしものを……して姉の行衛も分らないのか、要「ハイ、さる始末で未だ其の生死さへも知れませぬ、五「イヤ、決して心配することはない、乃公も貴公と同じやうな身の上、斯く顔を合はせしも何かの縁、屹度仇を討たして遣るから安心するがよい、大「そうだ、我れくが加勢する以上は、たとへ相手が旗本でも大名でも、將軍家が後立てして居つても構はん、見付け次第に仇を討たして遣る、五「然し其の病氣では仇に出會つても仇討ちすることも出来ない、マアく萬事は私に任して置くがよい、五郎は直ちに亭主を呼んで、仔細を話し、醫者を呼び迎へ

てくれるやうに頼んだ、流石は江戸ツ子の亭主、大いに同情を表し、亭「そ  
うでございますか、よう助けておあげなされましたな、では早速に醫者を呼び  
ませう」と、亭主は近所の林宗庵といふ醫者を呼びに遣る、宗庵は直ち  
に来て診察した、別に案することは無い、酷く心配した上に冷へ込みが烈し  
いので、熱が籠つてゐるが、十日ばかりも十分養生したら全快すると聞いて  
一同は大いに喜んだ、其の翌日天風五郎は兩國橋の袂、昨日喧嘩があつ  
たところへ出かけ、近所の茶店へ這入つて様子を聞くと、相手は本所組の  
旗本と知れた、其の頭領と云ふのは二千五百石高泉主殿、同傳八郎とい  
ふ兄弟、家柄もあり、至つて豪氣活潑、本所組の取締、殊に弟の傳  
八郎は無妻、三百石を頂戴、殆んど部屋住み同然の身ではあるが、頗る性  
質がよくない、長からぬ輩と交りを結び、時々町人を苦しめて極く評判が  
よくないと知れた、五「フム、マア其の高泉といふ奴の屋敷の様子を窺がつ

たら知れるかも分らん」と、教へられし通り割下水に来てみると、直ぐに知れ  
た、流石二千五百石取りの旗本、屋敷の構へはナカ／＼立派だ、門側には門  
番が居る様子、面倒と五郎は九字を切つて其の姿を隠しドストと本支關  
から上り込んだ、然し誰れの目にもつかない、何しろ草鞋穿きの儘であるから  
泥の形が鏡のやうに拭き立てた支關の式臺につく、家來の一人これを見て  
○「オヤ／＼、コリアどうだ、△「どうしたと、山根氏、オヤ／＼なんだ  
……… △「何んと大きな足跡ではござらぬか、山「なる程、大きな足跡だ、  
然し土足………然かも草鞋穿きで上り込むやうな男は居まいが……… ○「  
然し誰れか上つたのに違ひない、早やく拭いて置かんとお眼玉だ」家來の奴等  
は拭いてゐる、此方五郎は悠々と奥の方へ這入つて行く、奥の室では大勢の  
聲が聞へる、五「居るな………」と、ガリ襖紙を開けた、中には七八人の武  
士が酒宴をして居たが、ヒョイツと振り返つたが、誰れも這入つて来る様子も

ない 甲「オイ鈴木、誰れか来たのではないか 鈴「ハッ……イ、エ……  
 甲「でも襖紙がひとりでに開くといふことはあるまい 鈴「でも誰れも居り  
 ません 甲「フム、妙な…… 乙「山根が吉村でも参つたのでございませ  
 う」五郎は一同の後方に突立ってダツと様子を見て居る 丙「然し昨日の坊主  
 と武士は如何にも妙な奴ではなかつたか 丁「そう、あの坊主の鐵の棒に  
 も閉口したが、あの武士が何か云ふと、突然大風が吹いて来て河の中へ吹き  
 飛ばされたが、一體何んといふ奴だらう 丙「イヤ、考がへてみると、此  
 の頃何んでも江戸の道場荒して、雲嶽坊大何んとかと云ふ奴と、天風五郎  
 といふ奴が出て来居つたと云ふから、殊によると其奴等かも知れんぞ 丙「そ  
 うだ、其奴等かも知れん、然し、あの風は特別だらう 十「然し江戸名物  
 筑波風としては酷すぎるではないか X「だが、そんな奴があつた要三郎に加  
 勢するやうなことがあつては大變…… 乙「ハッハ、ハ、ハ、何も心配する

ことではないではござらぬか、何んと云つても多寡が田舎武士、貴公は近々旗  
 本の一人となるうといふ身體だ、それに本所組の我れ〜が庇ふたら、相手  
 はビクともするぢやない、のサ方々 丙「左様、何事やらんやだ、ご  
 んな奴が来居つても我れ〜が庇ふ以上は大丈夫…… 甲「皆の云ふ通り  
 心配することはない、然しあの女は如何いたしたろう、まだウンと云はぬか  
 コリア鈴木、此處へ連れて参れ 鈴「ハッ」と、答へて鈴木といふ武士二十  
 前後の色の白い美しい娘を連れて来た。

◆乃公が少し考がへある

残らす様子を見て居た天風五郎 五「ハ、ア察しに違はず、此の中に安田左門  
 といふ奴も居て、あれがお雪といふ女に違ひなからう、もう少し見て居て遣  
 れ」と、戸陰げに隠れてダツと様子を見て居る 甲「コリア〜お雪どうした

ものぢや、何故争が云ふことに従がわぬぞ 鈴「殿様の云ふことを聞けば、此の上の幸福なことはない、早やくお受けいたせ」女「厭ぢやく、たへ此の身は殺されても、人の妾になさなるべきか、現在仇を目の前に置きながら……汝れツ」と、スツクと立ち上ろうとしたが、憐れや細紐を以つて後手に縛ばられて居る △「ハツハ、ハ、ハ、今更ら仇なご、は鳴許がまし、汝等に仇なご、呼ばれる覺へはない、それより早やく殿様の云ふことを聞け 女「今更らそんな汚らしいこと聞きともない、親の仇尋常に勝負しや」狂氣の如くに叫ぶ 甲「エーイツ……強情な女奴、庭へ下して折檻せい 鈴「ハ、ツ……」 甲「ギヤア、ハ、ハ、叫ぶと五月蠅い、猿轡はめい鈴「ハツ……」と、手拭で猿轡をはめ、庭前へ引き下し、今しも二人の若武士、青竹を以つて打ちあげんとした、處へ立ちよつた天風五郎、今しも一人青竹を振りあげて 乙「ヤア、女、殿様の御意に従かふかどうだ」女

は左右にかぶりを振る 乙「汝れ強情な奴ツ」と、ヒシッリ打ち据へんとすると其の利腕引ツ掴み、頭轉倒と投げつける 丙「オイ、五島氏如何なされた 五「どうもしやせんが、誰れか拙者を投げ出した 丙「ハツハ、ハ、ハ、誰れが投げ出すものか、拙者が折檻して遣る、ヤア強情な女奴ツ」と、打たうとすると、仰向けさまにドスン 丙「痛いッ 甲「どうした、五」コ、コリア妙だ…… 甲「エ、イツ……面倒だ、オイ安田、強情な女とても我が意に従がふまい、打ち斬つてしまへ」安「イヤ、其の御立腹は尤もございませうが、そう氣短かに殺すといふのは餘り、切めて今日一日あの松の木に縛りつけ、折檻なすつたらどうでございませう 甲「ウム、然らば女を松の木に縛りつけッ 二「ハツ……」二人は女を引ツ立て、庭前の松の木の方へ縛り付けた 五「然し何んと妙なこともあるではないか 丙「そうそう」と、云ふ折りしも四邊は急にスツツと薄暗くなつた 丙「オヤツ……」

妙に薄暗くなつたぞ」と、一同顔見合はせる折りしも、突然ピエツと吹き起りし天風諸共、前處に巖然と構へ込んで居た七八人の武士、ゴロ／＼とツと庭前へ轉び落ち、皆「コ、コリヤド、い、い、い」と、轉び廻る、五郎は中央に立つてズラリ大刀引き抜き、一人／＼小鬘の邊りをチヨイと突く

甲「痛いッ……」 乙「痛いッ……」 四番目に轉じて来た安田といふ武士の右ッ腹の邊りを刀背でピシ／＼ 安「痛いッ……」それはもしこれが仇の安田といふ奴なら急に逃げられないやうにといふ考がへ、一同痛い／＼と叫びながら轉がつてゐる内に、四邊は以前の如くパツと明るくなつた、痛いと互ひに顔見合はせると、何れも片髪をチヨイ／＼傷つけられて、中でも安田といふ武士は足を押へてしがみ面をして居る

乙「サアコリア妙だ……あの風の具合は丁度昨日の兩國橋の通りだ 丙「左様々々コリア油断がならぬ 十「フム……殊によつたら忍術遣ひでも忍び込んだに違ひない 甲「ウ

△、不埒千萬な奴だ、各々油断するな忍術遣ひ位ひなんの事やある、オイ山雲五平を呼んで来い」 丙「ハッ」一人の奴は駆け出す、其の當時大阪方の眞田家では霧隠才藏、猿飛佐助など、云つて忍術の名人が居て、時々江戸の町を荒れ廻り、稍もすると大御所公の身の上を付け狙ふ、其處で徳川家に於いても争そつて忍術遣ひを召し抱へ、伊賀流の諸岡三太夫始め多くの忍術家が居て、千代田城を固めて居る、山雲五平といふのも忍術遣ひの一人此の本所組の人々とは至つて仲のよい男、それを迎ひに遣つたのである、一同は何れも小鬘の傷所の手當てを與へる 甲「然し如何にも不埒な奴は其の女、其奴から先きへ成敗してしまへ 傳「左様々々、こんな奴を生かして置いては後の爲めにならぬ、拙者が打ち斬つて遣る」と、亂暴もの、傳八郎、ズカ／＼と庭前へ降る、若武士二人も續いて下り、松の根方に縛りつけてある女を引ツ立て、来る 乙「ヤイ女、面をあげい 傳「強情な女奴



兄上の云ふことを聞かぬとあらば、手打ちにいたして遣るぞ 乙「ヤア傳八郎  
 どの、暫らくく 傳「如何いたした 乙「あの女はかゝる綺麗な着物に着  
 て居らぬ筈…… 丁「ヤ、ツ……コリア奥方だく 傳「エツ姉上……  
 乙「ヤ、ツ奥方ツ……コリアどうしたのであるう」と、驚ろいて猿轡を  
 取る 女「ア、苦しいく 甲「ヤ、ツ……奥か 傳「姉上、どうなされた  
 女「アイナ……今妾しの部屋に居ると、突然何もか猿轡をはめ、聲  
 をあげる間もなく此處へ連れて來られて縛られたので…… 傳「フム、さ  
 てはいよく怪しい奴が忍び込んだと覺へたり、兄上、此の儘には捨て置かれ  
 ますまい 甲「如何にも……役所へ訴たへ何處々々までも詮議して貰へ、  
 時に安田、どうした……其方は 安「ハイ、右の片膝を烈しく打ち、どう  
 やら挫いたやうでございます、然しどうやら此の分では姉弟の奴等に加勢する  
 奴があると思へますが…… 甲「ナニ、心配するな、幾度も云ふ通り、たと

へ相手は大名でも、一歩も退かぬ本所組、然かも屋敷へ忍び入るとは不埒な  
 奴、引ッ捕へて詮議せずに置くべきか、傳八、早速詮議せい 傳「ハツ……  
 心得ました」と、云つて居るところへ山雲五平も歩つて來たり、一同怪しの  
 曲者詮議について評定してゐた、此の様子をスツカリ見て天風五郎は、早  
 やくも女を助け出し、遠く高泉の屋敷を離れ 五「コレく女、其女は  
 もしやお雪とは云はれぬか 女「ハイ、妾はお雪と申しますが、貴君様は……  
 …… 五「ウム、そうであつたか、それは何より、萬事は其女の弟から聞い  
 て居る、もう少し我慢せい、直ぐに弟に會はせて遣るから……」と、急ぎ  
 宿へ立ち歸つて、弟の要三郎に會はした 女「オ、其方は要三郎…… 要  
 貴女は姉上様……ふ御無事で居て下されました 雪「してどうして其方  
 は此處に…… 要「ハイ、云々斯々……天風先生や雲嶽坊先生にお  
 禮を云つて下されまし」と、聞いて姉のお雪は始めて様子を知り、涙を流し

て兩豪傑に禮を述べた 五「イヤ〜まだ禮には及ばぬ、これからだ、定めし辛い目をしたであらう、十分身體を養ふがよい遠からず屹度仇は討たして遣る、然し仇の奴は皆居るか 雪「ハイ、三人とも揃ふて居ります 五「フム、それは何より…… 大「では大將、いよく高泉の屋敷へ乗り込んで、仇の奴等を引ッ捕へて遣りませうか 五「イヤ〜、そんなことはいと易いことだが、相手はなんと云つても旗本、我れ〜は何んの因縁もないが姉弟には立派に仇を討たして遣らうと思ふ、ついでには乃公に少し考がへがある、任して置け〜、それより兩豪傑は酒飲み交し、姉弟のものを慰さめて居た、折りしも俄かに表の方がザツ〜と騒がしく、従いて亭主藤兵衛、慌た〜しく上つて来て 亭「旦那、タ、大變でございます〜」と、顔色を變へて居た。

◎流石は大將だ豪いッ

然し兩豪傑は急きも騒ぎもせず 五「亭主、どうした、大層慌て、居るではないか 亭「只今お役人さんがお出でになりました、云々の武士と坊主が居るであらう、此處へ引き摺り出せと仰しやつて居られます 大「ナニ、坊主怪しからんことを云ふ奴だ、役人も糞もあるか、乃公が打つ潰して遣る 亭「でも五六十人は居りますぞ 大「ナアニ、木ッ葉役人の五十や六十……何んの手間暇あるべき……」と、側に立てかけてあつた鐵棒押ッ取り突立ちあがらんとした 五「イヤ待て〜大仙、そんな鐵棒で打つ潰しては少し都合が悪い、乃公がキリ〜舞ひをさせて歸して遣る、見て居れ〜」突立ちあがつて九字を切ると、早やくもドヤ〜大勢の足音 役「オイ〜亭主、何處に居る〜」と云ひながら、長廊下を抜けて廣くもあらぬ庭前へ出て、泉水の

廻りをソロ／＼廻り始め 役「イヨ！此處はナカ／＼廣い宿屋だ、亭主、何處に居る／＼」これを眺めて一同 亭「イヨ！コリア妙だ……お役人さんは何をして居るのだらう 大「ハツハ、ハ、ハ、大將の妙術にかゝつては堪らぬわい、然し大將、これから先きどうするので、鐵棒で一々打つ潰しませうか

五「そんなことをしては後が五月蠅い、見て居れッ」と、再び九字を切ると、お得意の天風の術、突然ビュッッと大風起り、五六十人の奴等塀を越へてバラ／＼裏道へ轉がり出て △「ウワッ……こりやどうだ △「痛いく」 ×「い／＼／＼怪しなことだコリアとても敵はん」と、バラ／＼逃げ出す、亭主は 亭「ヘエ！妙なことをなさいますな、此の前眞田様の霧隠才藏先生といふお方がお泊りになりました時にも、大勢のお役人がお在でになりましたが、あんな具合でしたが、矢ッ張り旦那方は大阪方のお方で……」

五「イヤ／＼、乃公達は大阪方でも徳川方でもない、天下の浪人、武術

修業の爲め廻國して居る、別に役人には怨みもないが、此の姉弟にどうかし て仇を討たして遣らうと思ふのだ 亭「ヘエ、それなら宜しうございませうが大阪方のお方をお泊め申しますと、後が五月蠅くつて堪りません 五「イヤ大阪方のもではないから安心せい、明日になったら當方より出向き、委細申して片をつける、今日だけ辛抱してくれ 亭「ヘエ／＼、そりアもうそうと譯が分つて居りますれば何んでもございませませんが、お役人をあんな目に會はして後のお咎めはござりませうか 五「大丈夫／＼、又來たら知らしてくれ 亭「ヘイ／＼」と、亭主は立ち去つた、少時すると又來た、五郎は又も庭中二三度キリ／＼舞ひさせ、天風の術で吹き飛ばす、役人は驚ろいて逃げ歸る、大勢の泊りの客や近所の人達も、始めの内は恐ろしがつて居たが餘り不思議な術であるから、ワイ／＼云ひながら見物して居る、三四度は出かけて來たが、何れも妙術にかゝつて這々の體で逃げ出し、兩豪傑は平氣

の平左でグイ〜飲み交してゐた、其の内に夜に入る、やがて更けたので、二間に分れて寝た、夜は次第に更け渡り、遠寺の鐘も眞夜中を報する頃、五郎は不圖目をさますと、ミシリ〜と小さいけれど人の忍ぶ足音 五「ハテナ、今頃、何ものであるう」と、耳を澄ましてゐると足音はだん〜と近づき、部屋の前でヒタリ止まった 五「ハ、ア曲者だな……」と、尙ほも寝た振りをして入口の方を窮がつて居ると、障子は細目に開いたと同時に、一匹の小鼠チヨロ〜と這ひ込み、兩人の頭の近邊をかサ〜這ひ廻つた、尙ほも素知らぬ顔をして寝て居ると、鼠の姿はパツと消へ、障子はス〜と開いてス〜と閉まつた、普通の人の目にはつかないが、日光の裏山で十年の永の年月の間、血の涙を絞つて修業した腕前、忍術位はお茶の子サイサイだ、ヂツと見ると、覆面黒装束の曲者が一人スツと突立つてゐる 五「ハ、ア………猿口才な………」曲者はヂ〜と見詰めて居たが、もう大丈夫

と思つたが、ズラリ大刀引き抜き、五郎目がけてヤツと斬つてかゝつた、ヒラリ體を躲して、其の利腕グツと引ツ掴み 五「曲者ツ」と、云ふより早やくドス〜と投げつけた、時に側の行燈はパツと消へて四邊は眞つ暗闇、曲者は隣りに寝て居た大仙の腹の上にドス〜、如何な寝ぼうの大仙もハツと目を開らき 大「ヤツ………曲者ツ………」と掴みかゝつた 五「オ、大仙、逃がすな 大「ナニ逃がして堪るか」其の内にビユ〜といふ大風、其の邊の蒲團も行燈も人間もコロ〜 大「ヤア大將、そう私しまで………此奴ツ、逃がしてなるものか」ゴロ〜と轉がり、暗中にペリ〜、バリ〜といふ音、漸やう風は止んだ 大「オイ、燈火を持って来い〜、曲者が這入た」と、大聲に叫ぶと、次ぎの間に寝て居た姉弟は早速手燭に火を點じ 要「先生、曲者でございませうか、如何なされました 大「オ、要三郎か、曲者は此の通り取り押へた安心せい、然し其の邊に何か縛するものはないか、大「ハ

イ、此處に紐が……」と、お雪は腰紐を解いて出す 大「ヨシ、要ヤ  
 ア先生、それは夜具ではございませぬか 大「ナニ、夜具……そんな馬鹿な  
 ことが……ウアツツ夜具だ……」幾ら目をこすつて見ても、自分は夜具を  
 まるめた上に豪そうに馬乗りに跨がつて居る 五「ハツハ、ハ、ハ、大仙、どう  
 した、夜具を押へて何をして居る 大「ヤア大將……、貴君が餘り私しまで  
 轉がすので、曲者奴蒲團と化け居つた…… 五「ハツハ、ハ、ハ、そんな馬鹿  
 なことが……曲者は此奴だ」と、ズルリ眞ッ黒な奴を提さげて居る 大「フ  
 ム、流石は大將だ、豪いッ 五「これを縛れ 大「宜しい 五「然、滅多な縛  
 りやうなすると、相手は鼠遣ひ、蒲團にでも化けて逃げ出すぞ」と、初めの  
 繩は五郎がかけ、後は大仙がキリ、巻き、處へ漸やう亭主や家内の奴手  
 燭を以つて歩いて来たり 亭「旦那様、ク、曲者でございませぬか 五「ウム  
 曲者は此の通り…… 亭「へエ……曲者といふのは此奴で……この野

郎で…… 五「待て……コリア大仙、覆面を取つてみる 大「ナイ  
 ……」大仙曲者の覆面を取り退けると、姿は上から下まで眞ッ黒な忍び  
 の姿、色淺黒く、眼光炯々として人を射り、一癖あるべき面魂の人物  
 亭「フム……なる程、泥棒だけあつて人相の悪い奴だ 大「ヤイツ……  
 曲者、我れくの部屋へ忍び込むとは不埒な奴だ」ホカ、流石は曲者、痛  
 いとも云はない 五「コリア、待て……ヤイツ曲者、汝は何處の何者が  
 知られど、マサカ物取りの類ではあるまい、僅かの忍術を以つて、此の天  
 風の生命を取ろうとは、心得違ひ、我れ等は罪なきものをどう斯うしやうとい  
 ふのではない、然し集まつて来る蠅は拂はねばならぬ、此度は助けて遣るが、  
 二度来ると首が飛ぶと思へ……コラ、大仙、戸を開けて投げ出してしま  
 へ 大「エツ……では此奴を助けるので…… 五「そうだ、こんな奴の首  
 を捻つても何んにもならぬ、生命だけは助けて遣れ 大「ウム、生命冥加な奴

だ」ズルリ提さげ、椽側の戸をあけ 大「サア一昨日来いッ」と、ドーンと投げ出した 五「亭主、此の邊の障子が破れたが、何れ相當の事をいたすから許してくれ 亭「へい、何んの……そのやうに仰しやらずとも……」と、云ふので、未だ起きるにも早やいの、一同寢についたが、其の後は變つたこともなかつた。

◎貴公が大久保彦左衛門か

翌朝起きると、五郎は大仙始め姉弟の者に打ち向ひ 五「さて姉弟の者、以外に仇の在所が早やく分つて結構、ついでは何んと云つても相手は旗本然かも本所組の頭領と威張つてゐる奴、滅多なことをしては後が悪い、これから旗本の取締とも云ふべき大久保彦左衛門に談判して、仇の奴等を受取り、立派に仇を討たして遣るつもり……大仙、もし留守中に役人でも

來たら、姉弟のものを渡さぬやうにしてくれ 大「イヤ、大丈夫……」と、云ふので、天風五郎はブラリ宿を立ち出で、豫れて聞いて居た神田駿河臺大久保彦左衛門の屋敷へ出かけた、彦左衛門は主君 大御所公に従がつて戰場に於いて度々殊功を奏し、家康公も謀を與へんとしても願はず、三千石の旗本で平氣で居る、此の後間もなく、彼の有名なる難波戦争起り、家康公自身は出馬、大阪方と兵を交へて度々の大合戦、相手には名ある諸將雲の如く集まり、殊に眞田幸村の奇計、後藤又兵衛の豪勇、猿飛佐助、霧隠才藏等忍術家の目覺しき活動、爲めに家康公も度々危難に陥り、中でも眞田、後藤には手酷い目に會ひ、既に一命も危ふき利那、近侍の人々生命を捨て、大御所の御身の上を庇つたが、何時も、彦左衛門はお側を少しも離れず度々自身奮つて逃げ參らせ「艱難辛苦の末、遂に徳川方は大阪城を陥入れ、家康公父子は江戸の地へ引きあげられ、諸將の功を賞せられた時、彦

左衛門は家康公の命の親といふべき忠節を盡して居るので、殊に厚く恩賞を與へんとしたが彦左衛門は固く辭し 彦「臣たるもの、主君に忠を盡すは當然の事、又私しも祿は三千石にて結構でございます 家「然らば外に何か望むことはないか」と、仰せられた時 彦「何卒私に我儘御免を御許下されませうやう」と、願ひ出でた、家康公も彦左衛門の氣性はよく知つて居られるもので、快よく許された、並み居る諸將は驚ろいた、彦左衛門は旋毛曲りの上に我儘御免を許されたれば、此上何を仕出來すか分らん、と何れも苦い顔をしてゐた、すると家康公は 家「然し彦左衛門、其の我儘御免とはどんなことぢや 彦「ハイ、マア此の通り……マ、一寸、其處に居られる井伊どの、氣の毒だが、拙者は豪う肩が凝つてならぬ、一寸一ト揉み揉んで下さるぬか」江州彦根三十五萬石の城主、四天王隨一、井伊掃部頭殿も驚ろかれた 井「此の老爺、氣でも狂ひ居つたか」と、餘りの事に呆れて居ると

彦「我が儘御免の彦左衛門、井伊殿、揉むことが出來ぬかな」家康公は御笑「なされ 家「井伊、揉んで遣れ」掃部頭殿も、主君のお言葉では仕方がない 井「然らば……」と、云ふので揉みにかゝると 彦「ハツハ、御氣の毒……マア、宜しい……ハツ……彦左衛門の我儘御免といふのは此の位いの事でございませう 家「ウム、そうであるか、許して遣はすぞ」斯うなると並み居る諸大名ますく驚ろいた三十五萬石、四天王隨一、徳川家切つての大將に肩を揉めと云ふ位だから、其の他の大名に足を揉め洗へといふこと位はなんでもなかるう、上様も酷いことをお許しになつたと驚ろいてゐた、然しこれには彦左衛門深い譯のあることで、徳川家が豊臣家に代つて天下の權を握つたといふものゝ、子孫は奢りに長じ、諸將の中にも逆心を起すものがあるに違ひないと、睨んだので、大御所公亡き後は、大御所公の御威勢を以つて、代々の將軍家の悪いところ、又は諸大名の暴逆を壓

しやうといふ忠心から出た事、家康公も其の本心を聞かれ、家「ア、實に其の方は徳川家の柱石ぢや、予の亡き後は予に代つて子孫の奢侈我儘を戒め、諸大名の暴逆を静めてくれるよう」と、仰せになつて、御自分が常々被つて居られた焙烙頭巾を玉ぼつた、彦左衛門は仰せを畏こみ、二代三代四代の將軍家に仕へ、御意見番として、何か少しでも將軍家又は大名中施政の間違つたことがあれば、直ぐに件の頭巾を懷中から取り出して、新君大御所公の御命であるぞ、と出るので、將軍家でも諸大名でも一言半句もない従がつて三千石の旗本ではあるが、諸大名でも一歩も二歩も譲り、大久保の毛虫老爺々々と敬して遠ざけて居た、それもその筈、その位の勢力ある上に至つて頑固く旋毛曲り、彦左衛門には持て餘して居た、其の時代はまだ四十一代の豪勇なる盛りであつたが旗本一の旋毛曲り、頑固屋で通つてゐた、性質至つて金錢には淡泊な性質、従がつて其の屋敷なども汚ない 五「ハ、ア、

此處か、ハ、ア門番奴、居睡りをして居るな、其の儘門を這入つた、正面の玄關先きに突立ち 五「頼もう」と、大聲に怒鳴つた △「ドレ」と、出て来たのは用人 笹尾喜内 喜「何處からお越して…… 五「拙者は天下の浪人であるが、少しく彦左衛門に面會したいことがある、老爺在宅ならば取り次いでくれ」五郎も聞き知つてゐる、浪人者にはナカ／＼面會しないとのことであるから、十分相手を怒らせやうといふ算段、喜内は此奴年若の分際で恐ろしい高慢なことを云ふ奴と思つたので 喜「無禮者、控へ居れッ、素浪人の分際で名も名乗らず、其上 主人を捕へて彦左衛門など、呼び捨てにいたすやうな狂人は取り次ぐことは出来ん、歸れ」 五「ハッハ、ハ、彦左衛門を彦左衛門と呼ぶになんの差し支へがある、彦左衛門を彦左衛門と呼んだら怒るのも尤もだが、彦左衛門といふ名を彦左衛門と呼んで何んの不思議がある、貴様では分らん、彦左衛門に取りつけい 喜「此奴が、な



らんと申せば續けさまに御主人を呼びつけにいたすが、今日は御來客だ、貴様如き浪人に相手になることは出來ん、歸れ〜 五「無禮なことを申すな急々の對面したきことあればこそ、こんな汚ない屋敷へ來て遣つたのだ、カズ〜吐かすと取り次げい」と、猿臂を延して、喜内の襟首を引ッ掴んでドスンと奥の方へ投げ込むと、バリ〜ッと障子を突き退けて、奥の方へコロ〜、丁度其處に居た彦左衛門 彦「喜内、何事じや 喜「へエ、云々斯々と怪しげな奴が参りましたので…… 彦「ナニ、予を呼び捨てにする浪人に、無禮な奴だ、予が蹴散らしてくれろ」と、ズカ〜、玄關の方へ出て來た、見ると、年若の修業者 風體の武士がスツクと突立つてゐるので 彦「フム貴様だな、乃公を呼び捨てになし、刺つさへ家來を手込めにせしは…… 五「オ、オ貴公が大久保彦左衛門か、イヤ、初めて…… 彦「馬鹿奴ツ、此の彦左衛門、貴様等如きに、心易く云はれる覺へはない、歸れ〜、歸らんと槍玉

にあげるぞ 五「槍玉にあけるとは恐れ入つた、然し拙者はお頼みの筋あつて罷り越した、老爺、聞き届けてくれぬか 彦「コラツ……老爺とは無禮な奴ツ、許しは置かんぞツ」と、氣早やの彦左衛門、片足あげて蹴あげんとした 五郎はヒヨイツと揃ふと、ドスンコロ〜 彦「槍持て〜〜 喜「へエへエ〜」喜内は長押にかけてあつた槍を差し出す、彦左衛門ムク〜ッと起きあがつて槍を受け取り 彦「ヤア下郎奴ツ、よくも彦左衛門屋敷へ参つて狼籍いたすよな、許しは置けん、覺悟せいッ」と、ブス〜り突き出した。

◎よくも飛び廻る奴だ

流石戰場萬馬の間を往來して來た彦左衛門の槍先き、アツヤ五郎は田樂刺しになつたと思ひの外、ヒラリ體を躲してパツと一足飛び退り、鐵扇抜き取つて、キツと身構へ 五「サア來いッ…… 彦「汝ツ下郎奴ツ、十六才文珠

山 齋の集山の合戦以來、一度の負けを取つたことのない彦左衛門の槍先き受  
 けられるものなら受けて見よッ」烈しくビエーッと突き卷つた、五郎はヒラリ  
 ヒラリ體を躲し、五「なる程、それが戰場、萬馬の間を往來した槍先きか」  
 愚弄せられて彦左衛門、頭からポツポツと湯氣を出し、彦「汝れッ下郎奴、よ  
 くも飛び廻る奴だ……ッ……ッ……ッ」後にはハア、云ひながらアスーリッ  
 處へ彼方から這入つて來た旗本五六人。○「イヨ……大久保氏、何をして  
 居られる。△槍の稽古でござるが、彦「稽の槍古とはどうだ、實は云々、斯  
 斯、不埒な下郎、一突きにいたしてくれんと思つてゐるのだ。○「フム、此の  
 下郎が……」と、云ふ奴の横ッ面をビシヤリ。○「ウワッ……コラッ、  
 乃公の横ッ面を殴るとはどうだ、無禮者ッ」と、抜き打ちにズパーッ。△「ヤ  
 ア水野、しッかり遣れ、乃公も加勢するぞッ」これ等は餘人ではない旗本連  
 中にてもさるものありと知られた久世三四郎、近藤登之助、水野十郎左衛門

門、渡邊半藏、松平五郎三郎の五人、十郎左衛門は横ッ面殴られて五郎に  
 斬りつける、五郎は烈しき槍と刀とを避け、ヤツと叫ぶと、残る四人の頭  
 の上をビエーッと飛び廻る、土足で蹴散らされ、一同カン、と立腹な  
 し。三「ヤア下郎奴、天下の旗本たる我れ、の頭を土足にかけるとはどう  
 だ、半「打ち斬れ、何れも揃つた血氣の勇士、四方から押ッ取り圍んでス  
 パーリ、如何な五郎でも六人も一度にかゝられては一寸堪らない、ヤツ  
 エイッと身輕に飛び廻つて居たが、忽ちちバツと姿が消へた。十「ヤ、ッ……  
 ……矢張り鼠遣ひだな……」と、云ふ間もなく、ビエーッと起りし大風、  
 ゴロム、と轉がつた。皆「コ、コリアどうだ、」やがて風は止んで、ハッ  
 と思ふと何時しか一同が奥の室へ通つて居る。五「ヤア定めし勞れたであらう  
 マア一杯……」と、グイッと盃を差し出した、見れば以前の武士、彦左衛  
 門が獨酌でグビリ、と遣つて居た座にテンと座り込み、然かもニコ、し

ながら盃を献して居る、これには流石の豪傑連中アツと驚ろき呆れ 三「ヤ、ツ……貴様は妖術遣ひよな 五「大阪方の奴に相違あるまい、サア姓名を名乗つて勝負せいッ」と、ムツクリ起き上つて何れもキツとなつて身構へた 五「ハツハ、ハ、ハ、待て、勝負は何日何時でもして遣る、我れは決して大阪方のもではない、天下の浪人天風五郎直信と申すものである 登「サム、では當時江戸の道場を荒し廻ると云ふ天風五郎といふ奴は貴様か 彦「浪人もの、分際で何んの爲めに斯く狼籍いたすぞ 五「ハツ……」と、少しく退つて両手を支へ一禮なし 五「イヤ、大久保彦左衛門殿、失禮仕つた、實は急々御願ひ申したいことであつて、罷り越したが、浪人ものは面會下さらぬと聞いて居たので、一寸亂暴なことを申したが、ごうかお許しが願ひたい 松「イヤ、小癪な、素浪人、僅かの妖術を心得、人もなげなる振舞ひ、斯くいふ松平五郎三郎手打ちにいたしてくれる 半「渡邊

槍半藏、田樂刺しにしてくれるぞ 天風五郎は少しも驚ろかない 五「禮を盡し、斯くまでに云へど、尙ほ手打ち田樂刺しにいたすと云はれるか、宜しい手打ちにいたそうと、田樂刺したさうとも御勝手、其の代り將軍家のお膝下も旗本も眼中にはない、思ふ存分江戸の地を荒し廻るから左様心得さつしやい」と、スツクと突立ちあがつた 松「吐かすな下郎、徳川旗本に人なしと思ふか、僅か妖術位い如何程の事やあらん 彦「待て、松平大阪方の者でないと云へば少時待て、して天風五郎とやら願ひといふは何事ぢや 五「イヤ、お聞き下さるか有難い、實は岩井お雪、要三郎といふ二人の憐れなる姉弟がござる、其の者の親は云々 斯々……」と、委細を悉く語り 五「ソリア高泉の屋敷へ乗り込んで仇の奴等を引つ捕へるのは何より易いことであるが、假りに相手は二千五百石の旗本、もしや後でグズト姉弟のものが云はれてもよくない、よつてワザン、未見の大久保殿ではあるが、ど

うか高泉殿に掛け合ふて、其の者等を拙者等にお渡し下さらば有難き仕合はせ、それをお願ひに罷り越したのでござる。松「イヤ、それはならぬ、たとへ南州公の家臣でも、彼の安田左門は近々我れくの取りなして、徳川家へ仕官いたすべき人物、或ひは武士道の遺恨によつて同藩の者を打ち果したか知られど、我れ等旗本が庇ふたものな……」五「イヤ、そう承まれば是非がない、最早やお願ひは申さず、我れ等主従も男子、一旦姉弟に仇を討たせると誓つた以上は、旗本諸氏が後楯だによつて恐れて引いたと云はれるも心外、何處々々までも姉弟に力を盡して仇を討たせる。彦「コリヤ待て、聞けば義侠に富んだる願ひ、宜しい、彦左衛門が引き受けて討たして遣らう、然し此の江戸の市中ではならぬ、城下外に於いて討たして遣る。然し其の方は何處の住人である。五「ハイ、拙者は野州雀の宮在茂原新田の百姓九郎助の伴五郎直信。彦「フム、百姓……」彦「フム、百姓……」

の伴にしては得難きの人物、根からの百姓ではあるまい、ごうぢや徳川家へ仕官する氣はないか。五「有難うはござれど、仔細あつて養父母を討たれ、其の仇討ちに廻國して居るもの、仕官の儀はなり兼ます。彦「然らば仇討ちを終つた後、五「何れは又其の節お話しにもならん」尙ほも話してみるとナカ／＼得難きの人物、旗本連中も何時しか心も解け、此の頃天風五郎雲嶽坊大仙と云ふ名は江戸中響き渡つて居る、その上眼前で其の鮮やかなる手の内を見たので、大いに感心して、改ためて酒を呼んで互ひに酌み交す。其の日は一度宿へ立ち歸つたが、大仙及び姉弟の兩人にもいろ／＼物語つて喜ばせた、弟要三郎の病氣も案する程ではなく、殆んど全快したやうな有様、翌日になると、笹尾喜内が尋ねて来て、五郎を迎へに來た、其處で五郎は早速出かけ、昨日の無禮の段々を謝す。彦「イヤ、五郎、早速一同と評議して、高泉兄弟を楯見に誘ひ出し、尤とも安田左門、春本武兵衛、山

田仙造の三人も連れ、大森へ行く、明日の午前に行き、されば其方は姉弟を連れて、先き廻りして、鈴ヶ森邊で待ち受け、途中で討ち取ってくれるやうに……五「ハッ有難うございます」其の日はいろく馳走になつて立ち歸り、姉弟に話すと、雀躍して打ち喜び、五郎は亭主に頼んで支度をさせ、其の夜は前祝ひ、翌朝は夜も明けぬ内に早駕籠で大森邊まで出かけ、鈴ヶ森のお仕置場、南無妙法蓮華經と記された題目石の後方に隠れ、今や来たれと待ち構へて居ると、丁度正午少し過ぎ頃、彼方品川の方よりドツと砂塵をあげて、二三十騎の一團、疾風の如く此方を差してカホ〜〜五「オ、姉弟、來居つたぞ、支度はよいか、兩「ハイ、宜しうございます、大「シツカリ遣れ」と、雲嶽坊大仙三十貫の鐵棒杖につき、大目玉を剥いて力味返へて居た。

少しは名ある奴であらう

五郎や宿の亭主の情け、姉弟は白の装束に白鉢巻、要三郎は凜として控へお雪は小寝キリ、ツとからげ、各々大刀の目釘に濕りをくれ、相手の近づくのを待ち受けた、馬蹄の音はますます近づき、今しも五六間離れたところまで来た時、ヌツと飛び出したる雲嶽坊大仙、大手を擴げて、大「待つた……」と、怒鳴り立てた、これを眺めた旗本連中、〇「ヤア何處の蟾入か知られど我れ〜を誰れぞと思ふ、徳川家の旗本なるぞツ、退け、退かんと馬蹄に蹴りあげるぞ、五「アイヤ旗本等、少時……それ姉弟……」と、天風五郎の呼はる聲に、姉弟はバラ〜ツと進み出で、要「ヤア〜珍らしや安田左門、春本武兵衛、山田仙造、よくも我が父を暗打ちにいたしたるよな、雪、それを苦に病まれ母まで病死、又よくも妾を捕らへ、手酷い目に會はしたよ

な、イテ尋常に勝負々々」と、サリ／＼と詰り寄つた。馬上に跨がつて居た安田左門、其の他二人、ハツト驚ろいたが、左「黙れツ下郎奴、旗本行列に向つて何を申すぞ、退り居れツ」側に居た高泉主殿、同傳八郎の兩人「主」ヤア非人奴、退り居れツ 傳「退き居らぬと馬蹄に蹴あげるぞツ」處へ大久保彦左衛門、久世三四郎等五六騎 彦「アイヤ少時高泉殿、聞けばどうやら親孝道の仇討ちらしいが、どうぢや、安田左門とやら我れ／＼行列に向つて無禮する奴、三人で討ち取つてしまへ」三士は付添ひの奴等は何んとなき氣味が悪いが、相手は多寡の知れた姉弟、殊に大久保彦左衛門、久世三四郎其の他名ある旗本の前、此處腕の見せどころと 左「如何にも承知いたしました、ヤイツ岩井姉弟、相手になつて遣る、覺悟せいツ」と、馬上に大刀引き抜き、姉弟目がけてスパー／＼と斬り付けた 大「サア姉弟、シツカリ遣れツ」と、雲嶽坊大仙先きに立つて馬の兩足を打つ拂ふ、三士もそれ

には驚ろいた、マゴト／＼すれば馬諸共叩き潰されそうなので、生命あつての物種と、忽ち馬首を彼方に向け、タツ……と逃げ出した 大「ヤア卑怯者逃げるとはどうだ 姉弟返せ……戻せ」と三人は追ひかけた 五「ヨシヨシ、氣遣ふなく、此處へ戻して遣るぞツ」さ、五郎は九字を切ると、三騎は馬諸共にキリ／＼と廻つて、だん／＼後へ／＼と戻つて来た、時に突然ビューツと吹いた大風、三人ともコロリ落馬した 大「姉弟、早く／＼」姉弟は一生懸命、起き上がらんとする安田左門の肩口を、要三郎勢込んでスパーリ斬り込んだ、左門もさるものカツキと受けたが、少し過傷られ、アツと聲をあげるところを、お雪が踏み込んで、横ッ腹をズパーリ、何條堪らん、ドスンと打つ仆れた、時に大仙坊は後の二人の奴を鐵棒でビシヤリ叩き潰してしまつた、彦左衛門始め、久世、渡邊、其の他五六人、事情を知つて居る旗本はヤンヤ／＼と讃めそやし、其の外の旗本連中は 甲「それッ不

埒な奴ツ」と、馬首を差し向けんとした時、彦「イヤ方々待つた、今日梅見  
とは眞ッ赤な嘘、實は此の仇討ちを見せんと思つて案内したのぢや、何んと  
姉弟は勇ましいものでござらぬか」本所黨の旗本は呆ッ氣に取られてボ  
カインとして居る、彦「ヤア芽出度々々」と、彦左衛門は扇を開いて讀めそ  
やす、五「ヤヨ、姉弟、大久保彦左衛門殿なるぞ、御禮申しあげよ、要ハ  
ッ大久保様でございましたか、いろ／＼御配慮に預かり有難うございました  
彦「イヤ芽出度い／＼、ごうちや方々其の邊で一杯遣らうではないか」と、  
何れも馬丁に馬引かせ、近所の茶店へ立ち寄つて一服、彦「イヤ、今日の遠乗  
りは何よりも面白かつた、高泉兄弟、ごうちやな、面白いではないか、主  
ハッ……」と、云つたぎり、兄弟は妙な顔をして居る、其の内に彦左衛門は  
五郎に改ためて對面する旨を云つて、一同と共に馬を返へして江戸へと立ち歸  
つた、姉弟は三人の鬻を切つて携つさへ駕を備ふて馬喰町へ立ち歸り、亭

主藤兵衛に委細を語つて喜ばせ、翌日主従及び姉弟の兩人は駿河臺の  
大久保屋敷へ出かける／＼禮を申し述べた、姉弟は一度國許へ立ち歸られ  
ばならぬので、旗本等より錢別として路銀を恵み、五郎よりは十兩の金子を  
與へ、姉弟は涙を流して天風五郎の恩を謝し、再會を約して大久保屋敷よ  
り國許差して立ち歸つた、親戚の者は大いに喜び、早速主君へ御目通り  
して委細を申しあげると、主君南部公は殊の外姉弟を讀められ、改ためて  
要三郎に父の名及び食祿を相續させ、家臣として用ひられ、姉お雪には殿の  
命で、家中老臣の次男の許へ嫁した、尤ともそれはこれより後の話である  
彦左衛門は五郎の妙術、大仙の力量を惜しみ、是非とも仕官するやうに勸  
めたが、五郎は實を申せば、拙者ば北條家の大導寺駿河守の家臣、いまだ  
主人持ちなれば、又仇討ちの上ならではお返答することは出来ん、大  
仙は主人の五郎と進退を共にするもの、お勤めには應じ兼ねると断はつた、

彦左衛門は五郎を殊に惜しみ、無理に引き止め十日ばかりは滞在をさせた、其の内に五郎の討上山源左衛門といふ妖術遣ひは、一度江戸の地へ来たがどうやら中國路差して出かけたといふことをチラリ聞き込み、彦左衛門始め知己の人々に暇を告げ、再會を約して江戸の地を發足した、泊り重ねて相州小田原の城下へ乗り込んで来た、其の當時小田原城は大久保相模守の城下、主従は小田原城を見物に出かけ、五郎はこれが主君の居城地であつたかと、それにつけては父駿河守、兄新四郎の事を思ひ出し、轉た懐舊の涙にくれ一夜城下に一泊、道中名代の箱根山の嶮岨に差しか、り、頂上の權現堂に參詣せんとすると、石段の下のところは屋臺店の蟹のやうにシヤツチヨコ張つた、一人の浪人……といふよりも非人に近い、ホロ／＼の風體、顔は滿面髯だらけ、大小刀は朱鞘の天秤棒のやうな長い奴を横たへ、グイッ／＼と兩人の方を睨めて居る 五「ハ、ア……居る／＼、貴様のお仲間が……」

大「イヤ、お仲間とは酷い……私しはあんなにまで薄汚なくはなかつた……然し大きな奴ではござらぬか 五「ウ、ム……少しは名ある奴であろう 大「宜しい、拙者が一ツ腕試し…… 五「ハツハ、ハ、負けるなよ 大「ナアニ、大丈夫……」と、鐵棒ドスン／＼突つて近よつた。

◆オ、貴公は坊主山か

件のボロ武士は階段の中央に座り込んで動かうとはしない、此方雲嶽坊大仙は又平氣で上がらうとする、鐵棒の先きが相手の足にチヨイと當つた 浪「コラノ、坊主、待て、坊主なんだ、ボロ…… 浪「ボロとはどうだ、第一そんな火箸のやうなものを引き摺つて歩き、乃公の足に當てながら黙つて通る奴があるか、それ相應挨拶して通れ 大「馬鹿奴、第一道の眞ん中に大きくなつて居るといふことがあるか、退け 浪「増入……小癩なこと



を云ふと、坊主頭が飛ぶぞよ 大「なにをッ……此の鐵棒が目に入らんか  
 浪「ハッハ、い、寢言云ふな、笠の臺の飛ばぬ内に、早やく行け〜大  
 此奴ッ、貴様こそ寢言を吐かすと打つ潰すぞッ 浪「ハッハ、い、貴様は餘  
 程命の入らない奴と見へるな 大「何を吐かすぞッ」と、氣早やの大仙、バ  
 ラリ鐵棒振り被つた 浪「オ、オ、遺り居るな」と、スツクと突立つた 大  
 汝れッ……」と、ビシ〜リ打ち下す、ヒラリ〜二三度體を躲してゐたが、  
 忽まち其の先をグツと引ッ掴んだ 大「ヤア此奴ッ……」と、大仙案に相  
 違して引き放さんとするが、相手はナカ〜の大力、マゴ〜すると反對に  
 分捕れそうだ 浪「汝れッ 大「此奴ッ……」と、争そ〜内に、相手の力  
 が勝つて居たものか、ドツと分捕られ、ビユ〜と反對に薙ぎ立てられ、これ  
 はと驚ろいて 大「ウワー大將、奥の手〜 浪「ナニ、大將、奥の手だ……  
 ……何を吐かすぞッ、サア坊主、許しは置かんぞ、覺悟せいッ」と、隙なく打

ち込む、これを眺めた五郎直信 五「ホ、オ、大仙が鐵棒分取られるやう  
 では餘程の奴だわい……コリヤ面白い……ヤア〜それなるほろ〜よく  
 も我が家來の鐵棒を分捕り居つたな、さ〜返せ 浪「ナニ、家來だ……誰れ  
 が鐵棒を返すものか、ぐつ〜ぬかすと、坊主諸共打つ潰すぞ」と、ビユ〜  
 ビユ〜と薙いでか〜つた、五郎はバツと一間ばかりも飛び上つた 浪「オヤ  
 ッ……此奴よく飛ぶ奴だ……汝ッ〜ます〜烈しく打ち込んだ 五「さア  
 來い」と、五郎は鐵扇一本で扱かふ 浪「汝れッ鐵扇で……小癩な奴」  
 と、ビユ〜と、それがナカ〜烈しい、流石の五郎も身を躲す間もない  
 ので、御得意の天風、ビユ〜と吹き巻くると、側に呆れて見て居た大仙も  
 共にコロ〜、忽まち馬乗りになり跨がり 五「サアさうだ、ボロ〜降  
 参したかッ、浪「なんの……誰れが……」と、尙ほも頼りに争そつてゐる  
 ところへ、ドス〜乗り込んで來た一人の男、兩刀帶して居るが、十徳様

なものを着た一人の武士、サット立止まつて兩人の争そひを見て居た、相手の浪人といふのはナカノ豪勇の武士、何時しか五郎を刎れつ返し、又も再び立ち上つて争そつたが、五郎がヤツと叫ぶと、相手の浪人は八方遠當の術にかゝつて頭轉倒、浪「オ、遣り居つたな」と、云ひながら宙にクルクルモンドリ切つて突立つた、件の坊主武士は編笠取つて割つて入り、乙「兩士暫らく……」浪「ヤア退け」五「危ぶない」乙「イヤ、少時々々、兩虎争そう時は、一方は傷つき一方は仆るとやら、仲裁は時の氏神、まづ拙者にお任せ下されまするやう……」浪「イヤ、ならぬ、退いた」乙「それでもござるうが、折角仲裁に這入つたもの、お任せが願ひたい」浪「して、貴様は何ものだ」乙「何をか秘さん、拙者は京都今出川の住人吉岡又三郎兼房と申すもの、どうぞお任せを……」吉岡兼房と云へば京都今出川に道場を構へ吉岡流小太刀の名人として、誰れしも其の名を知らないもの

はない 浪「フム、然らば都の吉岡といふ劍道の先生が」吉「如何にも……不肖のものではあるが、どうかお任せを……」浪「面白き勝負、止められるも残念だが……先方さへ承知ならば……」吉「イヤ、有難い……して貴公は……オ、貴公は天の風……」五「オ、貴公は坊主山か」吉「これは珍らしいところで御面會……」五「フム、あの時の坊主山といふのは、吉岡といふ劍道の先生であつたか」吉「イヤ、面目次第もない、イヤ、拙者は度々廻國、殊に角力は至つて好き、ツイ飛び入りなしたしたが、未だ貴公のやうな強い人に出會つたことがない、餘り脆い敗を取つたので、面目なく其の儘あの地を出立したので……」天の風とは假名、定めし天下に名あるお方ならん、ごうか御姓名をお知らせ願ひたい 五「イヤ、別に名乗る程のもではないが、野州の住人天風五郎直信と云ふものでござる」吉「オ、さては近頃名高き天風五郎……」フム……なる程、これは勝てぬ筈ぢや 浪「

フム……貴様が近頃一寸賣り出しの妖術遣ひの天風五郎といふ奴か  
 いふ奴かとはどうだ、そういふ貴様は何ものだ 浪「ハツハ、い、乃公の名  
 を聞いて驚ろくな、何をか隠さん、北條家の浪人 和久半左衛門とは乃公の事  
 だ 五「エツ……和久半左衛門…… 半「どうだ、驚ろいたか、一體其處  
 に居る弱坊主は何んと云ふのだ 大「弱坊主とはどうだ、乃公は雲嶽坊  
 大仙といふものだ 半「ハツハ、い、い、くら威張つても、貴様のやうな弱虫  
 では相手にならん 大「北條家の和久でもなんでも、そう聞いたら勘辨なら  
 ん……サア来い…… 吉「イヤ、暫らく、マア、何れも天下の豪傑  
 揃ひ、荒いことは止めにして拙者持参の酒を一杯酌もうではござらぬか」と、  
 吉岡兼房齋が取りなして 半「ウ、それもよからう、酒だ、 五「然し  
 此處ではどうも興がない、彼處に見へる茶店へ参つて一杯遣らう 半「賛成賛  
 成、イヤ、天風は話せるわい 五「ハツハ、い、何を云ふぞ」今までの争を

ひは恰かも忘れたやう、一同少し離れた茶店へ入り込み、改ためて挨拶を取  
 り交し、アイト、飲み始めた 吉「然し和久先生、御貴殿程の豪傑、千石や  
 二千石なら何處でも仕官も出来やうに、まだ御浪人でござるか 半「如何に  
 も……我れ北條家没落後は、何處へ仕官するをも好まず、斯く永年浪々  
 なし、酒を唯一の友として其の日を暮らして居る 五「ウ、流石は四條家  
 名代の豪傑、其の意氣には感心した、半「ハツハ、貴様に讃めて貰  
 つても別に有難くはないが、天風五郎とは本姓か、又假名か、見は妙な術  
 を遣つて乃公を吹き飛ばしたが、あれは一體何んといふのだ、近頃流行る忍術  
 といふものか 五「イヤ、何を隠さん、天風とは假りの名、實は北條家に少  
 しく由縁のあるものぢや 半「フム……北條家に由縁がある……して何人  
 の息子が兄弟か 五「今になつては隠すことはないが、信州松井田の城主大  
 導寺駿河守直磐の一子でござる 半「エツ……では大導寺駿河守殿の

……然し駿河守殿の一千新四郎といふのと御家没落の當時、未だ十八才の若者であつたが、名代の豪勇、敵味方に其の名を轟かして居たが、惜しや父駿河守殿と共に討死なされしとか 五「イヤ、其の弟……五男の五郎と申すものでござる 半「フム……大導寺殿の……なる程、そう云へば何處やら駿河守殿に似た面貌がある、して今まで何處に居られ、今では何處へ仕官して居られるか 五「イヤ、仕官はいたし居らぬ……お家没落の當時は只だの二才……忠僕長谷川九郎左衛門なるものに助けられ、野州雀の宮在茂原新田に生ひ立ち、七才の當時大蛇の爲めに吞まれ、圖らずも仙人に助けられ、日光裏山に於いて十年間修業したのが、此の天風の術、よつて當時は天風五郎と名乗り居るのでござる」と聞いて、吉岡、和久の兩勇士は云ふまでもなく、家臣の大儀も聞いていよく不思議に思つた。

◆奇麗に叩き潰してくんな

半「フム、それは強い答だ……然し浪人とは頼母しい、してこれから何處へ行くのだ 五「されば、其の忠僕を妖術遣ひの上山源左衛門といふ山賊に殺され、我が義理の姉を龍田川大藏といふものゝ爲めに引ッ擡はれ、斯く廻國して居るのであるが、貴殿等は諸國廻國して居られるそうだが、さる人物は聞かざりしか 半「フム……乃公は聞いたことはないが、吉岡先生はさうだ 吉「上山源左衛門といふのは蜘蛛の妖術遣ひではござらぬか、 五「左様々々、して先生は御存じなるか 吉「それは越後の新發田でチラリ其の噂を聞いたことがあるが、なんでも中國路へ參つたとかいふ話してござつた 五「フム……中國路とは拙者もチラリと聞いたが、矢張り中國路へ參つたか、して先生や和久氏はこれから何處へ 吉「拙者か、拙者は急に下總